

5日から1週間の間にクレオソートを上げなければ、海藻などが全部死んでしまうとってはいましたが、ウニ、タコ、小魚、みんな渚に寄ったものさ。そして、食べるにいいかと思って、拾ってきては中のいいところを取り出して炊いたところ、クレオソート臭くて食べられないのさ。ただ見るだけのことでした。

干珠丸は波がきて少し浮いたんでしょ。サルベージで少し引っぱると歌露の佐々木梅太郎さん（故人）の家の前の岩に寄せられて、そこで沈みまして。やはり船に穴があいたために沈んでしまったのでしょ。浦河、室蘭から潜水する人とか来て、船をばらして、歌露に雑品屋がきて、船の鋼材を買ってました。六分、七分のワイヤーで丘（陸）から引っ張って鋼材を上げてたわけさ。それでも、全部上がらないわけ。歌露の前はホッキのいい漁場だったのです。ちょうどその上に座礁して。近年でもホッキのマンガン（ホッキを掘る鉄爪に網がついた道具）引けば鋼材に引っ掛けたり、



台湾船の座礁（歌別：平成9年10月）

壊れたりしました。商売にならないわけさ。鋼材はまだ底にあるんですよ。

クレオソートがこの沿岸ずっと埋めつくしました。それを部落では全部モッコで担ぎあげて、1週間ぐらいたったクレオソートは表面が乾くから取りやすくて、モッコに入れて女の人が浜に上げて、男の人が三尺から五尺の深さ、幅四尺五尺の穴掘って、海岸線ず〜っと穴掘って、そこにあけて、また渚に行つてまた担いでくるんです。崖の下の浜の隅に穴を掘ったんですよ。

クレオソートは時間が経つと固まってダンゴみたいなになるんです。砂浜だと取りやすいんだけど、バラシの所は「しょって行け」といわれても重たくてできるものじゃなかった。「やれやれ、今日でいいかな。」といえ、ば、「明日も。」って、「やあやあ、明日はもうなかべ〜。」って言えば、「ここは、よかども、そっちはまだある。」って、歩いているうちにゴムの短靴が溶けてだめになってしまう。

この仕事で大きな怪我した人はいなかったと思います。

たまたま、時化になって浜が痩せると、クレオソートが出てくるのです。黒土のようにみえるんです。3

年ぐらい前まで時々出ていました。ここらの海岸に穴掘らなかつた所ないですよ。今でもクレオソートが残っているところあるんじゃないですか。

浜は痩せてしまつて、4~5mもなくなりましたよ。だから護岸作つたし、埋めたクレオソートは、もうなくなっているかもしれません。

クレオソートは下（しも）の方は油駒ぐらいまでで、多少流れても薄かつたと思う。

クレオソートの匂いで魚とか、ウニとか、ムイとか、くろがい（イガイ）とか死んでしまつて、渚に寄ってしまったもんです。上の方はず〜と広く流れてしまいました。

部落中で、みんな総出で、男も女も、子供も、爺も婆も、働ける人は全部、年寄りも出て汲みました。「しょえない人は集めてけれ。」って、2~3週間ぐらいかかりましたね。毎日、毎日。

沖合は1年も2年も、全然うまくなかつたですよ。海は上げ潮、下げ潮、はらい潮といつて、潮が流れるからね、その匂いで魚がみんな死んで浜に寄つてきたんでしょさ。タコなんてたいしたもんですよ。海岸に寄つたタコ。本当に数え切れない。100や200のタコじゃないから、アブラコ、ハゴトコ、ウニなんて敷かさつてこの辺は上がったもんですよ。

3年ぐらいたつて、影響ないと思つて、刺身にして食つてみれば、クレオソートの匂いすごかつたよ。3年や4年、5年では食べられなかつた。

くろがい（イガイ）なんてやつと最近岩に見られるようになりましてね。少し残つたのがやつと繁殖できるようになつて、やつと、4cm位になつています。クレオソート流れてからいなくなつたの。その前なら、なんぼ採るつて食べたかわからないですよ。ライスカレーにして食べたりして、親戚兄弟に土産として持つて行つて、くれてやつたりしたもんですよ。回復するのに今までかかっている。

被害の補償はなんもなかつた。組合では「やらなければ我々の資源が揚がらなくなる。」と言つて、一生懸命やりました。

その時分、人口も少ないし、もともと金かけないで暮らしてたし、なんだかんだコンブ採つて、わしも16からコンブ採りましたが、一人で400駄も500駄も採りましたから、食べるのはどうやらそれで、イモやカボチャ作つてたし、あまり米を食べている時代ではなかつたし、1日に米3食、食べる人は少なかつたでしょ。2食たべればいい方だったのじゃないですか。我々なら1食で、朝晩おかゆで、ダイコン菜っ葉とか、入れて食べたもんだからね。今だったら、みんな出稼ぎだね。

クレオソート担いで穴に入れるつたつて、本当にヘコタレ、ヘコタレでした。

（平成7年1月採録、川合義仲、中岡利泰）

# 田中サダ子 大正7年(1918年)生

旅館で働く

生まれたところは社台で、たどってたどって、平取ってところに行って、浦河の向別というところにきた。そしてキナシベツに住みついた。父親の仕事があっちこちだったから、まともに学校に行ったのは3年位かな。その頃はそういうのが多かった。子守りの奉公に出されたりした。

ここにきたのは17~18才の頃だと思うが、ニコニコ旅館に入ってそこで2年くらいいた。私は台所周りの仕事をし、閑があれば畑に使われた。

お客さんは結構いたね。旅館の数も結構あったし、ニコニコ旅館の隣にかめやさん、新井旅館もずっとやっていた。



幌泉市街地(昭和30年代)

今、商工会のあるところは、林という旅館だった。その後、横屋さんといって病院だったが、先生が亡くなり、紺野病院になった。蛭子という床屋もあったし、沢町のあたりはにぎやかだったよ。映画館もあったね。

親の炭焼き

親は、炭焼きしていたから、3年か5年してその山終わったら、違う山に行くという生活していたが、キナシベツが最後だった。キナシベツの奥の方は、隣といっても少し離れたところに1軒あった。

親は炭窯を自分で作って、経験も積んできているもんだから、おかしい炭焼かないで、良い炭だとほめられていた。

私は、ニコニコやめて、一度家に戻ってそこからここに嫁いだ。20歳くらいの頃だね。

田中の鍛冶屋

田中の爺さんは、ここ南部家に住んでいて、最初は漁師をやっていたが、馬車追いやって鍛冶屋になった。嫁にきた頃はまだ馬追いやっていた。

鍛冶屋をやるようになって、じいさんはクワとか草削り、火バサミとかなんでも作っていたね。ストーブ

の輪が焼き切れて落ちたら、それを作ってくれとか、ストーブなんかも作ってた。自分一人でコツコツやっていたわね。たまに大きいものをやるときに手伝ったりしたが、あまり工場には行かなかった。日銭が入ったが、何千円とかいう、そんなお金は入らなかった。好きだったからやっていたんだらうね。70くらいまでやっていて、89歳で亡くなった。

南部家の鍛冶屋っていわれていた。鍛冶屋って言えばもうわかるんだわ。

家族

子どもは6人だけど、今は欠けて、男1人と女3人になったね。楽しかったことなんかなかったよ、あのあたりは。

イモを食べる

働くこと、それしか覚えていないね~。食料を作らなければね。マタヌマの山を開いて、カシワの木やササワらだったけど、今でも一反歩あるんだわ。そこにほとんどイモ作って、何一反歩もイモ作ってたの。肥やしてないから、生き物のいる所は、馬糞とかあるけど、馬糞は手に入らないし、浜からゴムっていう草持って行って入れてね。それ入れるとイモが大きくなるけど、美味しくないの。だけど、大きい方がいいしょ。小さいより。蒔いて食べたり、食べさせたり。

主食がイモ。ご飯の糍(かて)、農家の人は豆とか入れたけど、我々はイモ刻んで米にまぜてご飯炊いた。おかずはやっぱり野菜だべね。春になれば山に青物採りに行ってワラビやコゴミ等とってきた。そんなものばかり。凧いば、魚はずしに行ってもらってくるの。

マメしくすれば、魚は手に入る、手伝いに行けば貰ってくるんだわ。配給制度だったし、米は、浦河の奥の農家まで買いに行ったり。

みんな、そうやって働いていた、かければきりないんだらうけど。

水産加工場

ここらでは、魚がとれると馬車で配った。市場で魚を揚げると、馬車追いが行って積んでくるわけ。水野繁治さんなんか、スケソなんて獲れると、市場から積んで加工場におろしていた。あの頃は結構とれたからね。私も子どもがまだそんなに大きくならないうちから、加工場で使われ十何年いたよ。この辺にも加工場があって、タコなんか大漁でさ、夕方から夜中にかけて、寝ないで処理しなければ鮮度落ちるから、寝ないでタコ炊いて、朝までそれ処理して、色つけて酢だこにして、目方量って樽に詰めた。札幌の方に出していたんだらうね。今みたいな大きい保冷車みたいなのあるっしょ、あんなので運んでいった。

## 氷工場

氷はカネサの工場があった。この奥の上山さんのちょっと横に、氷を作るため池があって、冬になると氷を作って1月~2月に切り出し、カネサの冷蔵庫に保管し夏まで持たせていた。川村さん兄弟がやっていたが、今はもう1人しか残っていないもね。川村正義さんという。

## 水産加工

この辺は魚を扱う加工場が多かった。すぐそこ、佐藤さんの漁場のあるところに、山形さんといって、今の山形さんの親戚になる人が、大きな加工場持っていた。

道路はさんで向こうに大門さんという加工場もあった。肝油工場もあったし、三石からきて加工場やっていた人もいた。名前は忘れたが、三石船団って言っていた。

スケソは開きにして、この辺には家がいっぱいあったし、灯台山があってお日様当たらないから、浜に持って行って“はせ(稲架‘はさ’のなまり)”作ってスタレの上で干し、開きタラにしたの。タラコも作ったよ。

## 灯台山があった

灯台山があった頃、灯台崎の波際歩くのは死に物狂いだった。波あれば、そこ歩くのに、しゃっこくて、波のしぶき飛んできて、うちの今いる息子が、学校に行くときなんか大変だった。家の前は道路ももっと低かったし、橋もなかった。浜はずっと沖の方で。今、佐藤水産のあるあたり、家がいっぱいあった。ヤマヨの崎っていうのは、もっと沖の方だった。磯物、海藻なんか自由にとれたから採りに行ったよ。マツボやフノリ、ミミなどね。何年も前から、権利ないから入られないの。もうそんなこともできないから、あきらめているけど。



灯台山のあった頃(昭和41年)

## 出産

若いときは、病気などしたことないね。洞口さんの病院あったけど、子供を持つたって、産婆さんに家にきてもらって、家でしたし。

## 南部家

南部家というのは、南部衆が大きな船で来て、漁していたよ。春になれば来て、秋になれば戻っていった。(平成17年3月5日採録、小川とく子)

## 吉田スエ 大正8年(1919年)生れ

収録の範囲：結婚(昭和13年)から

配偶者の死去(昭和42年)まで  
室蘭から幌泉へ嫁ぐ

私は室蘭高女を卒業してすぐ、北海道拓殖銀行室蘭支店に勤めましたが、両親から勤務は3年のみとの制限をつけられ、20歳には結婚すべきと言いつ渡されました。「好きなだけでの結婚は最後に自分が泣く。」というのが親の口癖でした。

幌泉のカネサ吉田商事との縁は、私の実家が酒や荒物雑貨の小売商をしていたことから出入りの問屋が、幌泉のカネサ吉田とも取引があったことによるものです。その酒問屋の営業マンが橋渡しをしてくれて、私が20歳のとき、カネサ吉田のひとり息子だった正治(後に3代勘之助を襲名)と結婚することを親が決めたのです。

嫁入りの日、昭和13年11月上旬、両親や親戚の人たちと室蘭から初めて幌泉に向かいました。苫小牧から様似まで開通したばかりの日高線(昭和12年開通)に何時間も乗り、様似駅でバスに乗り替えて幌泉に向かったのですが、行けども行けども狭い砂利道で、断崖と波がすぐそばに迫り、トンネルは岩を掘ったままの姿に一行は不安を募らせ、この先に本当に市街があるのだろうか心配になりました。

小1時間ほどして粗末な家並の部落(南部家)を過ぎ、大きなカーブを回って、港の防波堤が見え、立派な二階建ての建物(西川商店、林旅館、かめや旅館)などが目に入ったとき、一行は安堵の声を挙げたのです。こんな道の先にこんな市街があるなんて!

## 戦前のカネサ吉田商店

カネサ吉田は、当時は幌泉で一番大きな商店で、食料品・衣料品・雑貨など、田舎のデパートのような感じのなんでも扱う店でした。丁稚奉公の住み込み店員も何人もいて、三度の食事の賄いにも3人の女中さんがいたほどです。

庶野や小越(えりも岬)など郡部からも羸屨(ひいき)の客が馬で、ひっきりなしに来店するのですが、義母は客にも昼食を持て成すので、昼時はいつも知ら

ない顔を含め20人ほどがテーブルに座っているので、最初の頃は戸惑ったものです。

炊事や風呂を沸かすにも、役場の坂の途中にあった小林さんの裏の井戸から、女中さんと一緒に水桶を天秤棒で担いで運んだのです。途中で水がこぼれて半分になるのです。初めての経験の私にはとても辛い仕事でした。

私が嫁いできたとき、砂原武士さんや内藤由太郎さんは世帯を持って独立していました。淡路幸蔵さんは、姉も母親もカネサに住み込みで働いていました。

その頃には、昭和10年の幌泉大火から3年が経過していたので、表通りは立派な建物が建ち、カネサ吉田も山側に二階建ての店舗を立て替え、土蔵も3棟並んでいて、米、味噌醤油、呉服別に分けて格納していました。「いざ、というときは米を持ち出せ。」が義父の方針でした。大火を体験した教訓からでしょう。

当時の店構えは、現在の信金えりも支店隣から役場の坂までが店舗でした。後に酒・米・食料品、荒物雑貨を浜側（現在の生協えりも店の場所）の店舗に移動したのです。現在の信金えりも支店の所には、太田商店が立派な店舗を構えていたのですが、のちに経営に行き詰まって、戦後、その店舗は国鉄バス駅舎になりました。

#### 戦時中の経営・配給

米や衣料品は、戦争が激しくなった昭和18年頃から「統制経済」になり、一人一人が点数制で、役場が発行する切符がないと購入できなくなりました。店頭からはすべての商品が消え、米の配給日などは、屋外に長い行列ができたものです。私たちが畑に蒔いたイモやカボチャのお陰で、米不足を補い、育ち盛りの子供たちに食べさせることができました。

夫は横浜海兵団に召集されて軍艦に乗務していたし、若い店員の多くも兵隊にとられて、閑散とした店内は、かつての賑わいがすっかり消えてしまいました。配給のある日だけが、われ先にと押しかける人々に混雑していました。土蔵もすっかり空になり、ときおり浦河警察署から経済警察が闇物資を隠していないか査察に来ていました。

#### 戦後の配給と回復

昭和20年8月の敗戦から、戦後も何年か物資不足が続いていました。足袋や長靴もまだ配給制で、長靴などいくらかの物資が入荷すると、町内会長さん達が、あらかじめ調査した情報を持ち寄って集り、配給先の家庭を決めていました。呉服など衣料品が店に出回り始めたのは昭和25年頃からでしょう。

一人息子で大事に育てられた夫・正治は、とても我侷な性格でした。戦前、沢町には、数軒の割烹・料亭があって、けっこう繁盛していたようです。結婚当初、

夫は仕事もそこそこに、遊ぶことに熱中して、毎晩のように「牡丹」など、沢町へ通い詰めていました。酔うとすぐ寝る癖があるので、私は、料亭へよく電話を入れて、座敷で寝入ったときは、毛布の一枚でも掛けてくれるよう頼んだものです。

#### 町長選挙に立候補

昭和37年10月に長岡隆一町長が急逝して、町長選挙になったとき、私は立候補のことで夫から相談を受けた記憶がありません。当時、町議会議長だった神田正秋さんが、当初は主人の町長選出馬を応援すると話していたそうですが、告示直前に対立候補として神田さんも出馬するとの噂が流れたのです。

主人は負けられないと、猛烈な選挙運動を展開したので、私も出馬するからには主人を当選させたい一心から、親戚・知人にも応援を随分働きかけました。

#### 町長夫人として

結果は大差で当選できたのですが、それからが大変でした。カネサは私たちの代になっているのに、町長になったことで、主人は商店経営にいっさいタッチしなくなり、カネサの経営は川村貫一さんを社長に据えて、社員に任せきりでした。私も結婚式の媒酌をはじめ、冠婚葬祭に出る機会が急激に多くなりました。

町長1期目の昭和39年9月、上歌別に町の水道水源地を造ることで、当時の田中牧場の経営者で、新潟県出身の田中彰治代議士といさかいが生じた時は、つらい思いをしました。業界新聞や怪文書がばらまかれるし、相手は衆議院の決算特別委員長経験者で、飛ぶ鳥も落とす勢いのあった人ということでしたから。なんとか収拾がついたときは、心の底から安堵したものです。

夫の生活は町長になってから、ますます不規則でした。町内の小さい漁協を合併して創設された、幌泉町漁業協同組合の初代組合長になって、飲酒の機会はますます増えました。町内の飲食店で役場や漁協の職員、議会議員、後援会の人達と毎夜のように宴席でした。それに町長として札幌への出張も増え、「すすきの」での飲食の機会も多かったと思います。

自分が開設した町立診療所で佐久間先生にも診察を受けていましたが、心臓がときどき苦しくなるのを我慢して宴席に出ていたのでしょう。昭和42年11月、出張先の札幌の旅館で「心筋梗塞」で急死しました。小学校体育館で立派な町葬を執り行ってもらいました。夫は「太く短く生きた」生涯だと思います。

（平成17年3月2日採録、神子島清八）

## 中野 勇 治 大正8年(1919年)生れ

独航船

岬生まれですが、自分で漁業始める前は、旅で稼いでました。二十歳で、徴兵され満州に行く前に、随分と稼ぎました。独航船です。国後や北千島へ行ってきました。函館の船に乗ったり、他の稼ぎの船に乗ったり。給料は決まっていますが、漁あれば歩合制で、1匹捕れたら何銭って決まってきました。月に200万円になったこともありますよ。

4月から8月にかけて船に乗るんです。4月の最初はタラ。タラ1本で歩合が5銭でした。大きなタラでね。タラは船泊りで、沖で3日も漁すると船一杯になりました。そしてマス、サケ、ベニになります。歩合はマスだと1本2銭、ベニだと5銭というように決まっています、歩合を乗組員全員で分けるんです。もちろん、船頭なんかは配当がいいわけです。私は機関として乗っていました。守山という人の船に乗っていて、この人は個人で5杯ぐらい船を持っていました。

奥千島にはいい魚がいて、たくさん獲れました。越境ですよ。私たちは国後に本拠地があって、船出せば1週間何万匹も獲って船倉が一杯になって、戻るんです。基地には缶詰工場があって、女工さんが千人もいた。ベニ・ギンは塩して、マスは缶詰でした。

出征

二十歳で満州に行きましたが、演習で怪我をして戻ってきました。陸軍です。その後、再度徴用がきましたが行きませんでした。

戦後の漁

戻ってきて、トロールとかの船に乗ってました。その当時は、ツブやエビといった船はなかったんです。

終戦後はニシン場へ働きにも行きました。えりもではタコのばけ縄にも乗りました。その後、自分で船を持つようになり、ツブ、カニです。カニはいいときは、1日で1トンもの水揚げがあったこともあります。

(平成17年2月13日採録、中岡俊子、中岡利泰)

## 百人浜大下の砂金

中野 勇 治 (大正8年生れ)

柳田 久 枝 (昭和8年生れ)

戦後、今から20年以上も前、百人浜の大下、「クマソの沢」と呼ばれている浜で、砂金を採っている人がいました(中野談)。

最初の方は、寄り木で掘建て小屋を作って暮らしながら砂金を採っていました(中野談)。渋谷という人

だったかな(柳田談)。

その後、岬の田頭岩太郎(でんどう)さんが2~3年採っていました。見に行くと、米粒大やその2倍ぐらいの砂金を見せてもらいました。1g3,000円位になるといい、働きに行くよりもいい(出稼ぎに行くよりもお金になる)と言っていました。潮が引くと毎日採っていました(中野談)。

最初に採っていた人が採った砂金を田頭さんに売ったかもしれない(中野談)。

その後、鹿児島県の佐々木晶康さんが、26年ぐらい前から3年ぐらい、半年づつ、柳田旅館に宿泊して砂金を掘っていました。車のない人でしたから、私が、現場まで送ったり、幌泉まで迎えたりしてました。大分に鉱山を持っている人で、近年まで手紙などで交流がありましたが、もう90歳を越える高齢で、息子が妹の所に引っ越すということでした。俳句をやる人なので交流が続いたのでしょう。(柳田談)

(平成16年採録、中岡利泰)

## 沼久内キミ 大正8年(1919年)

スミヤコタン(和里)生れ

スミヤコタン

私の親は、明治時代にスミヤコタンに入植しました、当時は岩田さん、田中さん3軒が住んでいました。

先代も婿さんをお願い(岩手県雫石)、私も笛舞の横山さんから婿さんをお願いしました。

子供は、女2人、男3人おり、孫6人ひ孫もおります。子供たちは大阪、横浜など、みんな内地で暮らしています。

コンブと馬とスモモ

親の後を継いでコンブ採り(人を頼んで)と牧場を継いだが、その他炭焼をやったり、いろいろな仕事をした。今思えば牧場をやめて、コンブ採りをしていれば良かったと思っています。

牧場には、大きなスモモの木が5本くらいあり、たくさん実がなっていました。コンブ採りが終って、山に帰れば、スモモがバラスを敷いたように落ちており、私たちも食べたが、浜に行っている間に、クマが馬を食って、デザートかわりにスモモや果物を食って、帰ったこともあります。スモモの大きな切り株は、今も残っています。

家のそばには、ヤマブキやフジの花が咲いていたが、今も咲いている。そこが我が家のあった跡です。山の仕事もやめルンペンしていたころ、砂原水産の加工場で働いたこともあります。

学校

小学校は、幌泉小学校に通いました、クラスは40

人くらいの生徒がいました。天野先生、奥山先生が記憶にあります。

スミヤコタンから歩いて学校に通った。道路はなく、細い道を2時間くらいかかったと思います。学校は現在の役場の所がありました。

友達は、会田七枝さん、吉田孝さん、柳ハツエさんたちがいました。

小学校の時に浦河や広尾には行ったことがあります。

#### 和里の人

戦後、和里地区には岩田さん、田中さん、今井さん、渡辺さん、坂本さん、村上さん、森さん、進藤さん、中野さん、尾田さん、石川さん、千葉さん、甲田さんらが住んでいました。

和里は、暖かく果物が良く育ち、岩田さんのところではスイカ、アジ瓜などたくさん採れたが、暖かすぎて牧場にはあまり向かなかったような気がします。また、柏の木(カシワ)の根が頑固に張っており開墾には随分苦労した。

運動会時期になると、ご馳走の煮しめにするタケノコを採りに目黒に行った。本町に住んでいた金田一さんという方が行方不明となり、消防団も出動して捜索したが発見できず、気の毒なこともあった。

#### ホタル

アベヤキ川の川岸にホタルが飛んでいた。

#### マグロ

マグロ船がきて、マグロがたくさん獲れて、港いっぱいには揚がったのにはビックリした。マグロの肝臓の肝油工場があったと思う。

#### 砂金

砂金採りだが、叔父がコンカネの沢に揺り板を持って採取に行ったことがあるが、あまり採れなかった、苦別の川は少しあった。

(平成18年3月1日採録、新松隆・新松信子採録)



住吉神社祭典神輿渡御：南部家(昭和16年以降)

## 田中清勝 大正9年(1920年)生れ

#### 咲梅

「咲梅」アイヌ語でサクパイいう。その咲梅に一番先に入ってきたのが、ヤマヒチ沼久内さんの祖先。内海さんなんかも古い方です。

夏場は、目黒で旅館していた人が、建網の権利持って咲梅で定置網をしていました。

常に咲梅は十数軒の家があり、家族も多かったので、子供たちが集まって遊ぶことには不自由はなかった。

#### 通学

黄金道路ができるまでは、学校に通う道もなく、砂浜を歩き、また、磯などの上を歩いて2時間かかったと思う。波の高い日は学校を休む。そんな日が冬場は特に多く、ある時はフンコツトンネルの上を山越えしたこともあった。

黄金道路の入口のところまで砂浜や磯などを歩き、そこから山路に上って行った。現在のドンドン旅館の裏を通り、美島生活館、庶野診療所の裏側に路があった。今の警察駐在所の所の漁協倉庫が学校だった。その頃の履物は、親の作ってくれる草鞋、外履きも上履きも。親たちは時々庶野へ用事で出る、そんな時に一緒に帰れる一年生の頃はとても嬉しかった。

咲梅ではみんなコンブで生活していた。コンブを採るには干場が必要で、干場がなければ権利を得ることができない。

道路のできる前、海岸線の浜は大変広く、今と違って、コンブは全部浜に干した。黄金道路ができ、戦後道路工事が多くなり、道路がよくなるにつれ、海岸はやせ細ってコンブの干せる場所がなくなった。



高波を受けた国道(目黒地区、昭和41年か)

#### 燕穴とコンブ干し

昔は燕穴といった大きな岩穴があって夏になるとつばめ(イワツバメ?)がたくさん巣を作っていた。

その燕穴の前の砂浜にもたくさんのコンブを干したものだ。夕方になりやわらかくなるのを待って、“てがら”という蝶々結びの様な形に結んで、横 50cm か 60cm 位のものを何個もまとめて、1.5km 位の砂浜をコンブ小屋へ、何回も運んだものだ。

#### コンブの出荷の食料品

製品にされたコンブは庶野の仲買を通し、函館の間屋が汽船で咲梅などの沖まで取りに来た。そんな時は、咲梅はもちろん白浜などの人も協力して磯舟にコンブを積んで沖の汽船に運んだ。その見返りとして米などの食料品を受け取るのだ。黒砂糖、味噌、醤油などは四斗樽できたものさ。お菓子は兵丹バン位のもだったから、黒砂糖がお菓子がわりでした。

#### 黄金道路の工事

黄金道路の工事には囚人とか「タコ」といわれる人が多かったと思う（「タコ」というのは自分自身の身を喰う借金などをして働いてもお金のもらえない人）。仕事が厳しくて逃げる人もいて、山越えをして咲梅の沢に隠れていた人もいた。咲梅などの人も黄金道路の工事で働いた。

#### 三陸沖地震津波

昭和 8 年 3 月の時、二人の兄がタコはえ縄漁で庶野の大場さんで働いていた。次の漁の仕度の縄さやめをしていたら、大きな地震がきたので、津波が来るのではと家が心配になって、急ぎ咲梅へ向かったそうだ。

その途中、黄金道路の降り口で 1 回目の津波にあったらしい。1 回目の波はそれほどでもなかったようです。

降り口の下に家があって、その母娘が、波が引けたのを見て崎をかわした。住吉松次郎さんの家へ助けを求め家を出た時、2 回目の津波に襲われ、二人は流された。家に残った父親と兄弟は柱につかまっていた助かったそうだ。



チリ沖地震津波被害

(昭和 35 年：庶野漁港)

住吉さんの隣(100m 位離れている)に坂本さん親子の家があり、1 回目の波でその家は前側を波に持っていかれた。危ないと思った娘二人が裏窓から飛び出したが、その年の雪は近年にない大雪で、二人の娘は雪の中に刺さった状態で動きがとれなかったそうです。その時に、2 回目の津波に両親もろとも沖にもっていかれた。暗闇の海で助けを求める声を、二人の兄は何年たっても忘れることができなと言っていた。

戦時中、鉄などの供出があって、マルシメ長岡定次郎さんが持っていた刀などが、軍に全部持っていかれた。アイヌの刀も供出されたが「ナマコ(真剣でない)だから」と置いていった。その刀を義父が警察から鉈を作るといってもらってきた。

戦後になって家のコンブ小屋の二階に持ってきて置いていった。小屋の二階に置くよりもと思い、商工会に持っていったら「警察に届けなければ罪になる。」と脅かされたので、海に捨てると言ったら、捨てるのだったら置いていってくれと言われたので、置いてきた。(この刀、2 刀は教育委員会へ寄贈され、現在郷土資料館にて展示しています。)

(平成 16 年 3 月長岡菊也・長岡悦子採録)



エムシ(アイヌの刀)

(郷土資料館蔵)

## 中村 敬孝

大正9年(1920年)生れ、苫小牧市

### 家族

生年月日は大正9年9月2日です。静内の御料牧場で生まれました。父は山の仕事をしていました。山管理士でした。8人兄弟の次男です。兄は2歳ぐらいに肺炎で死んでいます。

### 戦時中、襟裳に配属

月寒に入るはずだったのに、旭川の兵隊に入ったんです。20歳のとき。昭和16年の3月1日です。部隊が何回か編成変えがあって、千島に行く部隊もあったんです。3回千島に行く部隊がありましたが、自分は3回とも旭川に残りました。千島には行けなかったんです。最後に残った部隊が「稔(ねん)」というんですが、そこに所属して、私がいたのが第3部隊で、襟裳(襟裳岬)に出たんです。昭和16年です。歩兵だったんですが、襟裳に出る時は経理で行きました。旭川から襟裳に出たんです。

部隊の人数は覚えていません。他にも苫小牧など他にも行っています。私の部隊が襟裳に行ったということです。100人もいたのかな？

### 襟裳での仕事

旭川からは汽車でした。襟裳に着いたら海軍が少しいました。本当に少し。海軍は電波探知機やってましたよ。電波探知機っていうのは、アメリカが来たなら、その飛行機を探知する、今でいえばアンテナみたいなものが建っていましたよ。そうしてね、襟裳の百人浜の方にね、漁師さんの市街地があって、そこはなにも採れなくてね、反対側の浜はね、ノリとか、ウニ、あのころはアサクサノリっていったものが採れてね、ゴザとかムシロに流すとね、そのまま乾くとね、醤油つけて食べて、おいしかったんですよ。

襟裳は私達いるときはね、あそこはハゲ山でして、幌泉の方へちょっと行ったところで、ヤキベツというところがあって、大坂という漁師さんがいて、時々、魚を仕入れに行っていました。

あのころは雨降るとすべて歩けないんですよ、ハゲ山だから。

一般の兵隊さんはね、ジグザグのね壕を掘って、穴掘りやってたもんです。私は経理にいたもんでやらなかったけれど。壕は爆撃を受けた時の衝撃を和らげるのにギザギザにしたんです。大砲の台なんかは作らなかったです。壕だけでしたね。日高から苫小牧の沿岸にアメリカが上陸すると考えていたのでしょう。

三角兵舎っていうものが建ってたんです。土をかけてね、天井にガラス張って光入るようにして、横の壁はなくて、土に覆われるように作った。灯台から少し離れたところ。隊長の部屋はあったね。

襟裳岬は潮が引くとず～と岩が出るんですよ。アザラシが来るんですよ。灯台は霧が多いもんだから、しょっちゅう鳴っているんですよ。

あそこにどのぐらいいたのかな～半年もいましたかね？冬は越してないですね。苫小牧に引き上げて、旭川の部隊と一緒にあって、夜、真夜中、九州に出発しました、汽車で。

### 九州へ

そのときの汽車はもちろん臨時列車でしたけれど、走り始めたら、なかなか止まらない汽車で、止まるとね、いつ走るか分からない、長い間いて。行くところを教えてくれない。着いた所が、鹿児島串木野でしたね。あった注意が、「時限爆弾があるから標識に近づくな」だった。行ったら、毎日爆撃でした。見てるときれいなもんです、夜は。ときどき、えい光弾がね、柱か箆筈に刺さって、しばらくしてから火が出るんですよ、そして火事になったりね。そして、西鹿児島と鹿児島が全滅したことがあるんですよ、B29が来てね。私はその時、土の中に潜っちゃったことがあるんですよ、爆撃でね。終戦は鹿児島でした。

### 戦後静内へ戻る

最後は鹿児島城山、道は舗装されていなかった。川を覗いたら自分の右上唇の肉がないんですよ、衛生兵に治療を受けました。ヨーチンが痛くてね。溝辺というところから無蓋車(天井のない貨車)に乗って、汽車は石炭がないから、薪で燃やすでしょ、力がないですよ。上りになるとね、ときどきトンネルの中で止まったりするんですよ、濡れたタオルで顔を覆ってね。乗り換えた客車もぎゅうぎゅう詰め、そして青森に来て。

あんなに人間って変わるものかな～。女性がアメちゃんと一緒にいるんだよね～。津軽海峡を渡る時に、アメさんにDDTをかけられて、渡って函館、日高へ静内へ帰ってきました。



DDT噴霧器(郷土資料館蔵)



襟裳での日々

襟裳岬では食料には困ってなかったです。米などは部隊から送られきます。大坂さんのおじさんが言ったのは、マグロをね、海からロープをつけて砂浜に引き上げておくと、ハエなんかがつくんですが、「腐れるちょっと前がとてもおいしい」と言う、今の時代は逆でしょ、そんなこと言うおじさんでした。

私は経理にいたもんだから、襟裳から苦小牧へ連絡する時、その旅ごとに静内の実家に寄ったものです。バスでね。木炭車ですよ。様似までバスで、様似から汽車でした。

襟裳岬の壕を掘る時には、兵隊だけで掘って、地元の人を雇うことはなかった。地元の人との付き合いは、まったくなかった。水はどうしてたのかな？炊事の人がいたから、井戸を掘っていたかどうかもわからない。

小学校でね、ときどき演芸会なんかをやったもんですよ。部隊の人間がね、歌のうまいやつなんかいてね、そのときは、地域の人も来たと思ったね。

アザラシなんかは食べたことがないね。

雨が降るとすべるしね、乾くと砂が飛んでくるし、顔に当たると痛いですよ。建物の中にも入るしね。たった1軒、襟裳に旅館があったんですよ。母親が面会に来てくれて一晩一緒に泊まったことがありました。母親はバスで帰って行きました。

牛を静内で1頭買って、貨車に載せて、どうやって襟裳まで連れて行ったか忘れたけれど、トラックかな～、牛を下ろしたら貨車を掃除して、襟裳で殺して、皮はいで、得意な者もいるもんですよ、舌も熱湯で煮ると皮がむけて、爪も煮て硬いところとると食べれるんですよ。腸は全部とって、紐で川に流しておくときれいになるんですよ。これが肉よりもおいしいんですよ。肉よりもおいしかったな～。

襟裳にいたときは爆撃を受けたこともなかったです。壕を掘る人は、土が固くて岩盤で苦勞したでしょう。

(平成16年12月14日採録、中岡俊子)



幌泉川。上流から下流を見る(昭和39年12月)。現在の沢町、現在は道路になっている。

## 真田由雄 大正10年(1921年)生れ

肝臓が取り持つ縁

私とえりもの縁は昭和22年からです。ベトナムから復員した後、道内の肝油製造会社に勤務していました。その頃、幌満沖でのスケソウ(スケトウダラ)が豊漁だったので、会社から派遣されて肝臓の買い付けに来ていました。幌泉漁業会(当時)のそばに共同加工場があり、漁民が従事していて、干物の製造が主体でした。

そこで買い付けた肝臓は、ドラム缶に詰めて日通のトラックで様似駅まで運び、そこから貨車に積み替えて渡島の森町の工場に送ったのです。ドラム缶に詰めた肝臓が発酵して破裂したこともありました。

工場では肝臓に苛性ソーダを加えて煮て、肝油を抽出していました。肝油はビタミンA・Dが多く含まれていたため、ゼリー状にして学校でも生徒に食べさせたし、薬用としての需要も多かったようです。

その後、昭和23年には五野井貞蔵さんが中心となって、コンプを函館に運搬するため、函館の業者も加入して「日高海運」という会社を創ったのですが、私はその従業員としても勤めました。事務所は、現在の商工会館の所にあったカネキ林旅館の跡でした。それから間もなくして、日高本線の貨車事情が好転し、コンプ輸送は鉄道へと切り替わって行きました。

漁協職員に

幌泉漁業会に採用されたのは24年です。同年には水産業協同組合法が施行されて、村内に6つの漁協が誕生したのです。幌泉漁業協同組合は昭和24年に発足し、初代組合長は漁業会長から引き続いて川村重蔵さんでしたが、その後任には定置漁業の「共立水産」を経営していた山本清司さんが、間もなく組合長に就任しました。川村重蔵さんは、幌泉港に第五重徳丸(14トン)と第十重徳丸(8トン)の2隻と、室蘭港に底引網船を1隻を所有していて、室蘭滞在のほうが多かったため、私は組合の会議の度に組合長をたびたび室蘭へ迎えにいったものです。

私が組合に入ったときのメンバーは、後に収入役になった田中熊蔵さんが専務で、伊藤利彦さんが主事(参事職)、犬山一蔵さんが会計主任、内藤仁平さん、植木四郎さん、近沢政雄さんらです。

当時は町内の料飲店街も結構賑やかで、牡丹、銀寿し、ちとせ、浜乃家、だるまやなどのお座敷中心の飲み屋が繁盛していました。常連には付けが利いたので漁協や役場職員らが結構出入りしていたのです。進駐軍専用のラッキーなどもありました。

一方その頃、幌泉漁協管内の定置網漁業は歌別の岩間漁業部、本町の山形漁業部、共立漁業がありました。その年により豊漁と不漁が激しかったので、経営

は大きな賭けでした。山本清司さんらが経営した共立漁業は、経営を持続できず解散して、岩間・山形漁業部が持ち堪えて今日に至っています。

#### 北洋独航船の盛衰

幌泉・東洋・歌別三漁協が協同で北洋独航船を経営したのは昭和 29 年からです。日ソ漁業交渉が締結されて漁獲枠が決められ、独航船は函館に終結して船団を組んで出漁したのです。幌泉は大洋漁業系列の北海道漁業公社の銀洋丸船団に所属しました。当初は広尾・音調津の東館さんから中古船を買って3年ほど出漁したのですが、その後チャーター船に切り替えて、東北・宮城や道内などあらゆる所から借りて出漁させました。

チャーター船は、船長や機関長、無線局長以外は地元の漁師が乗り組みました。最後の航海のときは、歌別の越後正一が船頭を務めました。北洋漁業の最盛期には一航海(約2か月半)終わると、船頭で200万円、若者で100万円の手取りになりました。現在の貨幣価値では5倍ぐらいになる額でしょう。函館から出漁して帰港まで、一度も陸に揚らない厳しい仕事で、水や不足物資は母船から供給してもらいます。



サケマス出漁(独航船:昭和38年)

昭和30年から40年にかけては、独航船が出漁するときは、中学校のプラスバンド演奏の中、大勢の町民が岩壁で見送ったのは、えりもに春を告げる風物詩でした。

しかし、昭和53年には、米ソの二百海里漁業水域が設定され、組合の独航船も減船の対象になって、25年続いた独航船の出漁風景も幕を閉じました。

#### 津波被害や海難事故

漁協勤務中の大きな災害は昭和27年の十勝沖地震津波、35年のチリ地震津波などが強く印象に残っています。海難事故は八タ八タ小定置網漁で多く発生しました。11月の荒天時期、真夜中に手漕ぎ磯舟での操業には危険が付き物でした。毎年のように痛ましい海難

事故が発生して心が痛んだものです。今は、朝方に出漁し、動力船で、しかも救命胴衣着用へと進んで、痛ましい事故が少なくなりました。

#### 組合よもやま話

幌泉漁協の頃は、経営が大変でしたが、組合員一人ひとりの顔が見える良さがあったと思います。酒を飲んだ組合員が事務室に暴れこんできて、納税申告の受付で来ていた税務署員が、慌てて窓から逃げたこともありました。普段は温厚なのに、酒が入ると変わる人を慣れていなかったのでしょうか。よくなだめて帰したものです。酒癖の悪い組合員の性格を熟知して、上手に扱うのも職員の仕事のうちでした。

#### 組合の大型合併

組合が大型合併したのは昭和41年です。そのときは、本所事務所が2年半ほど役場庁舎の消防の2階でしたが、吉田勘之助町長が初代の組合長だったことから、午後4時を過ぎると組合事務所に顔を出して、決裁書類が役場に比較して極端に少ないのが不思議だったようです。午後5時を過ぎると、事務所で職員と一杯呑み交わしながら雑談して、そのあと組合長に誘われて下町へさがり、よく銀波を利用しました。酒と女が好きでたまらないという豪傑タイプの人でした。早死にしたのは残念です。

組合合併後の運営をスムーズに運ぶために、合併当初は各部落を周って懇談会を開催したのですが、北洋独航船を経営した3漁協以外は、少し距離感があったと思います。しかし、回を重ねるうちに、わだかまりもだんだん消えていきました。

漁協勤務で楽しかったことをあげれば、職員だけの慰安旅行です。コンブ漁がスタートすると仕事も一段落するので、毎年2班に分かれて気楽な旅に出かけました。組合が合併してから昭和40年代後半に、役員とコンブの消流視察旅行に出かけたときのこと、えりも町内にも加工場を持っている大阪の昆布卸問屋・小倉屋の倉庫で、「幌泉の一等昆布を見たい」と要望したら、コンピューター制御によるクレーン操作で、大きな倉庫の中から直ちに、結束されたままの昆布がクレーンで運ばれてきたのには驚きました。

#### 商店街の近代化事業

私が商店街近代化事業に携わったのは、漁協を58歳で定年退職した2年後です。坂田達さんや西川周三さんら町商工会役員から商店街近代化組合の参事に就任を要請されたのです。商店街の近代化が完成するまで12年間勤めました。おもな仕事は商工業者間の権利と場所移動の調整でした。

坂田さんがよく取り仕切ってくれたお陰で事業は順調に進んだと思っています。町長が近代化事業を積

極的に支援して職員を派遣してくれたのも助かりました。当初は町商工課の吉田博喜課長が兼務で、その後は岩本溥叙さん、種綿由雄さんが派遣されてきて片腕になってくれました。



本町商店街(昭和47年)

土地調整には境界を決めるに当たって多少のトラブルもありましたが、測量には権利者立ち会いのうえ、慎重を期しました。当初の計画では、北電の電柱を国道沿いから建物の裏に移転して、商店街の美観に配慮するつもりでしたが、北電から事業費の捻出が困難と言われて計画は立ち消えになったのです。NTTは北電が移動するならそれに従う構えでした。

長い間、漁民と接してきた身には、商工業者との係わりは難しく思い、職業気質の違いを痛感させられたこともあります。商店街の近代化は実現して本当に良かったと思っています。今のような不況下では、以前のような旧態依然とした町並みであったなら、客離れは益々進んでいたことでしょう。

(平成16年3月13日採録、神子島清八)

## 小山内 與十吉 大正10年(1921年)庶野生れ

経歴(太平洋戦争の回顧録より、陸軍伍長)

漁業を生業に家運を支えた先代由右衛門の四男に出生。兄弟仲良く健やかな成長を遂げ、子供の頃から家業を手伝い、青年学校を修めるや漁業に専念。北海の荒波に揉まれ、気炎万丈の若人となった。

この間、皇国は軍事化の途を邁進し、長期に亘った日中戦争が近因を成して、遂には太平洋戦争開幕。何時果てるとも知らぬ大事を迎え、余は未曾有の戦記と興奮に充ちた。皇軍の快進撃続く昭和17年4月、現役兵として旭川北部三部隊第一機関銃中隊に入隊。

「一ツ軍人八忠節ヲ尽クスヲ本文トスベス」に始まる聖訓五ヶ条を奉唱しつつ、峻烈極まりなき戦技訓練に熱汗を払い、強靱不撓の心身を涵養し、軍務に挺身した。18年5月、小樽港を出航して日本最東端、千島

占守島に上陸し、大友部隊配下、北方最前線で守備にあたる。

18年12月旭川原隊に復帰し、19年2月海上機動第四旅団機動第二大隊に転属。同年4月根室から択捉島に渡り、警備任務に挺身する。幸い空襲や艦砲射撃は無かったが、補給が不足し、魚や昆布を常食として米を節約した。20年6月根室から埼玉県桶川町へ移駐。農家を手伝って食料の増産を図り、本土防衛に一身を挺するも、既に敵機は本土上空を我が物顔に飛び交い、被害も広がっていた。

20年8月15日嬌々として終戦の玉音放送が流れ、悲愁断腸の涙を呑んで矛を納める。残務整理にあたり、20年12月に復員。なお兄弟2人出征し共に生還した。

## 津波

昭和8年の三陸沖の津波で我家が流された。家は漁組の美島よりにあった現在の金子さんあたり。その他藤田さん、「仙台講」という家の3軒しかなかった。高台に逃げる時、学校の教科書など持たないで、明治11年2月15日出版の漢和辞典だけを持って、本家(小山内由秋さんの父)の家に逃げた。

本家でも神棚に揚げて大事に保管してくれていた。その本を家を建てた時に持ってきてくれた。その後、私の宝物として大事に保管しています。家を流された後、現在のさくら公園の付近の高台に移った。

その時の津波で、トセツブ・フンコツ(白浜)・チヒラで津波に襲われ数名が死亡した。特にフンコツでは坂本さんの家族5~6人流されて死亡し、1人坂本キクさん(現在武田)が助かった。本当に気の毒であった。

また、役場の山崎さんの孫爺さんの妹と母さんも流された。山崎さんは津波とわかって、隣りの家に行くといって家を出て、途中で流されたと聞いています。

津波の後、トセツブとフンコツで流された人たちが美島に7軒家を建てた、そこを七軒街と呼んでいた。

昔の庶野の様子(小学校の時)

現在のJRバス庶野停留所前浜から漁組方面は砂浜で船揚場になっていた、停留所からシトマベツ川(学校そばの川)まで玉石であった。

小学校は庶野尋常小学校に昭和3年に入学した。

その年にカナダバンクーバーから木材を積んだ三島丸が、庶野で座礁して庶野地区の浜いっぱい木材が打ち上げられた。座礁した舟に縄はしごをつけて見に行った。大きな船だった。三島丸は燃料が石炭であったので、時化になれば浜に寄ったので、それを拾って風呂を焚いた。10年ぐらいは浜に寄った。

同級生で現在健在なのは、工藤正次さん、矢陸栄次郎さん、菊田ミツエさん達です。

校長先生は斎藤先生といって、おっかない校長先生

であった。その他、杉本先生（庶野出身の先生）、大  
脳先生などが記憶に残っています。

学校は現在の警察署の隣の漁組の倉庫の所にあ  
った。学校には現在の吉井自動車工場の所に下がり  
て行き、浜を歩いて行った。

運動会はシトマベツ川の駒止よりの高台（旧ホテル  
かしわ付近）で行なった。

幌泉の運動会に歩いて見学に行くのが楽しかった。  
ホテルは沼地で飛んでいた。

#### 青年時代

盆踊り時期には、仲間3人で馬に乗って百人浜を通  
って、えりも岬まで遊びに行ったことがある。

庶野にもカフェがあった。桜の花見時期になると、  
広尾から船で屋台の一式を持ってきて、桜公園の所に  
建てて1ヶ月位いた。昼より夜のほうが賑やかであ  
った。

#### 結婚式

昭和24年3月25日に実家で挙げた。仲人は笹谷さ  
ん夫妻。嫁さんはルーランからきた。小山内隆三郎さ  
んが馬車で向えに行った。途中、学校の前で、みんな  
嫁さんを見にきていたので、止まって見てもらった。  
披露宴は家で行なった。一人一人にお膳（屋号がつい  
ていた）をつけて、賑やかであった。近所の人たちが  
庭に入ったり、外の窓から見にきていた。

#### 結婚後

夏は昆布を採っていたが、母親が男兄弟みんな漁  
師でなく、陸で働くことを勧められて、冬期間はホク  
レンの清水工場に20年位勤めた。工場長は軍隊の上  
司であった。その後、(尙野澤建設)に20年位勤めた。

コンブ採りの場所は、シトマベツ川の所で、コンブ  
採りが終わったら、みんな川を風呂代わりにして、身体  
を洗ったり洗濯をしたりした。

今思えばいい時代であった。

子供は男2人、女1人の3人で、長男は庶野で後継  
ぎをしている。次男と長女は札幌に住んでいる、孫5  
人、曾孫1人孫も可愛いのが、特に曾孫は本当にめん  
こい。

#### カワウソ

戦後、シトマベツの川原や駒止にカワウソが住ん  
でいた、サンマをもらって庭においていたら、ネコより  
少し大きいカワウソがきて、獲物を狙っていたのを見  
たことがある。

(平成18年3月30日、新松隆・新松信子採録)



昔の庶野（国道整備前、昭和40年代前半）

## 富越誠也 大正10年(1921年)生れ

### 富越家のルーツ

私の祖父は安次郎で明治3年(1870)富山県で生まれた。明治政府が平民に苗字を持つことを法律で義務付けたことから、安次郎の父は越中富山の出身をもじって、富山の「富」と越中の「越」をとって富越と名乗ったと聞いている。(最近、札幌市内の電話帳を調べたが「富越」の姓は見当らなかった。)

次男であった安次郎は14歳で大工に弟子入りし、18歳で年季明けを迎えた。そこで数人と、北海道に渡って一旗揚げようと来道(1889)し、積丹でニシン漁場の網倉などの建築に携わったとのこと。しかし、3年後には不漁に見舞われた。そのとき、庶野から同じニシン番屋に出稼ぎに来ていて知り合った西野さんから、幌泉なら大工仕事があるので、一緒に行かないかと誘われて来村し、庶野・西野宅に草鞋を脱いだとのこと。そのうちに仕事が多い本町に出て大工仕事に励んでいた。

しかし、結婚後も男子に恵まれなかったため、小山内家から三男の捨三を養子に迎えた。しかし、捨三も子供に恵まれなかったため、山中家の四男であった私が富越家に養子に入ったのである。小山内家も山中家も初代は共に津軽の出身である。

昭和10年(1935)以前の沢町界隈のことを話すと、富越の家は沢町の、割烹・牡丹(現・芹恭信宅)の裏側にあり、その角地の川沿いには佐藤幸雄さんの実家があった。現在の「クロスロード」の場所には、行商宿の植木旅館があった。私が子供の頃の沢町は、芸者や遊女もいる遊廓街であったので、私と佐藤幸雄さんは花街育ちのようなもの。わが家は、昭和10年の本町市街大火の後に、現在の高台に転居している。

### 復員と結婚、千歳の建築現場へ

私は庁立苫小牧工業学校を卒業後、東京の清水建設本社に勤務した。その後陸軍に現役入隊して千葉・習志野の戦車隊に入隊した。終戦の年、昭和20年(1945)には朝鮮半島と中国が国境を接する町、新義州(シンイチュ)で戦闘機搭乗員を養成する練成戦隊の教官をしていて、中尉で終戦を迎えた。

昭和20年10月にえりもに復員し、間もなく苫小牧市に住んでいた妻・不美と結婚した。工業学校在学時に、妻の実家のすぐ近くに下宿していたのが縁となった。

実家に復員した頃、父・捨三は、町内で手広く建築業を営んでいて、家には80過ぎの祖母と両親に、外部又四郎さん、後藤右悦さんら職人3人も同居していた。十勝へ出かけて、鈴木勇次郎さんと組んで、馬の仲買いをしていた伯父夫婦も2階に住んでいた。私も復員後はすぐ、父たちと建築現場に出た。

私が兵役中の5年間は、清水建設から毎月給料が実家に送金されていた。そんなことから復員して、結婚後間もなく、清水建設本社から千歳の米軍進駐軍基地の住宅建設の現場監督に就くようにとの指示があった。私は当初は単身で赴任し、後に妻を千歳へ呼んだ。父には、5年間給料を支給されたのだから、そのぐらいの期間、清水建設のために働いてくると説得した。

結局、千歳市内での社宅暮らしで9年間を過ごし、その間に2人の子供にも恵まれた。千歳では進駐軍の住宅建設の現場監督が仕事で、工事費は見積金額通り認められて施工できた。

米軍の建築技師の中にドイツ系アメリカ人の元航空士官もいて、私も航空士官だったことが判ると日本の航空隊に関心を示した。当初は私が真珠湾攻撃参加の海軍航空隊員と思っただけだが、陸軍航空隊であることを説明し、通訳を介して情報を提供した。それらが仕事をスムーズに進めることに役立ち、会社にも貢献できた。

### 町内の仕事に復帰

帰町してすぐに手掛けた仕事は、昭和31年に光の園幼稚園園舎の建築だった。当時の上野淳牧師の熱意と、開業医の伊津野章院長の資金面での支援があったようだが、建築予算が困窮していたことから、村役場庁舎の解体材を使用し、採算を度外視して工事を請け負った。そんなことが縁で上野牧師とは現在も懇意にしている。

町内の老舗・カネサ吉田商事の店舗と映画館「第一公映ホール」の建築工事を請け負ったのは、昭和34年である。工事中には二代目の吉田勘之助さんと、三代目の社長・正治(後に町長・三代目勘之助を襲名)さんの意見が衝突して、請負側の私は大変困惑したものである。新館当初の地下はダンスホールにもなって、若者たちで大いに賑わっていた。



新映館(昭和30年代)

田中牧場との係わり

カネサ二階の映画館「第一公映ホール」は、沢町の新映館と競り合って、町民の娯楽の殿堂の様相を呈していた。

その頃、町内上歌別地区に新潟県選出の衆議院議員・田中彰治がオーナーの「田中牧場」が開設されることになり、田中代議士がかめや旅館に投宿していた。ある夜、第一公映ホールに映画を観にきた田中代議士が、この映画館は誰が建築したのかが話題になって、施工業者の私の名が知られたという。

早速、田中代議士に呼ばれて、牧場事務所を一週間で建てて欲しいと言われ、基礎コンクリートを現場で練りながら、夜業掛けて完成させた。その仕事ぶりが評価され、その後も、同牧場内の種付場や宿舍などの建設工事が舞い込むようになり、営業業績も上がり大いに潤った。

田中代議士は、以前、宿泊して気に入っていた札幌パークホテルと同じ部屋にしたいとの希望であった。そこで私が同ホテルを視察し、清水建設の知人に同ホテルを建設した業者を紹介してもらって、部屋や浴室の内装は、同ホテルを手掛けた業者をえりもへ招いて工事を依頼した。

その出来映えに田中代議士も大満足して、私の信用も大いにあがったのである。ただ一つ見つかったことは、何がなんでも短期間の指定期限に間に合わせることであった。

校舎建設なども請け負う

第一公映ホール完成後の34年、えりも小学校とえりも中学校の中間敷地に、平屋ブロック造りのえりも高校（定時制）校舎建設工事を請け負い、翌年2月に完成させた。そのほか、36年からは、ブロック造りのえりも小学校校舎や、自分で設計してえりも中の木造体育館なども建設。吉田勤之助町長から花田政雄町長時代には、ドリゾール壁の平屋公営住宅や教員住宅、小中学校校舎の増改築や改修工事も数多く手掛けた。

住吉神社との縁

町立診療所のリハビリ施設の増築工事では、敷地が狭いため、隣接の神社境内を資材置場に手塚宮司から借用した。それが縁で第三鳥居の修復を頼まれたが、町内の木工場ではエゾマツの原木しか手に入らなかった。それを使用して建立したら6年ほどで腐敗してしまい、再度手塚宮司に修復を懇願された。

今度はトドマツ材で再び鳥居を寄進させられた。大工手間、材料費とも高がついたが、いまでも「第三鳥居・富越誠也寄進」との明記が残っている。

（平成18年3月17日採録、神子島清八）

## 金丸モト 大正11年(1922年)生れ 先代

大正11年、苦別で生まれました。小学校に行くときには苦別には学校がなかったから、小越（モトさんは「こごし」と発音します。）の孫ばあさんのところに世話になっていた。うちの父親は岬で生まれたと思います。おばあちゃんは青森から来た人、おじいちゃんは岩手県、昔の開拓かなんかで来たと思います。青森から来たおばあちゃんが、働き手というか、やり手だったそうです。人を雇ってコンブを7杯もやったり、魚を獲ったりしてたそうです。その後、支那事変でコンブがだめになって、コンブやめて、漁師したそうです。父親もその先代も、小越に来たそうです。山を切り開いて畑にすると払い下げしてくれるということで、苦別で畝で開墾して、何軒かの人たちと一緒にやったんでしょ。おじいさんは山で馬をやっていた。父親は船酔いするからって、おばあさんの漁師ではなく、おじいさんと一緒に山に上がったんだね。2番目の子供がおばあさんと一緒にコンブ採ったり、漁やったりですね。

襟裳岬の家と旅館（民宿）

私は6歳の時にえりも岬にいて、おばあさんのところで学校へあがったんです。その後ず～とおばあちゃんと一緒に過ごしたんです。漁もかんばしくなくなって、漁師やめてから、今の民宿みたいなものを始めました。家が35～36坪と大きかったもんだから。

前から柳田さんが駅通旅館でしたが、そこには泊まれない、食事は柳田旅館でも泊まれないお客さん、お金がない人とかね、うちに泊まったの。家の女の人みんな手伝ってね。



駅通旅館：柳田旅館（柳田旅館所蔵、秋祭り、時代不明）

旅芸人・活動写真

旅芸人、芝居をやったり歌を歌ったり、浪花節、浪曲、辻々浦々を廻っていて、岬には大きな家がなく、うちに泊まるように世話するようになった。金丸（旅

館)でした。

中学校さ上るときに、親戚の娘たちを頼んで、お客さんを泊めていました。灯台はその頃もあったんです、ただ光ともすだけで、無線だとかをつけるということで、内地の方から鳶職・大工さんが来て、30人も泊めました。

浪曲やる人、活動写真も、人を泊める、家も貸すということです。家の畳をはぐって舞台を作るんですよ。見に来る人は庭に板敷いて、ゴザしいて、料金をとって、50~60人も入るのかな、楽しんでいたね。1年に活動写真でも5~6回は来たのかな~浪曲・民謡も来たりしてね。「前触れ」っていうのがあって、役者を誘導してくる人がいてね、「今度は、何月何日頃になれば浪曲やる人がくるから」って「泊めてやらせてくれや」って、「はい、はい」ってね。

岬の船入澗を造る人も泊まってね、私が馬車曳いているときに、だんだん戦争が激しくなって、そういう娯楽は来なくなって、幌泉の松川座とかカネサとかね、襟裳岬まで来なくなった。

そのうち、トラックとかバスとかね、通ってね。

#### だん駒(駄駒)と薪の運送

当時、中学校は義務教育でなかったからね、私の父親は苦別にいて、馬専門でやって、今のトラックの代わりだね、山から駄鞍(だくら:ドサンコ馬に荷を乗せるための鞍)で薪を運ぶ。その薪は東洋、岬、庶野の一部、歌別の一部、全部ここの山から払い下げるんですよ。町でね、1年に1回ね、払い下げの手続きで役場の人も来るけども、山林さんというのが各地区にあってね、山を守る人がいて、1軒のうちで薪7間なら7間、幹測って、高さ測って、この木1本倒せば何分あるって勘定してね、払い下げてたんです。それを切って、自分で切れない人は人を頼んで切ってもらって、でも、搬出するには、人間の背中で東洋だとか岬まで行くもんでないもんだから、うちではドサンコ馬たくさんやったったもんだから、荷鞍を付けて、薪の運送を1年いっぱいやった。

春に払い下げて、夏ごろから搬出するんだけど、1日にドサンコ馬に荷鞍をつけて、8頭馬たてて、1間



百人浜を行く駄駒(昭和30年代前半)

背負う。6尺の6尺で1間だからね、2m、2mで高さ6尺、1軒の家で7~8間づつわたるわけだ。

東洋で何十軒、岬でも庶野でも何十軒と、夏期間に終われなくて、冬も運んでいた。荷鞍で運ぶのが父親たちの仕事だった。

その頃で、1間4円50銭~6円、運ぶ場所によってね。米1俵が7~8円だった。

馬車が出始めると、薪がちょっと下さに出てくると、馬車で運ぶようになった。馬車を初めにやったのが佐々木富三郎さんの親だな。駄鞍は山から降ろすだけになった。苦別や岬の人も馬車をやってた。

だんだん戦争が激しくなってきて、今の自衛隊の一番下のところまで、テスケから、崖の下から砂利や砂を運んで、コンクリート練ったりするのに、浜から上げるのに、だん駒(駄駒)で上げる、次に自衛隊のところまで上げてました。

三枚岳山頂に無線を設置するときにも、肉牛牧場あたりまでは、馬車でトラックでも入れる道路があったんだけど、それより上をうちのだん駒行って働きましたね。砂利から、砂から水まで運んでね。

#### 襟裳岬の軍隊と終戦

私は終戦後まで孫ばあさんの所にいた。戦争で男の人がみんな召集かかって、襟裳岬には陸軍の施設も海軍の施設もたくさんありましたけども、民間防空監視隊というのができて、7名1組で7班あったのね。そんな時、男の若い人がみんな召集かかっていったもんだから、結局、7班ができなくなって、復員兵や年取った人がね、班長さんやったり、それでも人が足りなくて女子青年部から3班つくって、部落の女の人も朝から一昼夜交代で監視しましたよ。

終戦の昭和20年、孫ばあさんが亡くなった年、戦争が激しくなってきたもんだから、空襲もあるということで、家に誰もいなかったら、空襲されて火が出たら延焼するから、家壊せって言われて、消防団の人の手伝いや内地から来た大工さんとほぐして、苦別に持ってきました。

陸軍は前の生活館のところに兵舎、海軍は今の無線下あたりに兵舎があって、半地下式で、あんまり見せないような施設でしたが、一番最初に攻撃されたのが海軍だった。私たちは逃げなさいと言われて、苦別学校の山側に隠れて避難したんだ。陸軍の兵隊さんはどこへいったか知らないけれど。苦別の学校からちょっと下さがったところから(浜側から)、ず~っと軍の通行壕っていうんですか、途中2~3ヶ所、屋根かけて待避所みたいな避難するところがありました。通行壕を歩いているときに、攻撃されたら、隠れるように。通行壕を通して、隠れて、岬から苦別へ来る、苦別から岬へ陸軍の人はね、海軍の人は...ああ、戦争っておっかえもんだな~って、海軍の兵舎が真っ赤に燃

えてね、学校のところの木わらから見てて、いや～ひ  
っでえな～って。

終戦になって、いろんなデマが飛んで、アメリカの  
兵隊がきたら大変だって。鉄砲で撃たれるならまだい  
いけど～って、いろいろなデマがはじまったんだ  
～女の人なんか歩いてられないって。私たちは山にい  
るから安心だけど、夜になったらランプの明かり漏れ  
ないようにしてね。でも、アメリカの兵隊さんも来ず  
に無事平穩に終わりました。

#### 百人浜の様子

百人浜は、赤土だった、赤土だった。したけど、あ  
っちこちにね、なんぼか木は残ってましたけど、赤土  
は赤土だったね。道路でなくて、苦別川から降りてい  
くと、浜さ下がって、ところどころ渚伝いに、岬さ通  
ったもんだから、道路はなかったんですよ。

だけど、風が吹くと赤土が飛んで、海の水がだいぶ  
のところまで赤くなる、やませ（東風）の風が吹くと  
いうと、苦別の私らのとこまで来なくても、そっちの  
あたりまでは木の葉っぱに赤土がたくさん飛んで、岬  
の人は苦別に来て畑作っていましたが、今の藤井牧  
場の上で、学校の造林もしたり。風がうんと吹いたと  
きに、お昼にご飯食べるときに、木の葉っぱから赤土  
が落ちてくるんですよ。飛んできて木の葉っぱについ  
た赤土が、風でゆさぶられる、赤土は赤土だったね。

道路から下が主に赤土で、上の方にはいくらか、木  
が生えていたもんだから、ヤマツツジ、花咲いて真っ  
赤になるぐらい生えていた。大下から上の方、苦別の  
方にかけて、石山も真っ赤になるぐらい生えていま  
した。シャクナゲの小さいのもあった。今の道路から下  
がなんもなく、赤土が飛んで。

うちの父親たちが来たとき、こういう（直径 30cm  
位の輪を手でつくる）おっきい木が、道路から下にも  
何本かあったって。オオカミが出たときもあるって、  
ご先祖さまのときね。虫が葉っぱを食べたり、シカが  
何かが山を歩いて、土を出して、風吹いて、木も枯れ  
て、草も枯れて土が飛んで、そういう説があるって聞  
いただけでね。

ツツジもなくなったのかね。私たちが学校行ってた  
ときには、まだ真っ赤にツツジが咲いてあったからね。  
私たちが学校通うようになってからは、道路から下は  
木はなかったね。谷地草っていうか、草は少し生えて  
いたけどね。

#### 苦別川の河口

渚ばかり歩くもんだから、岬から庶野へ行くとき  
も。苦別川の河口には、丸木 3 本で橋がかかってあ  
ったけど、大水くれば流されるっていうこともあった。  
その頃、子供心にも、川尻がまっすぐ流れないで、な  
んぼかでもなごやかになって、その砂地にスナガレイ

って、歩けばピー～ピー～って飛ぶんです。歩けば。  
最初、砂かぶっててわかんねえけども、たくさん魚も  
川にあがってたんでないだろうかね。

#### 苦別の住民

須藤さん、湊さん、岬から上がってきた人で鈴木さ  
ん、小山内さん、高橋さん、柳田さん、内山さんは内  
地から来たし、片倉さん、昔から移住してる人は何軒  
もなかったけども、頼ってきたとか、旅から来たとい  
う人があつたりしてね。戦後、樺太から引き上げてき  
た人もいましたわね。戸数が増えてね。

#### 苦別分校と軍馬種馬派遣所

終戦になったもんだから、食糧難でね、お金があ  
つても食糧が買えない時代。苦別から岬の学校へ通  
う人は、冬期間は親戚家（しんせきんち）に頼んで岬  
さおくんですよ。通えないから、除雪なんかしないし、  
雪降れば降りっぱなしで、風吹いて吹き溜まったりす  
れば、3 尺や 4 尺の雪がある。

弁当持って学校に通へなくなる、苦別の人が、なん  
とか学校が欲しい、分校でもいいからって、先生一人  
でもいいからよこして、生徒が岬まで通わなくてもい  
いようにって。

戦争前にうちではドサンコやってましたけど、戦争  
で軍馬が必要になってきたって、小山内さん、山形さ  
ん、佐々木さん、内山さん、庶野の人も軍馬を生産す  
るようになって。種付けする牡馬が、えりもの新浜に  
種付け場があって、町内全域の種付けをしていたも  
んだから、苦別からも襟裳岬からも庶野からも引いて行  
く、朝間早く行つたって、町内からみんな集まって来  
るから、すぐ種付けしてもらえなくて、明日来なさい、  
あさって来なさいって、種付け雄も 1 頭だからそう簡  
単にもいかない。

そうしているうちに「困る」ということで、種馬の  
派遣所を苦別に、庶野と東洋襟裳岬、目黒からも来  
たな、農林省にお願いして、軍の関係もあったのでし  
ょう、苦別の今の高齢者センターのところに、畜舎と  
牧夫が入る住宅 1 棟が建ったんです。



苦別分校（昭和 40 年代）



終戦で種馬もいらなくなってしまって、民間で預かることになって、殺されねえから、その種馬をうちで預かって、畜舎が空家になった。

馬屋でいいから、なんとか先生を一人派遣してもらって、生徒を岬まで通わなくてもいいようにって、願って願ってね、終戦後に分校になったんですよ。

馬屋を改築して、“さぐり”の板さ馬の糞がたくさんついて、部落の人がみなで行って、畑の鍬ではがしてね、みんなに馬屋の学校だって笑われたけどね。

襟裳岬から先生通ってくるのも大変なんですよ。夏なら自転車でもいいけど、冬になれば困るもんで、陳情して陳情して分校になったんです。

そのうち、みんな豊かになってきて、馬も必要なくなってきて、苦別から引き上げていったんです。

#### だん駒と炭焼き

私は、だん駒は、父親と母親がやっていました。もらってきた姉さんが爺さんとやっていた。岬まで運んでいたのは薪、炭はほとんどしてない。炭は終戦の前、木炭車に使うとかで少し作っていたようですが、うちではやっていない。炭は個人ではめったに焚かなかったね。



百人浜緑化地（昭和 39 年）

樺太から引き上げてきたおじさんは、炭焼きしてましたよ。影山さん、木村さん、内山さんも炭焼きをしてました。うちのだん駒の運送屋専門だったから。食べるためにいくらかでも畑作らなきゃいけなかったしね。

#### 百人浜の道路工事（朝鮮人労働者）

百人浜の道路は何年もかけて造ったんでないかい（増補町史によると小越庶野間の海岸道路施設工事は昭和 6 年に開始）今の学校からバスの回転場の区間は少し下がってあったんでないんだろうかね。朝鮮の人がたくさん働きに来て、飯場作って、今の郵便局の所にね、菊池さんという家があって、そこ借りて飯場作って、朝鮮の人つれて、土方やったんだ、様似の南さんがやってたね。お金払わねえ～っていう人もあ

ったけどね。新しい道路の上歩いたけどもね、30～40cmも路肩高くして、丸砂利ひいて、道路が高いんですよ。やませ（東風）の風がひどく吹くというね、盛った土、みんなね～飛んで、道路の石もなんも飛んじゃって、またやりなおし。

風のうんと吹くときには、砂も飛ぶけど、ちょっとした小石なんかね、飛んできてね、足や脛さね、ぶつかって位ね、風は強かったね。

1年に何回か今の台風並みの風が来て、屋根ははがれる、ちょっとした家は飛ぶってことはあったからね。昔の人は襟裳岬で建てる家は、相当吟味して建てたね。風だけにはね。‘かまじ’をたくさん入れたりしてね。屋根は、くぎ打ちではなかったんですよ。長い柱と横幅のある柱、横に幅のある柱をひいて、縦に長い柱をひいて、玉石を並べる。その玉石ののっかてる屋根をはぐるんだからね（風が）。小さい家、掘り立ての家なんか、すぼと抜けていって、隣の家の玄関さ行って、ひっくりがえっていることもあったりしてね。風は強かったね。

#### 観光乗馬

緑化事業では働かなかったね。

戦後は、次第に馬がいらなくなったね。戦後すぐは、畑でジャガイモ作っても、供出っていうのがあったしね。それで生計たてるしね。ジャガイモ食べるに作ったり、馬があんまりうまくなくなって、軍馬も少しいたけど、戦後はだん駒だけ残して、主人は浦河から来た人だけど、当時、浦河では軽種馬が盛んになってたけど、父親が「軽種馬はたくさんお金のある人でなければできないからやめよう。」って、そして昭和 32 年に乳牛を始めたんです。

それまでに駄駒（だんこま）だけ残してたんで、そのうち襟裳岬が観光の脚光を浴びて、その時、襟裳岬で乗馬をやったんですよ。襟裳岬には 3 頭ぐらい持っていったんだけど、馬がやせていたし、車がどんどん入ってくる、スピーカーはうるさいで、人乗せるのに危険な状態になってきたんですよ。それで百人浜に移転したんですよ。



悲恋沼観光乗馬（昭和 40 年代）

その頃でだん駒 6~7 頭は残してたんです。百人浜で観光乗馬やったんですよ。おかげさまでそれが受けてね、金丸さんだけではうまくねえってことで、佐々木さん、レストハウスで鈴木さん、向中野さん、みんなで観光の乗馬を順番こしながらやった。

32 年から乳牛してましたし、昭和 32 年 12 月には電気も通りましたし（増補町史には、苦別に電気が開通したのは昭和 38 年）観光も車で歩くようになって、観光牧場が下火になってきたもんだから、やめてね。本業の乳牛も忙しくなって、ドサンコもみんな売っちゃって、やめたんです。沼 1 周して 200 円ね。

#### 悲恋沼の義経伝説

昔から悲恋沼でしたよ。悲恋沼って難しい名前ではなかったけどね。

源義経が襟裳岬に上がって三枚岳の馬蹄湖にひそんであった。そのときに老アイヌの娘さんと恋に落ちたけども、義経はどんどん逃げて行って、残されたアイヌの娘さんが泣いて溜まったのが悲恋沼だって。

親からでも、友達からでも聞いたね、何か書いたものでもあったかもしれないね。観光やる前、あそこで草競馬やってたんですよ、楽しみながらね。

沼の水は切れなかったからね。

#### 一石一字塔

一石一字塔の石碑が悲恋沼のあっちの方（庶野の方）にあったんですよ。父親から聞いたのは、昔はずっと渚にあったんだってね。海岸にあったんだってさ。海が荒れると掘れてひっくり返るんだって、少し上げて、少し上げて、なんぼやってもだめだって、上にあげたそうです。

私が見たときは、悲恋沼のちょっと上にあっただんです。父親は野イチゴでもなんでもとってね、そこにお供えしたりしてましたよ。

今度、役場であそこなら部落の人しかわからないして、記念の年に、今のところ道路のこっちゃんに持っ



一石一字塔

てきたんだわ、柵まわして、看板かけてね。私ら観光乗馬やる頃にはもうできてたんだわ。

父親は供養を 1 年に 1 回は自分なりにしたっただわ。5 月 17 日には部落の人にも頼んで供養してたんだわ。昔の町長さんからも寄付がありましたよ。私は今でもお盆と正月と 5 月に供養しています。お盆はお盆なりに、正月には門松たててね。

#### 楽しかったこと

今思えば、がむしゃらに働いて、いろいろなこともあって、だけど、がむしゃらに働いているときが一番楽しかったんで。今、なにもできなくなれば・・・がむしゃらに働いているときがよかったな～って。家族みんなしてね、子供たち育てたとき、一番楽しかったんでないかな。

#### 井戸水

水は今でも地下水です。昔は沢の水を使ってましたけど、雨降れば大水出て困ったもんで、井戸掘ったんです。数年に一度ポンプ切り替えなければいけないけれど。

#### 襟裳小学校の御真影の疎開

終戦前に襟裳小学校の天皇陛下の写真（御真影）を苦別神社で預かりましたよ。（金丸さんの）家の裏の山の高いところにあっただんです。1km 近くあったんです。くねくね曲がって上るんです。

先生の奥さんが心臓悪くて上がっていけないんです。神社の祭りの時には自衛隊さんが来て、神社の前で相撲とったり、余興あったりでよかったんですけど、坂がきついもんですから、神様も大変だろうからって、今のところに持ってたんです。

移す前に、襟裳岬の先端にあったお堂を移すからといって、苦別の山の上に持ってきたんです。下げてから、もう少し大きくしようということで大きくしたんです。御真影は空襲が来たら大変だからということで、苦別神社で預かることにしたんです。

#### 苦別川の魚

苦別川では、アメマスをとったり、カジカを獲って焼いて食べた。カジカは焼いてから醤油で煮ると一層うまかった。サルガニも薪ストーブの上で真っ赤になるまで焼いて食べた。おやつです。ヤツメウナギも父親が獲ってきていました。あと、季節になればブドウにコクワがおやつでした。

#### 魚とおやつ

小学校の頃、魚をもらっては食べてました。カレイ、ソイ、サガも、みんな自分家用に獲ってたんで分けてくれたんでしょう。

でも、サケは別でした。子供心にもサケは食べられないんだって。

南條さんがサケの加工をして、女工さんが筋子出したりしていましたが、奥さんが腕を組んでその作業をじ〜と見てるんです。もらえないもんなんだな〜って。

山形さんではタコの加工をしていて、茹でたタコがぶら下がっていて、覗いていると、タコの口のところを、捨てるからってくれるんです。食べれない嘴を捨てて食べていました。

あれば、ほらって、あると食べて、そんな感じでした。みんな、団結力があつたんですね。

#### 悲恋沼の氷切り

苦別の部落で悲恋沼の氷を切り出してたんです。30cmの厚さの氷を切って、蕙(むしろ)にくるんで、馬車に乗せて岬の築港に運ぶんです。倉庫というか土蔵があって、氷を初穀(もみがら)で被って、夏にマグロとかクジラとか獲れた時用に保存していました。マグロの解体は幌泉から人が来てやっていました。内臓を切り出して、氷を入れて、トラックで札幌に持っていったそうです。

苦別の部落で氷の切り出しをしていて、馬を持っている人は運搬係、持っていない人は氷切りでした。部落の経費にしていたのでしょう。

#### 牛乳と牛乳豆腐

牛乳の豆腐は、農協婦人部の研修で習いました。牛乳を沸騰する寸前で火を止めて、酢を入れてゆるくまぜると固まる。火は止めて。酢の量はかげん、経験でつくる。入れすぎると硬くなりすぎる。昔はやわらくてもそのまま食べたが、ガーゼに包んで絞って切って食べている。

牛乳は昔から生乳で出していた。幌泉で一番最初に売り出したのが菅原さんで、歌別の産馬の沢でやっていた。外国から人を連れてきて教わったって、中学校に上がる頃(昭和10年ごろ)に、荷馬車に牛乳のビンをたくさん箱に入れて、店屋さんに卸すのか、市販するのか、今のえりも農場の奥から運んできていましたよ。朝早くにね、ガラガラ引っ張ってね。

#### 短角牛と綿羊とクマ

小西村長のとき赤牛(短角)が入ってね、東北から持ってきてね、うちも短角も綿羊もやりましたよ。綿羊の牧場さクマ出てね、綿羊喰われたりね、いろんなことあった。

短角牛貸し付けて、子っこ1頭返せばいいって、借りるんだわ。3年間の間にメスの子っこ生まれればいいけど、生まれなかったら、お金で払わなきゃいけないんだわ。3年も4年も経つと牛の値段が下がって、

親を売らなきゃぜんこ(銭こ)返されないって時期もあった。

なかなかうまくいかないもんだよ。役場で買ってきて、役場で貸すのさ。返した子っこが欲しい人いれば、また貸すとかね。

(平成18年2月25日採録、中岡俊子、中岡利泰)

## 高橋市三郎

大正11年(1922年)生れ

#### 町の様子

(えりもで生まれたの?)そうこ南部家でね。その下に家があつたんだ。これで4回目なの。年寄りのじさま、ばさまがいて、親たち二人いて、長男の俺がいて、妹が一人いて、それ亡くなって。

(やっぱりコンブ採りとかしてたんですか。この辺は今のよう状況ではなかったですよ?)

いやいやとんでもない、ここは2~3軒くらいしかなかたつたんだ。ここでもって20軒なんてなかった。

(いま、南部家橋のあるあたりは?)

今こういうふうでなく、まだひどい沢だった。土、運んで埋めて、だいたいこのくらいにしたんだけど。がっくり下がっていたんだわ。

川の水がでて、川水越えて、橋越えていったことあるんですよ。それで今はやりの護岸造ったでしょう。(この辺の人たち水没したの?)

まだ家(うち)がなんぼもなかったから、逃げる人逃げて。

(この奥の源流というのは、ゴテンとか言ってるところがありますよね?)

ああ和里ね、馬車が歩くだけの道路があつた。墓に行くのだって、今こそあだけど、灯台山越えて、川越えて行ったんだから。

(灯台山ってこれでしょう?高橋さんの居間からまっすぐ目の前にその山がある。)

青年団で道路作って。寂しいとこだったわ

(学校はえりもで?)

小学校も当時結構、子どもおつたんだわ。6年生でおりて、高等科さ上がる人はしれてて。今度は目黒から近浦から来て、77~78名卒業生がいた。

(その頃同級生覚えてる?健在なの?)

全部覚えてる、半分いないな、ここだけで10人同級生がいた。

(この辺というのは、今ある家ってどこどこがいたんですか?菊地さんとか?)

菊地さん、窪田さん、五野井さん、中居さん、小杉さん、そっちへいって砂原さんが、そんなもんだわ、後から来た人もいるけど。

ここが南部家で、上さあがってマタヌマ、又沼かいて、おかしい地名だ。呼びやすいからつけたもんだか。

(南部家というのは岩手のことでしょうか?)

いや~ここは様々なんだわ、青森もいれば、秋田もいる、岩手県、宮城県までいるんだから。それで南部となっているんだわね。橋も南部家橋だし、昔は幌泉村字南部家で。<町史によると、江戸時代末南部藩の陣屋があったことからという>

(高橋さんの祖先は本州から?)

青森、だから津軽弁が出る。親もここで生まれたが、先代がそっちの人で。

(じゃ、かなり古くからここに住んでいるんですね?)

古くなるんだべな、親でさえ生きていれば104歳になるんだから120~130年くらい前くらい。

ここから又沼、サッコツ、ノツナイ、アベヤキ、和里は、道路ついていたのは向うだが、こっちは馬車か馬しか歩けなかった。坂とかあったからね。

米がとれないから、結局イモだけで。イモで生活したようなもんだ。学校行く前に、イモ洗って、皮むいて、ほとんど弁当持っていく人少なかった。走ってうちへ帰ってきて、イモだもの。近道通って走ってきたもの。

(その頃のこと、大きな出来事で記憶に残っていることありますか?)

### 三陸沖津波

出来事ったら、2年生のときに三陸沖津波かい、庶野で5人が亡くなった。津波こそ3回も4回もきたけどね。あれは大きかったね。ひな祭りだからって、先生、学校途中で休みにするからって、帰ってきたことあった。水もなんも、川も溢れてしまってね。当時スケソの干したやつが全部川に流れて、流れて、今度、波引けたところが、川岸が狭くなり、出ていく所なくて、逆流してきて、木下さんのあたりまでいったらしい。

(この辺の家は無事だったんですか?)

何軒もなかった、2~3軒かな。コンブ工場、肝油工場があったが。

### マグロ

それから マグロ何百頭も獲れた、学校おりた(卒業した)頃だから16ごろかな。

(普段この辺では捕れないでしょうか?)

200kg ぐらいのが何百と、獲れたんだもの、1本3円50銭。その頃、米何円したか覚えてないけど、マグロの値段だけ覚えているんだ。出面賃といえば、手伝いに行くしょ。その日一日手伝って、代わりに1本もって行ってさ、1本持ってきたってどうするのって。そういうこともありました。それで結構もうけた人ありました。

(当時今のような輸送機関というのがなかった。)

### 出兵と抑留生活

(おじいちゃんは戦争に?)

昭和18年にいって、21年に帰ってきた。戦争に行ったらロスケにつかまって、捕虜になって、栄養失調になってみんな倒れた。あちこち行って、食べ物さがした。

一番先は旭川の部隊に入って、稚内から輸送船で、真岡に行って、そこから大泊に行って、ずっとカミシスカにいった、そこで終戦になった。弾もないんだもの。戦争するたって弾なんもないんだ。ぜんぶ南方に送って。空手で向かっていくようなものだもの。こんなばかくさいことしたくないって、逃げて逃げて、3日も4日も食わないで、つかまってしまった。つかまった時は3千人からいたんだよ。カミシスカで8月25日。暑い日でさ、戦死した人の傍にいたって、どうもならないんだわ。それ見ながらいて、これはどうにもならない、これで最後だなって思った。

1年半北樺太へ連れていかれてた。、日本にいる時の食べ物と、ロスケの食べ物と、ぜんぜん違うから、比べものにならない。とんでもない所に入れられてさ、小屋って。1日360gのパン一切れそれをもらってさ、腹減る腹減る。

(仕事って言うのは?)

木の切り出しとかイモ堀、いいイモできるんだわ、あそこは。もう霜降りて、雪降るようになってから、掘るんだわ。トラクターで起していく、そのあと拾うんだわ。足が浮いて行くんだわ。

焼酎にしたんでしょ。自分達は食べられなかった。普通は食べられなかった、その代わり捕虜50人位いたところに、監視が一人位しかつかないから、暗くなれば缶に穴あけてイモすって、でんぶん質多いもんだから。それドラム缶にあけて焼いて、空腹を満たした。

そういうずるいことした、そうでもしなかったら助からないわ、栄養失調で。

(そこで亡くなった方もいるんでしょう?)

いるいる目の前にいるんだもの、頭おかしくなって逃げるのがいるんだもの、そしたらぶたれる。あんな



マグロ大漁(昭和14年ごろ) 絵葉書

真似はしたくなかったな。死んだ人は、榎木(さんぎ) 積んで石油かけて。

(一緒にいった人はいなかったんですか?)

おりましたよ。死んだ川上さん、川上商店の。植木さん。部隊は別々だったから、めったに会うことはなかった。日曜に外出して会ったことはある。

(樺太には何年いたの?)

昭和 18 年から 21 年までいた。21 年の 12 月に函館に上がった。いよいよダメだったら自決せと言われた。だれも自決しなかった。いよいよダメだったとき、「天皇陛下万歳」って言った人誰もいない。聞いたことない。誰もがそう言ってる。

15 日にロスケが攻めてきて、あの大きな大砲つけたやつ、アメリカ製もってきて、それでどんどんやるんだもの。こっちは武器ないし、逃げて逃げて、哀れなものだね。それでも、助かりたいと頑張ってきた。ああいうふうになってくるとおかしくなるんだものね。逃げたってどうもならないんだけどね。

昼間はある程度、氷が融けるんだわ。晩になったら、ビリビリ冷えるから、はいてる靴凍って抜けないんだわ。それをバンバンたたいてとって、体感温度はマイナス 50 度もあった。

スープはクリスマスしか付かない、それにニシンのボスカ(ニシンをセメン樽のようなものに漬けたもの)、ギョウジャニンニクの漬けたものがた。

普段はパンだけ。それ 1 つ。パン工場に交替で 3 人組んで行くんだわ。ロスケもわかっていて、朝行けば、人のいい人だば、パンひとつくれるんだわ。パンの焼き方しくじったやつがあるんだ、それくれるんだ。9 時にくれて、また 3 時にくれる。余ったのを持ってくると見つかってしまっさ。どうしたら隠して持っていけるかと考えて、熱いうちにパンの上さ座るんだ。そしたらつぶれるべ、べたんとなったのを腹さまいてさ。ずるがしこくなる。

#### 帰還と家族

12 月に函館に上がって、新円になっているのが、わからないでね。兵長になれば 5 円もらえるんだわ、月。それもらって、それから 200 円くれたんだわ。ビックリしたんだわ。

イカの焼いているいい匂いがしていたんで、イカ一杯買ったら、100 円だものビックリした。

苦小牧まできたら、イカのせいか、腹が痛くなって、駅に降りたんだわ。そしたら飛びついてきた人がいるんだよね。びっくりした、そしたら、ばあさんだった。なんも知らせてなかったんだけど。

新聞に出て、帰還名簿に名前見つけて、苦小牧まで出てきたそうさ。

(ばあさんってお母さんね? それで戻ってきて 26 歳のとき結婚して、ずっとコンブ採りに専念したの?)

おれは 25 歳で戦争から帰ってきて、26 で結婚した。十勝の幕別の人、たまに買出しに行かないかと言われて、かたっていった、ところが見合いするようにしてたんだな~。いなきびとか大豆とか。道路工事最中なもんだから、歩いて広尾まで行ってさ。

(26 で結婚して子供さん何人いるの?)

4 人いる、えりもに一人いて大きいのは 55 だもの 54、52、一番下は 48 かな、孫は 12 人ヒコが 13 人、今は多い方じゃないの、まだ、片付かないのがいるから増えるんだ。やっぱり、その頃は暮らしやすかったんでないの。かえて、今みたいに物のある時と違って。

とにかく、その日暮らしみたいなもんだったけど、貯めるってことできなかったもの。なくなれば隣に行って、借りてきたりさ。コンブだって、今みたいに規則って、うるさくないし、たくさん採ったもんだ。

#### コンブとサケ漁

コンブ採って、アキアジ獲りにいって、権利もらって。今は息子がやってる。2 億 7 千万獲った時は最高だった。5 千万特別寄付でとられて、あとの 2 億 4 千万分けたら 1 人 900 万だった。

(そんなにとったことあったの? そういう景気は何年続いたの?)

そんなになかったな~。傷物とか入れて、平均の 700 円 (kg) とかだったから。漁がなかったから値段が良かった。増殖するようになってだんだん下がってきた。天然物だったら 1 人で 2 本くらいもらえば、かなりよかった。切り上げにね。

(高橋さんは老人クラブの会長さんとかやっていますよね?)

消防で 30 年、そして町の功労者になったんだわ。組合の代表幹事を 7 年やってそんなものだね。

(平成 17 年 2 月 27 日採録、小川とく子)



目黒学校林薪搬出(昭和 35 年)

## 種 綿 ハツエ 大正 12 年(1923 年)生れ

実家

父親鈴木惣七は宮城県仙台生まれで母親は庶野生まれ、父親は川崎船に乗っていて庶野に来たんでしょ。私は 6 人兄弟で、5 年生の時、庶野の斉藤校長先生が浦河の井寒台に転勤になったとき一緒に行き、子守などの手伝いをしながら学校へ行かせてもらったの。学校の休み時間になると走って家に帰り、おしめを洗ったりしました。そこのおばあさんは几帳面な人でね。6 年間そこにお世話になってから庶野に帰り、その頃、ホッキの缶詰工場があったので、そこで働いた。

三陸大津波(昭和 8 年 3 月 3 日未明)

美島と千平で亡くなった人がいたの。

美島の方は、親が子供たちをつれて平を登って、木に子供たちをつかませて、親がもう 1 人の子供をおぶって下の木につかまっただけけれど、手が離れてそのまま流されてしまい、兄弟二人だけが助かったの。

千平の方は地形が低いでしょ、男の子と母親が寝てた布団のまま流されてしまった、今のように、高いところに家は無いから。



チリ沖地震津波被害(昭和 35 年)

私らがいたルーランも一回目の波で父親に起こされたけれど、沖を見ていた父親が『何ともない様だから寝てもいい、着たまま寝れよ。』と言われ、学校の道具だけ風呂敷に入れ枕元に置いて寝た。父親も何ともないと思って寝たところ、どーんと波がぶつかって、昔だから今のように軽い戸じゃなく木の重い戸なの、それを押して波が土間に入ってきて、その頃はつまごを履いて学校へ行ったんだけど、そのつまごも浮いちゃってるの、寝ている部屋の 4 枚ガラスの窓をはずして、そこから外へ出ることになった。裏はすぐ山になっているけど、幸い雪がのっそりとあったのでそこを夢中で上がった。

隣の家のじいさんと孫さんが出てないということに気がついて、父親が下がって行こうとした時に 2 枚目の波がきて、戸板に乗ったみたいにして、じいさん

と孫さんがどーんとぶつかって来て助かったの。

上の方で馬を飼ってる金沢のひこさんが、乾いた草があるでしょう、それを敷いてくれて、火を焚いてあたらせてくれた。その日はとってもいい天気になってね……

家がどうなってるか気になって父親について見に行くと、家の外ざくりと柱はあった、中はからっぽで砂がのっそり、その中に薪ストーブがちょっと見えたのと、赤カブが砂の中に、それだけで後は何もなかった。

吉田さんの店から番屋前よりの方がすごかった。今の道路はこの後にできた、当時は馬車がかろうじて通れるくらいのものでした。

馬蹄湖に行ったこと

沼に行くといっても遊びでないの、「たけのこ」を探るのに母親につれられて行ったの。神社の所から、川を越えないで行ったね。今のようにズボンもモンペもないんだもの、短い手織りの着物を着せられて、それに脚絆をはいて袋を下げて行ったものだよ。

楽しみな他校の運動会

猿留と小越の運動会に行くのが楽しみだったね。他に出歩くことなんてないからね。猿留の運動会になれば、親戚のある人はいいけれど、わたしはおにぎりに漬け物か魚一切れぐらい持って、浜を歩いて猿留に行ったの、波が来るとずっと岸の方を歩いて、馬車が通るわけでもない、だんこま(駄駒)の通る踏み跡があるくらいのところを行った。

初めて猿留に行ったとき、猿留川は渡し舟だったの。今は狭いけどあの川は広くて水も多かったよ。今の橋よりももっと上の方に渡しがあった。初めて舟に乗って川を渡ったことが、今でも忘れられないことだね。学校は、多分、今の辺りだったんでしょ。舟は一度に乗れないから、先生が乗って何往復もしたね。渡しの所にじいさんのような人がいたから、そういう仕事の人が出たんでないの。



目黒小中学校旧校舎(昭和 42 年 1 月焼失)

2年目位の時、帰る時に波が出て舟が渡れなくて、工藤旅館に休ませてもらったことがあるの。家にはどうして連絡をとったんだかね。電話なんてないから、電報でも打ったんだかね。遅くになって、「今、しおし（潮引き）だから渚の方へ行けばいいから」と、旅館を出て浜の方に下がり、渚に近い所の川を歩いて渡った。その当時は、お金持ちは靴を履いてたけれど、わらじを履いていたね。

小越の運動会になれば、あの「赤はげ」を歩いて行ったね。ぞうりでなくわらじを履いてね。今の道路のあたりを歩いたんだと思うけど、駄駒が歩いて、道らしくなってるから、そこを歩いたね。浜辺は歩かなかった。悲恋沼は今よりずっと大きかった。苦別を過ぎたあたりからが赤はげで、砂が飛んでひどかったね。

その頃だと思うけれど、父親に「焼酎を買って来い。」と言われ、吉田商店までよく行ったことがある。4合ビンで45銭だったね。

（平成16年3月19日採録、草野泰子）

## 池田 彦左衛門 大正13年(1924年)歌露生れ

戦争へ

数えて21歳の時、検査で甲種合格し、当時は名譽に思いました。9月25日に旭川の部隊に入隊、12月いっぱい初年兵練習で、毎日厳しく、寝ることしか楽しみがなかった。しばれるし、雪が多くていやだった。

正月明けてから、上司に呼ばれ「お前、船に乗ってたのか？」と聞かれ、本当は磯に近いところまでしか行ってなかったが、「何マイルも沖に行っていた。」と言った。

すると、旭川から移動させられ、1月25日軍隊列車で山口に向かった。5日かかった。

山口榑ヶ浜の暁部隊に配属され、訓練を受けた。毎日手旗信号を覚えるのが辛かった。朝、上官の手旗信号を読む訓練をさせられ、早くできた者から寄宿舎へ帰る。よく宿舎の周りを2周させられた。

その後、機関班に入って学び、佐賀県の海岸線を鉄船に乗って警備した。機関銃を持たされたときには緊張しました。

しばらくして、終戦。軍帽、毛布、靴などをもらって帰ってきました。今残っているのは軍靴だけで、それを資料館へ寄贈します。

兄とザリガニ

兄の三郎が25歳の時に徴集を受けて中国に行つて昭和15~16年帰ってきたが、肺病にかかって浦河の日赤に入院していた。そのとき、同室の病人が、ザリガニをすり潰した汁を毎日飲んでいて。静内から浦河の高校へ通ってきている妹が毎日小瓶に入れて届け

ていた。

戦後、冬に静内の山へ造林の仕事に行ったとき、静内の駅を降りて、山へ向かうとき、その入院していた人と一緒になった。その人は女の人を連れていた。その人の名前も忘れませんでした。

父のこと

先代（父：彦治）は新潟県の西頸城郡能生町の生まれで、糸魚川のダムの発電所で働いていたと聞いています。それから、北海道の函館でイカが大漁で金になると聞いて、一人で移り働き、やっていけるということで、子供3人と母も移り住んだようです。何年、函館にいたか知りませんが、いろいろとやっていて、幌泉にやってきたそうです。当時の村長、鹿野約翰に世話になり、姉が女中として働いた。

幌泉に住んでいた頃、その鹿野村長と松川さん（松川座の人）と父の3~4人で発電所の計画を話していたようです。糸魚川の発電所で働いていた親父を誘って、幌満・ニカンベツ・様似川と調査して、幌満が一番適していると親父が決めたようです。

父の遭難

当時の有力者の寺井重太郎さんの話で、子供も家族もみんなフノリ・ギンナンソウに働けば、生活できるということで、歌露に引っ越したそうです。大正14年12月21日、正月の魚を獲ろうということになり、親父も誘われたそうですが、風邪でもひいていたのか、一度目は断ったそうです。でも、二度目に誘われた時には、いやいやだったのでしょうか、それでも行くことに決めたそうです。当時、船は小さなエンジン付の船で、港がなかったので、浜に巻揚げ機で上げ下ろししていました。1回目に降ろすときも船が横になり、元に戻して、2回目に降ろした時も船が上手に降りなかったそうです。そんなときは、「日が悪い。」とか言って、漁をやめるのが普通だそうですが、そのときはなぜか出漁してしまっただけです。無理をして出漁して、まもなく、風が強くなり「ひかた」になり、猛烈に吹いて、「ゴメの羽が折れるようなひかた」になったそうです。かなり小さな機械船だったので、逃げ切れなくて遭難しました。水タンクの蓋、材が油駒に寄ったそうですが、死体も上がらなかったそうです。

俺、二つだったから親父の顔もわからないです。新潟の出身地に一度は行ってみたいと思っていますが、親戚も少なくなってきたようです。

本家は池田正芳、すぐ上の兄です。

歌露の渡部さんが電気屋の手伝いをしていて、停電になると、その手伝いをしたこともありました。

子供の頃

小学校の頃、明日試験と言え、食卓の座卓を片付

けて、ランプの明かりで勉強しました。石油を焚くので、母から「早く寝れ～」とよく言われました。父を亡くして苦勞した母ですから、もったいないという気持ちもあったのでしょうか。一所懸命勉強して、卒業には学業優秀で賞状と記念品の硯箱（幌泉教育会の銘入り）をもらいました。小学校の時は「彦さん」とか呼ばれていましたが、中学校に入ると多くの生徒がいて、女子学生に名前のことを言われ、表彰されて名前を呼ばれるのが恥ずかしくて、勉強をサボりました。今も親しい人は「彦さん」と呼んでくれます。

### 屋号と家族

屋号は『かね門』です。自分でつくりました。面倒な時は、門を略字にすることもあります。

姉3人兄2人の6人兄弟。

寄贈した種痘済証は、大切に保管していたものです。当時の鹿野村長の印が押してあります。2回分あります。種痘は洞口先生がしてくれましたが、痛かったです。

### ザリガニとカジカ

嫁は松前出身で、今年86になる爺ちゃんが、10年ぐらい前に、孫が熱を出したとき、ザリガニをつぶしてガーゼにくるんで、頭に巻けば熱が下がると言って、パケツ一杯に獲ったそうですが、途中で死んでしまいました。松前では「ザリガニ」ではなく「さるがに」と呼んでいたそうです。

下手の沢にもたくさんいて、20cmぐらいのカジカもたくさんいました。カジカは串に刺して焼いて乾かして出汁にしました。ザリガニはストーブの上で焼いて、赤くなってきたら皮のままガリガリ食べました。

新松隆さん（昭和15年えりも町本町生まれ）も、ザリガニを「さるがに」と呼んでいたという。

（平成15年2月22日採録、新松隆、中岡利泰）



本町地区、昔の住宅（昭和30～40年代）

## 西嶋喜一 大正14年(1925)上歌別生れ

### ルーツ

先祖は富山県出身で、最初は帯広の駅付近に明治20年頃入植した。祖父西嶋源六、祖母イヌ、明治33年か34年に、帯広から上歌別に来た。父西嶋留吉、母マツの長男として生れた。男2人、女3人の5人兄弟です。

### 砕石と怪我

小さい頃、今の上歌別橋のまだ上の方に橋があった。そこで道路に敷くパラスを造っていた。クラッシャーという機械で石を砕き、それを敷いた。石は川原の玉石を使っていた。大きい玉石は人夫がハンマーで砕き、小さくしてからクラッシャーにかけてパラスにした。現場を見に行ったとき、ハンマーを振りまわしていたのが、私の頭にあたり、頭に穴があいた。今でもその時の傷痕が残っている。あの時は親にこっぴどく怒られた。病院に行った記憶がないので、自然に治ったと思う。

### 学校の頃

昭和6年幌泉尋常小学校歌別分校に入学。分校は4年生までであったので、その後は幌泉小学校に通学した。学校まで6キロくらいあったと思うが、歩いて通った。

家業は農家で家畜、ジャガイモ、豆類、カボチャなど野菜類を作っており、学校から帰ったら母さんが弱かったせいもあったが、俺の気性からだまっていれなく、農作業を手伝ったので、家に帰って勉強をした記憶はない。

だから高等科のときの中村先生（亡くなった）には随分色々な面で世話になった。

昭和13年に幌泉舟入瀬が完成した時に、全校生徒が日の丸を持って、紀元節の歌を港で歌った記憶がある。

上歌別の人たちも漁業の権利を持っており、春先になると海藻を採りに行っていた。海藻採りは戦後まで続いていた。

当時は、道路は砂利わらで、自動車はほとんど通らなかった。馬車は金輪で道幅は2.5間か3間位と狭く、ガタガタであった。

バス（学校に通っていた頃は）、上歌別から庶野線はまだ通っていなかった。大分遅くなってから、西川岩二郎さんがやっていた日高バスがあったが、百人浜を通過して庶野に行っていたと思う。当時バスに乗ったことはない。

追分峠は昭和5年か6年に切り割りした。国鉄バスが昭和14年か15年に、上歌別を通過して、庶野まで行くようになった。当時は木炭を焚いて走っていた。



猿留へ行く

小学生の時に浦河広尾には行ったことはないが、6年生の時に目黒の工藤旅館まで、三浦勝蔵爺に言われて、秋に魚もらいに行ったことがある。勝蔵爺に、「俺目黒まで1人で行けるかなあ〜。」と聞いたら、「馬がちゃんと道がわかっているから、乗っていれば連れて行ってくれる。」と言った。途中、道路工事をしていたが、道路のふちにタコ部屋が建っていて、監督する人がいて、人夫が一生懸命働いていた。

今の猿留トンネルがまだなかった、丁度、山から下りてきたところにガケがあり、木で橋みたいなものを作り、馬が通れるくらいの道だった。波がこないのを見てから通った。ひどい所だなあ〜と思った。

目黒の川にはちゃんと橋がかかっていた。橋を渡って馬がクルクル回っていると、工藤さんの家の前でとまった。工藤さんは請負局もやっていたんだと思います。馬を‘ほご’（解す：馬の鞍などをはずす）してくれて、その日は工藤さんに泊まり、次の日アキアジをもらって帰ってきた。

今になって6年生でよく行ったもんだと思う、俺も度胸が良かったと思う。

ホタル

上歌別にいたとき、水の濁った所にホタルの飛んでいたのを、何回か見たことがある。

追分山道

山道を親と行った時に、ビックリしたことは、土方の人たちが、追分峠の橋のかかっているところを切り割りしていた時だった。チョイチョイ聞いていた古山道（ふるさんどう）で、昔江戸時代・明治時代に通った道を切り割りしていた。

小学校に上がる前の年だから、昭和5年の時に教えてもらった。追分峠の切り割りの道路を、まっすぐに下がってガードレールのある曲がっているところから、下にさがって、川沿いに伝って道路がついていた。

肉牛牧場の入口の道を子供の頃に歩いていた。木のない所がたくさんあって、平らであの辺の木を全部切って、馬を放していた。

今の肉牛牧場のところに、大正時代に短角牛を飼っていた人がいた。木はあまりなく、広かった。倒した木を割って、マサカリだけで穴をあけて、牧柵を作ったと聞いている。

馬蹄湖（豊似湖）

昭和11年か12年に姉と先輩達に連れられて、駒止から奥に入って豊似湖に行ったことがある。今の水道水源の所に木材置き場があり、そこに橋が掛かっていた。その上の方に、つり橋といってもワイヤーが上と下にそれぞれ2本づつ張ってあって、上を手で、下を

足でつかまって渡った。桜公園の方から来る道があり、大正時代に使っていた電柱が立っていた。



明治時代開削の新猿留山道に残る電柱（平成9年）

今は木がたくさんあって見えないが、鉄塔が立っていたあたりから、一面がきれい見え、平地が多く、馬が放されていた。その近くに赤門といって鳥居が建っていた。昔、何かあったのではないかな。そこから妙見地藏・馬頭観音さんの所を通って、沼見峠を下って



サルル山道沼見峠の石碑

左：妙見さま（安政六年 1859 年建立）

右：馬頭歡世音菩薩（文久元年 1861 年建立）

馬蹄湖におりた。湖にはヒメマスが岸までたくさんきっていた。龍神さんの祠の下の小さな川に、ヒメマスが真っ赤になって集まっていた。

東京台

今の上歌別の駐車場のところから奥に登ってゆくと、台地（平地）がある。そこを東京台と言う。東の風（やませ）が吹くと、百人浜の方を見ると昭和30年頃までは、真っ黄色な土が、煙のように飛んで凄かった。そこで何で東京台と言うのと聞いたら、天気の良い日は、あそこに上がれば、どこでも見えるから、東京までも見えると言うことで、東京台というそうだが、本当だろうか？

休み所

歌別にある新しい焼却場から、もう少し上歌別よりの土が堆積してある、あの辺を「休み所」と言っていた。私が学校へ通っていた時に、まだ木の地塚があっ

たから、家は建っていたと思う。三浦勝蔵さんの婆さんが歌別の人で、「休むところがあった」と言っていた。



歌別休所風景



(平成 19 年 1 月)

当時道路は、旧歌別小学校(中央保育所)のところから上にあがって、今の道路(国道)に出て、上歌別の方に行っていた。馬車もそこを通過していた。「休み所」のところは湧き水が出ている。

#### 結婚と家族

上歌別の実家で昭和 22 年にあげました。嫁さんは近浦の石井さんからきました。当時の結婚式は家でやったので、人数は少なかった。お膳を一人一人に付けてお祝いをした。

歌別小学校の校長先生の奥さんが料理を作ってくれたこともありました。

子供は長女が私の隣りに、次女は札幌、長男は帯広にいます。孫 6 人、曾孫 2 人です。

#### 祭り

馬頭観音まつりは盛大であった、部落のみんなが集まって、赤飯などをふかして、ドングイのハツパを採ってきて、それにご馳走をもってあげた。また集まった人みんなにもあげた。

#### 戦時中

ほとんどの農家が軍馬を 3~5 頭飼育していた。三浦勝蔵さん(修蔵さんの祖父)の所は別格で、60~70 頭飼育していた。種馬も 2 頭いた。

戦後、高松要正さんと海藻の買い付けをやったり、開発局に 4 年勤め、田中牧場、尾崎建設、北海道肉牛牧場、坂田組土建に勤めたり、色々経験したが、母ちゃん(奥さん)のおかげで、今まで健康でいれたことを感謝している。平成 14 年に突然、母ちゃんが亡くなり、途方にくれたが、幸い 3 人の子供もおり、隣りに娘夫婦もおり、みんなに助けられ現在は幸せに暮らしています。

(平成 18 年 3 月 23 日採録、新松隆・新松信子)

## 佐藤 清 (旧姓岩田) 大正 14 年(1925 年)生れ

### 入植

明治 23 年(1890)、私の祖父周三郎、祖母きぬが、埼玉県から一族を連れて、アベヤキ川の上流に入植しています。川をはさんで笛舞側で、当時は笛舞村といいました。(現在、水野智さん宅、奥の牧場地帯)

あそこは比較的、地味が豊かな所で、川のこちら側と比べてみると、ちょっと畝で土を掘ると、赤土の肥えた土なんです。こちら側は、表土は黒いけれど、ちょっと掘ると粘土質で水はけが悪いんですね。

あそこは国有未開地で、誰も開墾していない一角があったんですね。

そこに願書を出し、当時は小屋を建てて、開墾に従事した、これが始まりですね。

国有未開地とよばれ、売買は国有地ですから、開拓のために願書を提出して、許可をもらい、5 年後成功検査を受けて、初めて安い価格で払い下げになるんですね。

その当時としては、お金をたくさん持って来た様で、刀や槍、桐の本箱やら、厚い辞典のような書物やら、衣服など随分持って来たようです。

この幌泉では、当時、馬車で米噌といった米や味噌、醤油をあげて開拓したのは、岩田さんだけという話を、熊沢末吉さんが私に教えてくれました。

明治 29 年祖父周三郎が馬に蹴られたのがもとで、明治 31 年に死んでるんです。その時、私の父昇之助は 14 歳だったといいますが、成長するまで、叔父の恵作が後見人となって暮らしたんですね。

叔父の恵作は、今の役場辺りに簡易裁判所があったらしく、その書記を務めていたといえます。

北海道に渡る前に身に付けていたんですね。収入の道を確保していたんですね。

子供を案じたのでしょう、曾祖父の孫兵衛も単身でここへ来て、明治 36 年、76 歳で亡くなっています。

いろいろ調べてみると、どうも北海道に渡ってきた理由は、秩父事件にも関連性はあるように思います。

ここでの目的は、馬の飼育だったんですね。西舎の御料牧場から払い下げの馬を何頭も買い、その頃は日清戦争にも勝ち、陸軍が馬を必要としていたので、軍馬の生産に目的を持っていたようです。

私が生まれたのは、祖父が入植してから 3 回目の家でした。

今の現在の水野智さんの家から、更に奥で、4 間道路の、当時は村道で、今でもあります。

当時は田中さんが、毛馬内さん、岩田と 3 軒がそこで生活していました。

### 通学

冬には多い時で 3 尺(90 cm)、少なくとも 2 尺(60 cm)

くらしい雪が積もりましたね。

日中に照らされ、朝晩になると冷えるものだから、表面が硬くなるので、道路を通らないで、雪の上を通り、途中穴に落ちてみたり、そんなことをして学校に行きました。

学校へは6kmありましたので、冬は2時間ぐらいかかりましたね。1年生から親がおにぎりを作ってくれ、それをカバンに入れ、1年生は午前中なのに、帰るまで時間がかかるので食べて帰りました。毎日です。

雨が降ったら川の橋が流れてしまう。吹雪になると行けない。2年生から3年生の頃、1年間の内、欠席90日ということもあった。当時、よく落第もしないで、上のクラスへ進めたものだと思います。

私なりに学ばなければならないと思ったのは高等科になってから。当時、お金のある家の方は、旧制中学に行きました。貧乏人は高等科2年を卒業で終わりです。

私は旧制中学へ行けませんので、『中学講義録』というのがありまして、今でいう通信教育ですね。山から椎茸を採ってきて、母親に売ってもらい、講義録をとってもらい、それなりに勉強したものです。

自分で言うのもおこがましいですが、向学心に燃えていたのだと思います。

そんなことも影響して17歳の時、海軍の飛行予科練習生の七つボタンを志願して行きました。

#### 予科練習航空隊

予科練習航空隊では、当時乙種と甲種があって、甲種は旧制中学4年終了した者が入隊でき、尋常高等小学校を卒業の者は乙種に入り、航空力学などをたたき込まれましたね。

乙種予科練習生特9期生で、同期は北海道から13人でした。2期上の方は台湾に行き、沖縄戦に駆り出され、全員死亡しました。

私達は鹿児島県の指宿から、熊本県人吉の高原(タカンバル)海軍の特攻基地に移って、2ヶ月後に終戦になりました。

#### 川魚釣り

子供の頃、周りは年上の人ばかりなので、一人遊びが好きでしたね。あの辺いたる所、探求心で駆け巡ってましたね。

アベヤキ川を橋まで下り、川面をじっとのぞき込んだり、風の音を聞いていると自己暗示にかかるんでしょうか、川が逆流して見えたのを覚えています。一人遊びは、きっと心地よいものだったんですね。

魚釣りもしました。ウナギ、ヤマメ、イワナ、カジカなんでもいましたよ。ウナギはヤツメウナギではなく、当たり前のです。ヤツメウナギは、笛舞の白川さんの川にもいました。

普通のウナギが川を上ってきたんですね。

川の上流に行くと、越冬したイワナがいました。黒々としたイワナが釣れるんです。

当時、貧乏で釣り針なんか買ってもらえないので、母親が使っていた裁縫の待ち針を曲げて、それにミミズをつけ、ヒモで釣るんです。イワナは貪欲なのでそれでも釣れるんです。

いっぱい釣って帰っても、母親は喜ばないんです。泥臭いと言ってね。

ヤマメとかカジカを釣って帰ると、それを焼いて藁籠(わらひご)で、一匹ずつ編んで、何も干しておくんです。冬場の味噌汁の出汁になるんですね。

それが今では、一部の人の考えで、砂防ダムを作り、川を殺してしまいました。大雨で水が出たからといって、海藻が減収になるというデメリットばかりでなく、水が出たので川がきれいになるとか、上流からの栄養が流れ来るというメリットもあったと思うんです。

山が山でなくて、川が川でなくて、何と呼べばいいんだと言いたくなります。

秋になると草っぱらに仰向けになって、空をながめ空想を描いていましたね。それが海軍の飛行士になるうという願望につながっていますね。

#### 飛行機の不時着

昭和7~8年頃、北海道で大演習がありまして、ノツナイに飛行機が不時着したことがあるんです。赤トンボといいまして複翼の飛行機でした。親と一緒に山から下りて、見に行ったのを覚えています。

#### 炭焼き

当時はいたる所に木があった。畑を作るのに、木を伐採しなければならぬ、その木の仕末をしなければならぬ、そこで炭を焼いたんですね。

秋から冬期間は、ほとんど炭焼きをして生活していました。市街地は料理屋も遊郭もありましたから、そういう所では座敷は炭火ですから、それなりの需要があったので、炭を焼いてお金にしていた。



幌泉市街地(昭和34年)

ほとんどの人がそうでした。その当時、貧乏人のやることみたいに言われましたが、それは貧乏ではなく、市街地で暮らす人が必要であったものですね。

昭和 25 年農地改革で、姉が和里に開墾に入った時、頼まれて炭窯を作りました。炭かまどを作り、炭を焼いたこれが最後の機会でしたね。

イタヤ、シラカバ、ナラ、カシワ、何でも焼きましたが、センノキは火を起ことすとパチパチはねるので嫌われました。

当時入植した人はたくさんいました。石川さん、村上さん、今井さん、進藤さん、森さん、横山さん、坂本さん、水口さん、岡さん、佐藤さん、渡辺さん、が入植しました。

#### 南部家の辺り

昭和 6~7 年頃、今でいう自動販売機がありましたね。砂原さんの向かいに、中居さんの店があって、道路のところに『のんきな父さん』という機械がありました。スタイルが、麦わら帽子をかぶって、メガネをかかけた様な形で立っているわけです。

口から 1 銭を入れると、それに値する様な物がころころと出てくるんです。

道路をはさんだ海岸側は、五野井商店があって、そこにも『のんきな父さん』がありました。

#### キツネにつかれた話

子供が 4~5 日も帰らず、捜し歩き回って、御殿の山(ルチシ岳)へ行ったら、アザミの花がいっぱい咲いた中で、馬糞を食べていたのを見つけた。1~2 年生なら御殿山まで歩くのは無理なので 3~4 年生だったのだろうと母から聞きました。

沢町の奥、ババフトコロでヤマブドウの木の下に女の子が座っていた。帰らないので、2 日くらい皆で捜していた。

昔は女の子でも、わらじを履いて、庶野からでも、‘尻っばしょり’をして(着物のすそを汚れないようにして)歩いていました。お土産に魚の干したのを背負って歩くと、キツネがどこまでもついてくる、それをキツネにつかれたと言いましたね。

妻の母、トミさんから聞いた話です。

(平成 16 年 3 月 7 日採録、草野泰子)



本町秋祭り(昭和 20 年代: 洞口医院前)

## 金沢 秀子 大正 14 年(1925 年)生れ

#### グラマンの機銃弾

機銃弾、戦後 20 年もたって、家の裏のナラの木の株に突き刺さっていたのを見つけたの。アメリカのグラマンが空襲に来たときのものでしょ。(資料館に寄贈していただきました。)庶野でも焼けたと聞いています。大樹も、国道も鉄道も攻撃されました。帯広も焼け野原でした。



機銃弾と刺さっていた切り株

#### 主人と戦争

戦争の時には、十勝にいました。終戦後に庶野に来ました。昭和 20 年の空襲の時にはいませんでした。親が二人いましたけど、その当時、皆戦争に行っていたから。主人は終戦のときは樺太の国境と聞いています。鉄砲が飛んできたとき、隣の人が死んだと言っていました。本人には傷もなしに。1 年半位、抑留されて帰ってきた。初めは兵隊にいたんだけどね、近衛兵って、あれにも行ってたらしい、それから北京。

古い雑誌、父さんの兵隊のときの物、資料館に寄贈します。代がかわればみんな捨てるでしょ。だから、資料館へ。昔の手袋、中に綿が入ってて、あったかいでしょ、昔は作ったんでしょ、刺し子して。「てっか~し」っていうの。着物は明治時代の人の物。東洋の佐々木キサさん 103 歳で亡くなった、10 年も前にね。ここ金沢から嫁に行った人なの。その人がくれたの、明治時代の舅さんの着物だって。昔の人は丁寧な仕事をしたんだね~痛んできたなら“継”しては、縫い返して、これ染めなおしたらしいよ。

#### 嫁入り・仕事

昭和 23 年、23 歳で嫁に来ました。大正 14 年生まれです。見合いもなんも、顔も見ないでね。大樹からです。

漁師だとは知ってました。金沢から大樹に嫁に来ている人がいたの。それで世話されて、ここに来たの。コンブだけ。干場はここ(ルーラン)の崖の下ね。だ

から上がったたり降りたりしてたんだ。コンブだけなら大変だったからね、冬は山の木を切りにね。遠くへは行かないけど、ここの山だね、三枚岳の下の方まで行ったんでないの。よその人の木を切って、その賃金をもらって、炭焼きの人の木を切りに頼まれて行ったり、シイタケの木を切ったり、頼まれてたね。星さんがシイタケやってたでしょ。

魚獲る漁師ではなかったんだわ。ウニ採るようになって、ウニで少しはよかったね。昔も殻で出してたね。

披露宴はこの家でやりました。障子全部はずして。ここのじいさんばあさん死んでも、ここで葬式やりました。そのためにずっと開けれるようにね。

庶野に来た時は黄金道路通ってました。木炭バスってあるんだわ。嫁に来るときは、進駐軍のトラックを買って持ってた人があるんだね、そのトラックに乗ってきた。あの頃は食べるものもない、貧乏生活に慣れていたけどね。なんでも節約っていうことを覚えちゃってね。進駐軍のトラックを持っていたのは大樹の人、嫁送る人間は、みんなトラックに乗ってきた。荷台にね、嫁入り道具は箆笥、買って持って持ってきたよ、ほかに布団、鏡台ぐらいかな、今でもその箆笥あるよ。使ってる。

神主が来て式をすることはなかった。仲人がいて、ただ三々九度して、大樹から着物を着せられて来たよ、トラックの助手席に座って、6月に来たよ。コンブの前でした。

農家の娘だからね、働くことはね、どってことなかった。

#### 水汲み

当時は水道もなかったね。隣の家の脇から下に降りていくにいいんだ。いい水が出てて、吉田ガソリンスタンドの裏、水がだ〜と出てるんだわ、いい水だった。そこへ行って担いでくるわけさ。知らないで来たもの、天秤で、夏はともかく、冬はすべるでしょ、ね〜。わらじはいたり、かんじき、かねのすべり止めつけてね、まさかり持ってって、氷割って段ついたりさ、それでもやれるもんだよね。今までしてきたもの。

結婚当時は風呂もなかったから、よそに行ったわ〜もらいに行ったの。「今日風呂炊くぞ〜」って、もらいに行くの。うちで風呂買ったのが、末の子が生まれた頃、50年ぐらい前、それでも水を担いでこなくちゃいけない。担いできてもいいから、自分のうちに風呂が欲しくてね、窯風呂を買ってもらったの。ジュラルミンだかの窯風呂、今でもあるよ。小屋に入ってる。冬、雪あるときはね、今度、熱くなったら雪を入れてね。

#### 薪切り

薪は、払い下げ、薪の払い下げって、みんな山から

払い下げしてもらって、だんだん高い山の方へ行って切ってね、旧肉牛牧場まで下げると、今度、崖をね、薪を投げる、一本づつ投げて投げて、「ひらまくり(急な斜面を使って薪を下に投げ落とす)っちゅうの、そいでもってやったね。崖の下からは、馬橋頼んだよね、人が引くそりで運んだこともある。山の上行ったとき、私も行ったの、木切って、雪降ってからね、肩にひもかけて引っ張るしょ、手に持つとこあって引っ張るしょ、「後ろから押せ」って、私が押してさ、ざ〜っと押して来た。崖のふちまで持ってきたら、それから「ひらまくり」っちゅうやつやるんだね。「ひらまくり」には私は行かんかったから、下へ降ろしたら、馬橋を頼んだらろうね。うちでも馬は飼ってたけど、馬橋に使うような馬ではなかった。何年いたのかな〜「馬はあんまりもうからんから」ってやめました。

本当にいろいろなことをしたけどね。これだけ生きてこれるんだから。



金沢秀子さんが飼育したヒツジの毛を紡いで染め、編んだ思い出の品。

#### 財布番

結婚したときは、配給でした。配給手帳ってのがあってね、もうなくしたけどね。私が嫁に来たとき、じいさんは75かな、ばあさんが73ぐらいだったかな。それからずっと、財布は一切じいさん(主人の親)が持ってるんだから。子ども学校へ行くようになってね、かばん買ってもらったり、教科書買ってもらう、みんなじいさんにお金出してもらった。そしてね、10年は財布渡してもらえなかったな。

山で働いたお金もらってくるしょ、「ハイ」って、じいさんに渡すわけ、一切ね、少しでも小遣いみたいにくれればいいんだけど、全然くれないの、全部渡してね。コンブは組合にじいさんが行って勤定もらってくるから。着る物も買えなかったよ〜。まあ、あるもの着て暮らしたね〜。

食べ物、米、配給でしょ。吉田さんからタバコ買ったり、あと、どうしてたんだらうね〜。初めは、嫁に来るときもらってきたお小遣い、みんな父さんのタバコ代に使ってしまった。いちいちじいさんに頂戴っ

て言われんしょ。「いや～じいさんタバコなくなった。」「もう、なくなったってか！」って、「じいさん、米なくなった。」「早く言えばいいのに！」ってね～。そうやって暮らしてきたんだよ。

今の子供、学校おりて、お金もらったら、自分のもんだもんね～。私らは全然自分のものにならんかったわ～。一応、ばあちゃんには少し渡すんだわ、大きいのは、じいさん。なにになに買うっていったら、ばあさんは出してきてたけど。みんなそうだったよね、だから、そういうもんだと思っているから。

#### 水道がくるまで

水が欲しくて「水が欲しいな～」って夢にまで見るんだわ。雨降った、雪降ったって言ったって、水なかったら困るでしょ。だからね、今度は雨水貯めてね、雑巾がけしたりしたもんだよ。水道になったのはいつだったかな～町の水道は遅いけれど、その前に機械で吸い上げたことがあったんだわ。うちの娘が中学の頃だから、40年ぐらい前、「水道引っ張る」って、下の湧き水から、掘って水溜めて。吸い上げるって、機械がね、中間にあるんだわ、そこへ行って、電気入れてあげなきゃいけない。上がり下がりがなくなったわけではなかったの。

町の水道になったけ、もう、よくなったね。

水運びは子供たちも手伝ってくれたね。私たちは一斗缶、子供らには、五升の缶、ちっちゃい缶に取手つけて、かつがせてね、みんなしてやったんだわ。洗濯物ゆすぎに行くときは、下の水湧いてるところへ行ってね。

コンプに行くといったら、そこの坂、水汲むのとは別の坂、降りていくようにしてあるから、一日に何回も降りたり上がったり、大変だった。若いときっていいもんだね。



ルーランの湧き水  
(平成19年1月撮影)

#### 産婆

子供たちの出産もこの家でした。産婆いたからね、庶野にね。長岡ねねのさん。庶野の人、みんな、取り上げている。取り上げられた人の子供まで取り上げていたね。彼女は一生涯ここで暮らしたよ。

#### 楽しみ

楽しみは、運動会、お祭りとか。嫁に来て、子供できたら、「映画見に行け」って、行ったって子供泣くから行ったことないけど、子供生まれる前、「映画見てこい」ってお金くれたんだね。父さんと二人で映画見にいったよ。嫁に来た人でも全然いかん人、たくさんいたよ。私はまだいいほうだった。映画は長岡さんの隣の大きな小屋、あそこが劇場だったの。吉井さんの修理工場のあたりにあったの。北村さんってね、劇場やってたの、民謡、映画、芝居だとかなんでもやっていたんだよ。年に何回もあったんでないかい。北村さんが庶野でやってたの。みんな、映画なんか、結構たくさんいったよ。それしか楽しみないもんね。

#### ラジオとテレビ

それ以外は、ラジオ。昔はNHKだけ。ラジオだって、私嫁に来た頃、入ったり入らんかったりするんだ、変な音入ったり、機械があんまりよくなかったんだよね。そのうちにね、漁組で放送するやつにラジオがついて、柱立ててず～と線引っ張ったったな～(有線)、あれすぐ倒れたけど。なんぼかラジオ入ってよかったんだけどね。家の中でラジオ聞けたからね、庶野中線ひっぱって、お知らせなんかの放送も入ってたんだ。そのうちに、今の電池入れるラジオが出てきたからね。テレビだって、うちで昭和45年3月にじいさんが亡くなった、その秋にNHKのアンテナが立ったんだ。白黒のテレビを中古で買って見たんだ。何年かして民放の放送が入るようになったけど。

#### 車

車は買わなかった、バイクは買ったけど。コンプも人力。車ないばかりに、歳とってから楽したね。だからよかったんだよな～って、不便した分よかった。娘や息子は車なかったら、なんにも歩けないんだよね。仕事もできないんだよね。車にはお金もかかるからね。

(平成17年8月探録、中岡俊子、中岡利泰)



学校にテレビがきた。(目黒小中学校：昭和36年)

## 内藤ヤス 大正15年(1916年)生れ

少女時代

私の出身校は幌泉尋常高等小学校で、小学校の頃は、どこへ行くのも歩くのが当たり前で、笛舞小学校の運動会にも歩いて出掛け、選手だけが自転車の荷台に乗って行ったものです。同級生の多くはすでに他界しましたが、大法寺住職の長坂松年さんや、新浜の嵯峨喜一さんは元気そうです。

私が高等科を卒業するとき母は、これからは女性には学問が必要だと言って、浦河の実科女学校への進学を薦めたのですが、試験に落ちたら恥ずかしいと言って受験しませんでした。当時、町内の裕福な家庭のお嬢さん達は、函館の女学校に進学していました。藤原順子さんや柳さんの娘さん達は、函館大妻実科女学校へ進学しました。

両親が「カネサ」で働いていたことで、私が小学校3年生まで、家族はカネサ吉田さんと一緒に暮らしていました。カネサの先代ばあさんには子どもがいなかったためか、私の母を気に入ってくれて、よく面倒を見てくれました。母も両親がいなかったため、先代ばあさんを親のように慕っていたようです。

私が学校へあがる前までは、母親がカネサの仕事で忙しいときは、「だるまや」へ預けられたものです。入学前に、カネサで働いていた人の子供に付いて学校に行き、後ろに座って授業を見ていたこともありました。

村役場に勤務

村役場へ勤務したのは小学校の高等科を卒業して1年後です。当時は戦時中でしたので、女性の職員が多かったのです。先に入っていた栃久保富美子さんに事務をいろいろ教わりました。長岡隆一村長、湯浅安雄上席書記(助役)、中沢雪郎さん、栗山末吉さん、石川鉄意さん、金沢勇さんらが勤務していました。女性では小松ワカさん、栃久保富美子さんらに、私の同級生も数人勤務していました。

戦時中の経済統制時代なので、役場では物資の配給切符を扱っていました。その担当係が警察官あがりの人で、村民への態度がとても横柄であったようです。特定の人だけを招集する会議に、私が案内状の発送を間違えてしまい、関係者以外の人でも来庁して窓口を混乱させたこともあります。長岡村長にも叱られ落ち込んでいたとき、湯浅助役さんが慰めてくれました。

統制物資の取り締まり

戦時中は経済警察が、統制物資の流通に睨みを利かせていました。呉服屋を営んでいたカネサ吉田も調査の対象となり、蔵の中を調べたら、高価な反物がたくさん隠してあることが見つかった警察に没収された

のです。おばあさんが隠してあったのを、経営者のおじいさんが、まったく判らなかったというから、戦時中でも経営が裕福だったのでしょう。反物を没収されて間もなく終戦になったので、あの反物はどこへいったのかと、関係者の間でしばらく話題になったものです。



新浜の住居内(昭和32年ごろ)

室蘭の洋裁学校へ

役場を退職したのは終戦の翌年21年春です。手職を身につけようと、室蘭の知り合いの家に下宿をして洋裁学校へ通いました。そこでは1年ほど洋裁の基礎を習いました。当時は、どこへ行くにも米を持って行かなければなりませんでしたが、母は毎月、下宿先へ米を送ってくれました。下宿した家でも米に困っていたので、母が送ってくれた米に野菜類を入れ、雑煮のように薄めて食べました。トウキビの粉を団子にして食べたり、戦後すぐは、食糧の確保が最大の関心事であった大変な時代でした。

室蘭で洋裁の勉強を続けていたかったのですが、結婚の話も出たりで、両親は一人娘は嫁に出せないと反対していたこともあって、1年余りで帰郷してきました。帰ってくると、街の人に洋裁学校へ通っていたことが知られていたため、古着の仕立て替えを頼まれて困りました。それでも、ミシン代も支払う必要もあって、曲がりなりにも無我夢中で頑張りました。

最近、診療所の橋浦看護婦さんが、「私の母が戦後、闇で買った服地で、おばさんにセーラー服を仕立ててもらい、それを着てうれしかった。」と話してくれました。

沢町の奥で氷製造

私が小学校の高学年になり、父・由太郎はカネサ吉田から独立して氷屋を営んでいました。沢町の奥、ババフトコロからの水が水質検査の結果、飲料水になることが分かったので、戦後、引揚者住宅を建てたあたりに小さな池を掘って水を引き、冬の間氷を切り出して、近くのおが屑を入れた小屋に保存しておきました。透き通るような良質の食用水でした。私も運びの仕事を手伝いました。夏になると、旅館や魚屋、料飲店からの注文で保存していた氷を配達するのです。そ

それぞれの冷蔵庫に入るように切ってリヤカーで持ってゆきました。朝早く荷造りして国道ぶちに出しておくと、様子や浦河へ日通のトラックで運んでいったのを覚えています。

#### 平価切り下げ

その頃の住宅は、洞口医院の向かいの三軒長屋でした。(現在の神田生花店から内藤宅の間)隣は“さぐり”(板壁)一枚で金子七郎さん宅でした。子どもの頃の洋さんが、節穴から覗きながら話しかけてきたものです。トイレも共同使用の生活でした。

そんな生活から抜け出すために、両親は苦労しながら貯金をしていたのですが、それが平価切り下げによって貯金額が大幅に減ってしまいました。目ざとい人は、土地や建物を買ったりして資産を増やしていましたが、父はそれもできず、切り下げられた貯金通帳を私たちの前で燃やしてしまったのです。当時大金で1万円、サラリーマンの給料が30円頃の時でした。父は住宅を建て、私に養子を貰う準備資金だったのです。

#### 麹屋に商売替え

母は氷で稼いだお金は水になって流れたつもりで、また一から出直そうと父を励まし、父はその後、戦時中に麹屋に転向したのです。麹の製造技術は、カネサに出入りしていた庶野の吉田さんの妹さんから教わりました。その後、研究熱心な父が、試行錯誤を繰り返しながら、良質の麹を製造できるようになりました。

あちこちから卸して欲しいとの要望がありましたが、製造したものは、個人に販売するのが主で、特に店舗は構えていませんでした。

生活物資の乏しかった戦時中は、他に味噌や醤油も製造していたのですが、美味しいとの評判で、近所の人たちがよく買いに来てくれました。

麹が売れて評判が良くなった頃、カネサの正治さん(後の町長)が父に、カネサの名前が入った袋とレッテルを用意するから、すべてカネサに卸すように強く働きかけてきたこともありましたが、カネサとは親戚関係にあったので父は困ったと思います。

麹に使う米は経済統制で手にいれられない時代でしたが、本州から入港する船が闇米を夜遅く、買って欲しいと持ってきたので、それを買って原料にしていました。

夜遅く来るので、手持ちの現金がなかったときは、向いのカネサの別荘へ借りにいったのですが、なかなか貸してもらえないこともありましたが。

米の使用量や製造した麹の売り先などは浦河税務署に申告する義務がありました。内緒で製造したとき税務署に摘発されて、多額の追徴金を課せられたこともあります。

税務署長と署員が調査に来たとき、黒板に書いてあった売り先が帳簿に記帳してなかったことを指摘されて困り果てましたが、そのとき母は「自分が娘にそうさせたのだから、連れていくなら私を連れていって下さい。」と申し出たのです。署長がよく調査すると言って、その場を治めたこともありましたが。部下の人がよい人で、「商売が緩くないのは分かります。」と慰めてくれました。

帰りに、だるまやさんに立ち寄った署長は「内藤麹屋のばあさんに自分を連れていけと食い下がられ、度胸の良さには参った。」と、話していたということです。

私たちが税務署には相当気を遣い、私は米を背負って浦河の署員宅へ通ったものです。あの時代を生きるためには、しかたない選択であったと思っています。

父が麹屋を始めたもう一つの理由は、統制で酒類の製造が厳しくなっても、麹があれば「どぶろく酒」を製造して、好きな酒を楽しめると考えたようです。

#### 先祖のルーツ

私の父は、2代目・吉田勘之助(吉田元町長の父)の末弟です。小林ミエさんの母親は父の姉です。吉田勘之助さんは10歳頃のとき吉田家へ養子に出されたので、私の父と姓が異なるのです。幌泉に渡ってきた初代吉田勘之助さんは、東洋の吉田さんの娘さんと結婚して、商店を出したのですが、奥さんが3~4年で死去されたため、青森の八戸から親戚筋に当たる2番目の奥さんを迎えたそうです。しかし、子宝に恵まれなかったため、内藤家から養子を迎えたのです。

内藤家の先代は岩手県宮古市の出身です。町内で最も近い親戚は、内藤叔広さんの父仁平さんです。血筋は吉田和道さんも内藤叔広さんも同じですが、仁平さんの父親と私(ヤス)の母の祖母が結婚しています。

#### 民生委員に

私が町の公職に携わったのは、民生委員のときです。会田七枝さんの後任に推薦されて、2期・6年間勤めました。その後は川村節子さんをお願いしました。

(平成16年3月20日採録、神子島清八)



幌泉市街と幌泉港(現:本町、えりも港湾、昭和20年代後半)



## 川越清夫 大正15年(1926)浦河絵笛生れ

海軍学校へ

絵笛に生まれて兵隊に行くまでは、井の中の蛙で、どこも知らなかった私ですが、海軍の通信を希望しました。しかし、通信という話が途中から急に変更になって、電測兵という名前で採用になりました。当時、電測という兵科を聞いたこともなく、いろいろ照会しても詳しく分からない状態でした。浦河を昭和19年5月23日に出発しまして、横須賀海兵団に入るといって採用通知でしたが、北海道で一番先に着いたのが私たちでした。上野駅に着いたとたん「お前たちは直接学校に入れるから。」と言われ、浦河からは当時8人ほど一緒でしたが、上野で別れて、私ともう一人の二人が、直接、横須賀の海軍通信学校藤沢分校に入りました。

そこでは、校舎を作っている最中で、窓も入ってないし、バラックで、桑畑に、にわか造りという感じで、大工さんたちが「3年も持てば、この兵舎はいいんだ。」といううわさが聞こえてきて、おかしな話だなと、その時は思いました。

私たちがその学校に入ったのは5月25日の夕方でした。誰も来てなくて、北海道組が一番乗りの様で20人もいたでしょうか。青森を出た時は、10両ぐらいの臨時列車で、全員海軍の志願兵でしたが、他の者は皆、横須賀の海兵団に入ったようです。次の日からこの学校にもぼつぼつと入り始めて、入校式は6月1日に行われ、一番最後の人は、6月5日の人もいました。

6月と7月の2ヶ月は新兵教育でした。7月31日に晴れて、一等水兵を命ぜられ新兵教育を終了して8月1日付きで海軍電測術練習生を命じられました。1500名前後だったと思います。また、電測兵は航空・攻撃・船舶・警戒の四分類に別れ、私は警戒でした。

兵舎は十棟位が3~4ヶ所あり約2~300m離れた校舎入口に、本部があり事務所や診療所等々がありました。兵舎の近くには、講堂が十数棟あり、そこで勉強し専任の教員(主に下士官)に教わりました。講堂には前の方にレーダーや部品も並び教わりました。

12月30日が卒業式で31日に北方から南方まで、前線に散らばりました。

私たちは見張りの勉強をしておらず、レーダーだけの勉強でした。英語は敵国語ということで全然知らなかったのですが、通信学校に入ったとたんローマ字を覚えろと言われて、電圧のボルトだとか、アンペアだとか真空管(バルブ)の名称だとか、どうしても日本語では使わない言葉があり、勉強させられました。極秘の赤本で勉強させられ、時間が来ると金庫に片付けられるので、勉強せよと言われても、メモなどが班長や教官に知れると軍法会議ということで、ノートの端などに、赤本の内容をメモしたり、転記してはなら

んということで、苦労しました。特にレーダーの電波の周波数は軍規で厳しかったです。

海軍通信学校藤沢分校では、私たちの兵器は新兵器ということで、高松宮殿下とか、偉い人が随分見学に来られました。藤沢から新宿に行く小田急線電車が、3つ目の駅が長後という駅がありまして、今はいすずの自動車工場になっていますが、当時、そこに新しい兵舎を作ることになって、ニュース映画の撮影に偉い人が来るので、一種軍装(水兵服)を着て、普段は作業服を着て勉強していたのですが、「着替えれ！」って言われると、今日は偉い人が来るんだな~とわかりました。黒の乗用車に日章旗と皇族旗または大臣の旗を前に付けて来られました。

私は歴史が好きだったので、江ノ島がすぐ近くで30分ぐらいで電車で行けるし、鎌倉も近かったし、外出のたびに、鶴岡八幡宮とか鎌倉大仏、江ノ島を見学したりしました。富士山の裾野で勉強したので、よく教官に「きさま、外地に行ったら富士山は見えないからよく見とけ。」って言われて、朝に晩に富士山の前で発声練習をくり返しやったりして、自分なりに生きては帰れないという意識の反面、こういうところで勉強させてもらって、お国のために死ぬのだから、という満足感といいますかね、強くありましたね。私たちレーダー兵は戦に大事なもので、大変良くしてもらったと思いました。

たまたま、休みかなにかの日だったと思いますが、江ノ島に行った時、女の人がすばらしくきれいな着物や服を着て、何人もぞろぞろ、うろうろしているのを見て、「この戦争で今負けるか勝つかって、俺たちは明日にでも特攻隊で行かなければならないというのに、こういう人がいるんだってという姿を見て、なんちゅうか、これでいいのか~」という納得できない面もありました。その後、空襲が激しくなり外出は中止となりました。

配属~襟裳へ

12月31日神奈川県藤沢の電測学校を出発。午後7時でした。途中空襲があり、列車が2~3回止まりましたが、1月2日大湊の防備隊に着きました。次の日、小樽の神威岬の見張所という予定でしたが、そこがまだできていないということで、青森の日本海側の小泊(約10人)と八戸の鮫角(約10人)恵山(約10人)襟裳(約10人)と、4ヶ所に割り振りされて、50人位が4ヶ所に分かれて配属になりました。

私は、襟裳ということで、浦河(絵笛)に生きて帰れると思っていませんでしたから、行きたいと思っていた日高に行けるといって喜びました。

1月7日に静岡出身の上等水兵が引率する予定が「川越、北海道の襟裳だったら、地元だろうから、お前引率して行け。」ということで、10人いましたが、

私が 18 才で年長者の方で、他は 15 才か 16 才の少年兵で、「じゃあ、私が引率させていただきます。」ということで、一等水兵ですが、私が引率して、浦河まで来て、一泊しました。

浦河の林旅館、今はもうないですけど、1丁目の、林旅館が海軍の指定旅館ということを知り、宿を探しているうちにわかりまして、襟裳からもその林旅館に来て泊っているということも聞きまして、他の人を林旅館に泊めて、私はすたこらすたこら我家に帰りました。両親に「逃げて来たのでないか。」と驚かれました。

次の朝、一番で、えりも市街（幌泉：本町）まで行きました。様似までは汽車、そこからは木炭バスでした。幌泉には迎えの兵隊が来ておりまして、かめや旅館に泊めていただいて、次の日が吹雪で、「歩け!」ということになりました。私たちが加わって総勢 20 人ぐらいでした。

#### レーダー捕測

今の「風の館」の所が海軍の兵舎でした。20 坪ぐらいの小さな兵舎、石階段があって、段差があって、

えりも特設見張所兵舎略図



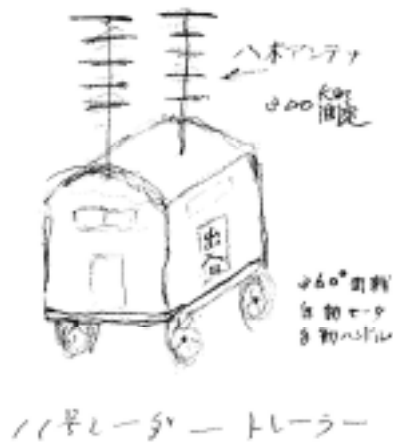
えりも特設見張所兵舎略図

上に通信室がありました。後に空襲でその兵舎は焼けたんですが、「風の館」のちょっと岬側に 11 号レーダーがありました。今の駐車場の北側の小高い丘に、21 号という大きな、一番といっていいぐらい古いものです。

1.8m 四方ぐらいの小屋があって、中心が電動式になって動いて、一面の八木式のアンテナがついていました。360 度モーターで回転するもの、手動でハンドルを回しても動くものも 1 台ありました。自動と手動が可能でした。21 号と 11 号の 2 台のレーダーで 300 km 測定、21 号 11 号の中に逆探といって、敵のレーダーをキャッチして、大湊の本部に連絡すると、どのよ

うな電波が解析する仕組みになっていると聞かされておりました。

性能がはるかにいいレーダーが、襟裳にくるということだったんですが、浦河に監視艇で持って行くから、襟裳の見張所として海軍のトラックで浦河港まで迎えにこいということで、他の人や上官が様似町に泊まって、朝 5 時に入港するからということで、行きました。



11 号レーダー

しかし、監視艇が見張りを誤ったといいますが、浦河をすぎて鵜苫の沖で敵の潜水艦に見つかってしまって、銃撃されて全員戦死してしまったんです。レーダーも波に打ち上げられて、海水に浸かってしまったものを、後で処分したんですけども、結局、新型 13 号は届かないで終わってしまいました。

5 月ごろ、学校で最新式と習った 13 号レーダー、当時としては一番最新型。11 号も 21 号も 300 km 測定、襟裳岬から中千島から南は宇都宮あたりまで測定可能なレーダーでした。13 号は、私の想像ですが、日本も船がどんどん沈められる時代でしたから陸戦対応というか、非常にコンパクトで、ミカン箱 2 個ぐらいの小さなものでした。

当時、襟裳の海軍の見張所には、陸軍でいうと九九式といいますが、短い銃が 10 丁とピストルが一丁と日本刀が 1 振り武器としてあっただけです。

7 月 20 日頃に空襲が終わってから 13mm 機銃という大きな機銃が送られてきたのを覚えています。

今の「森進一の歌碑」の位置に見張所、1 階は 20 倍の備え付けの双眼鏡、2 階には交代で 8 倍の双眼鏡で見張をしていました。

襟裳に来てから、他の人の当直の時、えりもの漁船がアメリカの潜水艦の襲撃を受けたことが、2 回か 3 回あったように記憶しています。当時、見張所からすぐ連絡があるので、みんな外に出て見るのですが、私

も走って上がって見てみたんですが、モヤがかかっていて、幌泉の市街が岬からは見えないんですよ。本部にすぐ報告したら、1回は日本の飛行機が来て、厚賀の沖で沈めたとかいう情報は聞いた覚えがありますが、何回かありましたが、他に敵を沈めたという情報はありませんでした。

毎日、朝6時から12時半まで、レーダーの哨戒、目での見張りは24時間交代で、やっておりました。古いレーダーですから真空管が非常に多く使われていて、100ヶ以上、不良品が多くて、故障が起これば、レーダーを止めてはならんと言われ、夜通しかけて、故障を探し、もう片一方の21号が故障の場合は、もう一つの11号を使って哨戒してましたけど、テスターを使って故障箇所を見つけて、短時間で直すようにしてました。

私たちのレーダーは、6時から12時半、夕方の6時から12時半まで。大湊の鮫角という岬では、500km測定のレーダーがあって、ちょうど襟裳が切れる12時から6時半まで、30分重なるようにして、哨戒してました。

冬のしばれている時期に、風速40kmという体験をよくしました。兵舎からレーダーまで、土肌が出て、風の通り道になっていて、2時間ずつの当直でしたが、



レーダー小屋

そこを四つんばいになっていくんですが、風で流されちゃうんですよ、握りこぶし大の石が飛んでくるんですよ、カーン、カーンって頭に、すごかったです。

#### 襟裳での日々(その1)

岬には、毎日、郵便をとりに「公用シ」っていうかたちで、誰かかれかが、午前と午後1回づつ交代で、郵便を受け取りに行っていました。

襟裳岬の若い女性の方や、幌泉の市街の女の方に慰問に何回か来ていただきました。「破れたようなものがあったら出すように。」と、出しておきますが、ほとんど修理はしてもらえなかったです。襟裳特設見張所という名前だったんですけど、それなりにお菓子だ

とか、お酒になんばか余裕があったのかね～、慰問に来てくれた人には、サービスをしたのが記憶にあります。

バスの運転手は男の人、車掌さんはみんな女の人で、金沢さん、村田さん、若い娘さんがバスの車掌さんで、海軍の水兵で、私らみたいなものもいましたが、終始海軍に慰問に来てくれましたね。幌泉や庶野からね。

海軍では、倉庫なんかへ行って食料や砂糖の泥棒のことを「銀ばえ」っていうんですけど、私たちの隊の調理担当の歳とった下士官が「おまえら頼むから銀ばえだけはしないでくれ。」ってね「それでなくても足りないんだから。」って、拜むようによく言われました。

岬の柳田さんで牛を飼っていて牛乳を毎日1升もらいに行くんです。公用シの腕章つけて、交代で、それを10人で分けるんです。みんなでお金を割り振りしてね、そしたら俺たち太っちゃってね。毎日飲むから。醤油をたらたらと入れて飲むと、ちょうど卵のような匂いがするんですよ。卵を溶かしたような匂いでした。襟裳岬の暮らしはお腹がすいて困ったことはありませんでした。

西様似の住岡という人が一等水平の補充兵で召集されてきたんです。30過ぎている人でしたが、その人が炊事係をして、みんなに食べさせてくれました。魚を特別に食べたとは記憶にありませんね。ただ、今、長野県に暮らしている村田(同期生)が「川越が家に帰ると、何かかにかご馳走を持って帰ってくれるから、お前が外出から帰ってくるのを楽しみにしていた。」って言うてくれました。絵笛も浜が近いから、スルメなんかを10枚も20枚もお袋が持たせてくれて、それを持っていくと、上官はうまいところをとって、足を俺たちに投げてよこすわけさ！「たまにはうまいところもよこしたらいいのに。」とも思ったこともあります。

#### 空襲(北海道空襲)の日

印象に残るのは、空襲なんです。ちょうど空襲の時に私は浦河に戻っていたんです。

あとで聞いた話ですが、アメリカの機動艦隊を280kmで捕測してちょうど広尾沖真東、本部にすぐ連絡して、すぐ警戒警報が発令されたんです。あとから大湊の本部長からお褒めの言葉をいただいたことが記憶にあります。

あの年は日本がどうなるか分からない、決戦の年ということで、お盆が1ヶ月繰り上がっていたんですよ。

私は7月13日に公用シの腕章をいただいて、お墓参りに絵笛の家に戻ったんです。キャベツの苗を探して来いと言われてまして、様似で汽車に乗り遅れ、おじが写真屋をしたので、そこから自転車を借りて家に戻りました。

14日の6時ごろに絵笛から井寒台まで行くと、空襲

警報で先に行けなくなり、それでも浦河の堺町の郵便局へ飛び込んで、海軍に電話を入れたんです。幸いつながら、見張所の所長へ「空襲警報で帰れない、どうしたらいいでしょう。」と言ったら、「とりあえず家で待機しておれ。」と言われ、やれやれと思い一旦帰りました。

海辺から、堺町の兵舎にバリバリバリと銃撃を加えているのが見え、早く帰らなきゃ、早く帰らなきゃと思いました。

次の日は落ち着かなく、3時に起きて、自転車でいくと、すでに空襲警報で、様似のおじが浦河市街で陸軍の憲兵をしていて、「お前、どうしたんだ〜」というから、「襟裳に今帰るところだ。」って言ったら、「あ〜気をつけて帰れ！」って言われてね。そして、東町の急カーブで振り返ってみると、グラマンが浦河の市街を旋回しながら攻撃しているのが見えるんです。

ちょうど様似に帰るとい警察の巡査（駐在さん）と一緒にあって、幌別に行く、幌別の橋の上側はず〜と爆弾が落ちてあって、自転車が乗れないくらい、橋の上に砂がのってました。押したりしながら乗り越えて、様似に着いて自転車を返して、様似の駅前に行きました。

ちょうどトラックが麦粉を満載して、今、幌泉に向うところに出くわしました。それで、「私は襟裳岬の海軍の兵隊だけれど、ぜひ、乗せてくれ。」とお願いしたら「ダメだ。」と「そんなことできない。」と、もちろんバスは不通ですし、「命の保障はできないし、乗せることはできない。」と言ったんですが、とにかく「命の保障はしてくれなくてもいい、乗せてほしい。」と言って、自分からトラックの荷台に乗りました。まあ、仕方ないという感じで、まもなく動き出しました。

海上すれすれを、飛行機が飛んでくるんです。やはり海上すれすれだとレーダーに捕測されないんだなと思いました。私がトラックの見張り役になりまして、3回くらいグラマンが来て、そのたびに「来た！」と言って屋根をたたいて、車を止めて、二人して道路の側溝に隠れたりしました。

幌満まで行くと、トンネルの中でしばらく様子を見ました。時計は持っていたんですが、ほとんど何時だったかわかりません。比較的順調に幌泉の市街に着きました。ほとんど人影はありませんでした。

入ってすぐの浜側に西川さんっていう大きなお店がありましたが、それから少し行った左側、坂の中段に幌泉のバス停があったと思います。そこでトラックの運転手に下ろされて「無理言ってすみませんでした。」と言って、周りを見たんですが、ほとんど被害らしい被害がみえなかったですね。おそらく、8時か9時ごろだったと思います。

ここまできたらバスは不通だろうし、歩こうと思っ

て、家からお袋が握り（おにぎり）を二つほどと、キャベツの苗もポロンポロンになってたけど、20〜30本袋につめて、ぼちぼち歩きました。

外出の時に幌泉まで行くのに、岬からの道は沢や丘を迂回してましたけど、山をまっすぐ進む近道がありまして、3里と聞いた記憶があります。

途中、東洋でグラマンに追っかけられました。草陰に隠れて。それからが大変で、岬市街へ行く道がありまして、陸さん（陸軍）が掘った塹壕がず〜とありまして、道を行くか塹壕を行くか考えたんですが、早いほうがいいな〜と近道を行ったんです。

様似で自転車を返して、トラックに乗る前に襟裳岬の方を見たら、ものすごい黒煙が上がっていたんです。うちの兵舎が焼けたのかな〜と思いながら、行ったんですけども。

草むらの塹壕の中をすたこらすたこら歩いて行くと、アメちゃんのグラマンが8機、陸軍のレーダーのアンテナの位置で、そのアンテナの林、何本もの棒に線が張ってあって、そこに2機ずつで急降下してきて、そのアンテナを切るんです。ロケットも落とすし、ふぁ〜ふぁ〜と体が浮いて、音はたいしてないんだけど、体が浮いてしまうんですよ。機銃のプスプスという音が、機銃の刺さる音が聞こえるんです。

2機づつが周っては、次々とやってくるんです。アンテナから離れようと思うけど、どうしても動けなくて、ただもう「俺も最後だな〜」と思って伏せていたんですが、度胸がついたというか、静かに伏せていたのを、仰向けになってアメちゃんのやることを見ていると、私から抵抗を受けないという確信があったのが、塹壕で上向いていると、はっきりアメちゃんの顔がはっきりわかるまで、急降下で降りてきて、銃撃していました。

たいした時間ではなかったんだろうけれど、長く感じました。そのうちグラマンは東に向かって引き上げていきました。

それから襟裳岬に着くと、兵舎は焼かれて何もありません。海軍には衣袋（いのう）という、服なんか全部入れておくものがあつたんですが、後ろに名前と番号が入っているんです。私は横須賀の志願の兵隊の電測兵の33535という衣袋があつたんですけど、それがちゃんと、いなくても外に出されていて転がっていました。酒の瓶や砂糖の袋もそこらに散らかっていて、まもなく違うグラマンが来て、ドラム缶や酒瓶にロケット弾を落としていきました。

朝鮮人が20〜30人いました。いつ頃来たのか定かでないですが、昭和20年の6月ごろだと思います。今の駐車場から岬市街へ下りたところが沢になっていて、そこをH型のトンネルを、本土決戦に備えてだと思いましたが、そういう兵舎を作っていたんです。朝鮮人とトラック1台を持って、監督の人が二人位いま

したね。どこで宿泊していたのか、仕事をしていたのか知りませんが、そのトンネルが8割がたできていたんです。

兵舎が焼かれているから、グラマンが来たら、作った兵舎に走って逃げました。山側にはトンネルとつながっている抜け道、縦杭を作ったんです。上から逃げるといことです。

海軍が作ったH型の兵舎は、2本とも奥行きが10m以上あって、真中でつながっているのがH型になるわけです。当時はH型とはいってません。かなりの時間をかけて掘ってました。私も行きましたけど、「作業中に口笛を吹いたり、金槌でたたいたりするのは禁句だ。」ってよく言われました。山側の縦杭は脱出杭と呼んでいましたが、換気の意味もあったかもしれません。

グラマンの空襲があったときに、朝鮮人がもう喜んじゃって、「助けにきてくれた。」って、外に出てね、彼らは武器持ってないから、九九式の銃で「静まれ！騒ぐな！」って脅してね、でも、一人は機銃弾が指に当たったって聞きましたね。

私たち発電機を持っていたんです。機関兵が二人いまして、大きな発電機が1台ありまして、その燃料が周りに置いてあって、機銃弾で延焼して、燃えてしまったんです。私が襟裳岬に帰ってきたときには、灯台も兵舎も燃えちゃったあとでした。煙もなかったです。様似で見たときはもくもくの煙でしたが、なにもありませんでした。

空襲を受ける前から、島田という所長が灯台長に「灯台を消しなさい。防空上灯台を消さないとな敵の攻撃を受ける。」というし、灯台長は「国際的な規定からいって、灯台を消すことはできない。それは簡単なことではない。」と盛んに抵抗しているのを、うちの兵舎で遠くから聞こえてきました。

7月13日に公用シで絵笛の家に行きましたが、12日に北千島のマツワ島にいた兵隊30人ほどが、マツワ島のレーダー基地を陸さんにお任せにして引き上げてきて、襟裳と合流したんです。小沢という中尉が連れてきたので、その中尉が見張所の所長となりました。

その所長が、燃料を兵舎の周りに置いておくと非常に危険だ、敵に攻撃されたら、一遍に燃えてしまうから、明日の朝はこれを散らばして、移動させなきゃだめだということでした。その朝に攻撃を受けて、その燃料が火を噴いて兵舎が焼けたということで、責任問題になるかもしれないというわさになってました。

浦河では空襲で何人が犠牲者が出たんですけれども、えりも町内では死亡者いなかったようですね。襟裳岬の人は、今の百人浜、苦別の山に逃げていたと聞きました。どうして、いち早く情報を得て、あの距離を避難したのか、市街には誰もいなかったようです。

後でその話を聞かされました。

私たちのレーダーはテレビのブラウン管に、電波の波が映って、その波形で区別するんですが、すぐに敵が来たってわかるんです。艦船は動きが静かですから、私たちで識別しますが、かなり戦闘機らしきものが280kmの地点で動きがあり、これは艦隊だと認識していたそうです。空襲を受けるかなり前の時間から、B29で300kmなら30分で来るといいますから、戦闘機はもっと早いんですから、私たちはすぐ本部には報告しますが、一般の人には情報が行かないわけですね。本部が日高一帯に空襲警報発令とか、北海道全体に発令ということになっていましたが、よっぽど早く襟裳岬市街の人は苦別に避難していたのだらうと思います。自分たちの判断で避難したのかどうか知る由もありません。

#### 終戦までの日々

7月15日の晩は兵舎の地下壕の中に毛布にくるまってみんなで寝ましたが、不寝番を決めて、敵が上陸してくるかもしれないからと、九九式の銃に実弾を入れて持って番をしたんです。12時頃ごろから私も番をしたんですが、こんな10丁たらずの銃で、敵が上陸してきたら、またたく間にやられてしまうなと思って不寝番に立ったことは忘れられません。

今の駐車場の東の小高い丘の上に21号レーダーがありました。かなり機銃を受けて使えなくなっていました。兵舎の近くにあった11号は移動できるようにタイヤがついていたので、空襲からはその11号を使って捕測していました。

陸軍の三角兵舎がだいぶあったんですよ。所長が陸さんに頼んだと思いますが、その一部を借りて、終戦まで住んでいました。

陸軍の三角兵舎は、今の第2駐車場のあたりでした。半地下式で、屋根の両袖が地下になっていて、廊下が土間で、両側に寝床があって、数棟ありました。その一つを海軍が借りていたわけです。今の駐車場のあたりにはなにもなかったですね。



駐車場が整備された襟裳岬（昭和40年代前半）

襟裳岬は陸軍もいましたが、海軍よりも人数は多か

ったです。後で聞いた話ですが、グラマンが来た時、機関銃で撃ったら集中的に攻撃されたということでした。海軍と陸軍では兵隊同士では交流はありませんでした。所長など上官は行き来していたのではないのでしょうか。

私は海軍ですけど、陸軍は岬の市街の近くに兵舎がありましてね、人数がどのくらいいたかわかりませんし、一兵士でしたから詳しいことはわかりません、知る由もありませんでした。海軍の所長は島田という小尉だったんですけど、所長はそのへんよく承知されていたとは思いますが。

7月12日に中千島のマツワ島から来た兵を入れて、見張り所の人数が50人以上になったものですから、それまで襟裳にいた者は、フィリピンの増援部隊に行くんだということで、先遣の10人くらいが苦小牧まで出かけている矢先に終戦になりました。

忘れもしませんが、私らが5月に上等水兵になり、そのときに機関兵の水兵長の熊谷さんが町に郵便を取りに公用シとして行って、帰ってきて、私らが兵舎のそばで薪割りをしていたら、「なんか、日本が負ける、負けたらしい、との話が、市街でうわさされているのを聞いた。」という話をしている矢先に、前任下士が来て、正午に重大放送があるというので、お前たちも聞けと言いました。みんなで放送を聴きました。私たちにはわかりませんでした。おそらく、ソビエトも戦争に加わったというからしっかりやれ、ということだろうと、それから3分か5分したら、誰からか「どうも、負けたのは本当らしい。」ということで、その前任下士は分かっていたようで「集まれ！」ってみんなを整列させて「どうも日本は負けたようだ。」と「お前たちも、誠心誠意、再び日本が勝てる時が来るから。」とお話があったのを覚えています。

兵舎で使ってきた薪は、歌別が、どっからか運んできたか、海軍のトラックで運んできたのか？はつきり覚えていません。終戦の時も暑い日で、兵舎の前で薪割りをしていました。

#### 襟裳での日々（その2）

吹雪になると、木炭バスは雪で止まって、お客さんが降りて押して、運転手がハンドルを切って、またお客さんが乗るのがごく普通でした。

油駒はすごい歴史のあるところなんですよね。昔の副読本に出ていたのかもしれない。幌泉から襟裳岬までの道は、急カーブになっていて、山に上がっていく道でしたが、昔、北海道に来た探険家などが来たのかな～といつも頭によぎりましたが・・・

海軍は陸軍とは違って、晩方の入湯外出、半舷外出、普通外出とありまして、晩方になって「入湯外出だ、行ってこい！」って言われてね。雨降りていやでも、兵舎にこもっているよりも、気分的にいいもんだから、

今のニコニコ旅館、かめやさん、林旅館、そこへ泊まりに行ったりしてました。

代書をしていた高田さん？という人がいて、海軍びいきで、上司、下士官が出入りして、私も1回か2回お邪魔した記憶があります。笛舞の学校の校長さんが海軍びいきで、イモを、馬鈴薯を作ってくれて、所長が先頭になって「もらいに行く」って、どこか知らないけどリヤカーを借りてきて、私と二人で、4~5俵あったと思いますが、リヤカーを引っ張って、もらってきた記憶があります。距離も当時としては遠いなどとは思っていませんでした。

海軍の監視艇が日高の沿岸や広尾まで巡回していたようで、ときどき襟裳の港に米だとか味噌だとかを陸揚げして、襟裳岬まで何回か運んだ記憶があります。海軍といっても歩哨が立っているわけでもない。戦友阿久津が「おい川越、俺たちよく晩になると襟裳の岬の町に遊びに行ったんだ、上等水兵と遊びに出た。」と言ってましたが、私は全然知りませんでした。結構、出て遊んだようです。でも、ほとんどぶんどられることはなかったです。人数が少ないから家族的でした。

私らは学校出でしたから、ハンモックの吊り方も知らない、毛布に包まって紐で縛っていました。「川越、貴様は日本海軍でお前ほど幸せなやつはいないぞ。」とよく言われました。

襟裳岬までバスが通る道はそんなに悪くなかったと思います。近道はただ歩く道ですからササ原でした。

赤土は百人浜ですね。兵舎の周りには赤土の印象はありませんね。監視所から見張りをして、始終海を見、丘を見、するんですけど、百人浜は風で土が舞うのは、渦巻いて、赤土が舞上っているのが見えました。

庶野へ行く道路が、結構な道だと思ったんですけど、海軍のマークの入った、錨に星のマークの入ったトラックが1台あり、それでよく庶野に行ったりしましたが、道はすごく悪かったです。必ず、庶野に行くまでに穴に落ちて上がれなくて、みんなでおっつけて上げてね。そのトラックであるくと、春先にスズランの匂いが、香りがぶ～んと来てね、襟裳にも春先には、若芽が出るといいところです。そのすばらしさは忘れません。



小越（昭和11年8月、現：字えりも岬）

今の緑化事業をみると、よくこれだけのことをしたなと思います。戦中戦後の百人浜は本当にひどかったから。地区の方々の努力が実ったすばらしいことで、一緒にえりも勤務した人々の何人かが、えりもに訪れ、百人浜の緑化のすばらしさに驚き、感心してテレビ等の放映も見たと言っており、一大事業だったと思います。

襟裳岬に高田さんという呉服屋さんがありました。じいちゃんとばあちゃんがいて、一人息子さんが千島かどっかに兵隊で出て、後で聞いたら、帰ってこられたという話です。あの当時衣類が非常に少ないので、よく海軍の兵隊がお金を持っていても使うことないから、そのじいさんの所に行ったら、足袋を買って来た、帯を買って来たとかで、私はあまり買わなかったんですが、20人や30人が、ばんきり(いつも)そのじいさんのところへ行ったら買って、家に送ってました。

丸通の荷物を取り次ぐ所があって、そこに柴田さんという女性がおられました。

一兵士でしたから、一般の方の家にお邪魔することはなかったです。兵舎のすぐ下に南さんというお宅がありまして、南さんのご主人も召集で行って、外出の時間が遅れたとかで、海に落ちて亡くなられたと聞いたことがあります。近いから、2~3回南さんのお宅にお邪魔したことはありますね。その50m下にポンプの小屋がありまして、「風の館」を立てる際に大きな水槽が出てきたと新聞に掲載されていましたが、あれは海軍の貯水槽です。下にポンプ小屋があって、1日に1回スイッチを入れて、水を上げていました。井戸水だったのでしょう。



現在も残るえりも岬地区の戦争遺跡(平成19年1月)

えりもにはえりものいいところがあって、海藻類がね、豊富で、ノリだとか、コンブはあまり記憶ないけど、ノリを採るのに小さな子供さんまでノリ採りに一所懸命になっているのを見て、すばらしいなと思いました。襟裳岬で半年以上もお世話になりましたが、一番なつかしいですね。

死とは紙一重

海軍電測校の同僚5人が戦艦大和に乗船したんです。「日本の、いや世界の戦艦大和だぞ、絶対沈まない戦艦だぞ」って言われてね。私たちは昭和19年12月30日に卒業式でしたが、彼ら5人は12月23日に出港するので間に合わないからって、みんなに見送られて行きました。戦艦大和のレーダー室が一番高いところにあって、米軍の攻撃を受けた際に、最初に一番ひどく攻撃されたそうです。大和を援護する飛行機もなく、単独で、片道燃料だけで沖縄に行ったと思うと「かわいそうに」と思います。

勉強もしないで「1回でいいから、帰ってーな〜」って仲間と話したもんです。それが念願で、その話ばかりしたものです。

学校出る時に必ず身体検査があるんです。そのときに必ず靴がなくなったり、ふんどしがなくなったりするんです。それで私は靴をみんなより離れたところに置いたんです。出てきた順番で並んだんですが、私が遅れて並んだんですが、その遅れたために大湊に配属されたんです。先に並んだ人は横須賀防備隊に入ったから、父島母島に行きました。最初に並んだ連中は大湊に行くと思ったわけですが、実は逆だったんです。紙一重で、一步步き出すのが、鉄砲に当たるか当たらないかの境目でした。

戦後処理

小山田と岩田、中尉になった島田と私の4人で、初めは終戦後一ヶ月くらい岬の方の家にお世話になってました。戦後食糧難ですから、いつもコンブ入りのご飯でした。それから幌泉の林旅館に移って、毎日ではなかったですが、たまに岬に行ったら、真空管を並べたり、レーダーの部品を並べたりの繰り返しでした。特に仕事はなかったです。

進駐軍が来たのは12月25日、アメリカの兵隊が3人来ました。21号レーダーは肘掛もついた回転椅子で、すぐ電話で本部に連絡できるようになっていましたが、11号は小学校の木製の椅子が置いてあったんです。するとアメちゃんがバカにするんですよ、笑って笑って、俺たちにとっては大事な兵器と思っているんですけど。アメちゃんにとったら「これで、よくやってたね。」って感じで、笑って笑って、バカにされてる感じでね。別にどうってことなかったんですが、10分か15分ぐらいで受け渡しが終わって、「はい、さいなら」って感じで解散しました。

敵の潜水艦にやられた13号のレーダー、潮水につかった物を捨てないで置いてあったと思うんです。どうするんだということで、アメちゃんも知らないだろうって、三角兵舎のどこかに埋めた記憶があります。後で聞いた話ですが、当時はラジオなどの部品がとても不足していたので、襟裳岬の人がそれを掘り返して、

部品を札幌の業者が出入りして買っていると聞きましたね。

進駐軍が21号13号11号のレーダーをどうしたかは知りません。何年もたってから訪れたら何もありませんでした。

鉄砲などの武器はどうしたんでしょうか、進駐軍に渡した記憶はないし、どこかに埋めたのでしょうか、記憶がありませんね。

灯台の建物は、その当時のままで残っていました。灯台長の宗像さんという方が浦河から訪ねてこられたんですけど。岬のある娘さん「よっちゃん」って呼んでいましたが、灯台へ仕事行くのに、よく私たちの前を通ったんです。戦後しばらくして、浦河の灯台に行ったら、そのよっちゃんが宗像さんの奥さんになっていて、驚きました。

まとめ

昭和20年1月7日より、12月25日まで、約1年えりもで、陸上警戒レーダー兵として、お世話になりました。

初めてえりもに着いた時、吹雪の中を歩いて岬に着き、これは自然が大変な所であると共に、同じ日高でも厳しい場所だと、自分に言い聞かせました。

しかし、私が故郷で祖国防衛できる誇りと喜びは大きく感じました。

そして、7月の艦載機の捕捉、本部への第一報と空襲警報発令と見張所としての責務は果たされたと、自負しております。

また、強風40mは珍しくない岬でも、海の資源の豊富なことには驚きました。時々、灯台の下の海岸に下りて、ノリ採りをしたことがありました。石油缶に一つ位はすぐに取りれて、ここはこんなに良いことがあるのだとつくづく感心しました。地区の人も兵隊が採るので大目に見てくれたことと思います。

百人浜も風が吹くと、すごい土煙が見張所から見えました。地区の方々の大変な努力で、見事に青々とした森林に変わっておりました。御世話になった、えりもが益々の発展を、第二のふる郷としてお祈りしております。

(平成17年8月3日採録、中岡俊子)



寄りクジラ(歌別、時代不明) 90

## 阿部清 大正15年(1926年)生れ

海軍の私物入れ

昭和20年海軍、青森県大湊へ行ったとき(最後の徴兵)もう船もなかった時代。爆弾を抱いて戦車の下になり自爆する訓練ばかりしていた。そのときのもの。戦後、裏ではさみ将棋をするために線を引いた。中には軍隊の軍事教本、針、糸、財布なんかを入れていた。

こて

火鉢で暖めて使った。



こて・火のし・炭アイロン・電気アイロン  
(郷土資料館蔵)

シイタケのこま打ち

先の尖った方でほだ木に穴をあけ、三角形のコマを打っていた。丸い穴を開けるものは、まだ新しい形式のもので、ドリルを使う前に使用していた。屋号の“ヤマイチが”入っている。



シイタケのこま打ち機(郷土資料館蔵)

土器片

20年位前に拾った。百人浜の神田さんの牧場、「砂もり」で拾った。金丸さんの前や「あば沢」にも落ちていた。



トッカリの油

終戦物不足のとき使っていた。皿に紐を浸けて火を点けた。灯油替わりに使っていた。

焼酎とっくり

「貧乏とっくり」と言っていた。苦別の川で拾った。



貧乏とっくり

(郷土資料館蔵)

わらじ

磯物採りに使っていた。フノリ、ギンナンソウ。コンブ干すときにも使っていた。

蕨(むしろ)

コンブに使うムシロに毎年、墨で屋号を書いた。飛んでいっても戻ってきた。ムシロはあらかじめタワシで湿らしておいた。屋号の焼き印は特注品であった。

トドを捕ったことがある

尋常高等小学校を出たとき(昭和15~16年頃)の話。昭和の始め襟裳岬でピクトリア丸(イギリス)が座礁したことがある。鉄や真鍮を取るために解体の業者が来て潜っていた。

その作業を手伝いに行ったとき、潜りさんがダイナマイトを仕掛けていると、トドが来て潜っていった。ダイナマイトを爆発させると、トドは浮いてきた。片目がつぶれていて、くるくる回っていた。船を近付けロープをかけて船にくくりつけると、トドは怒って船を噛ったので、船が傾いた。潜りさんが鉛で頭をたたいたが、なかなか死ななかった。

その時トドに夢中になっていたのも、廻りなど(櫓や樅)全部流してしまった。帆を掛けて港に帰った。

海軍の人が双眼鏡で見っていたので港は黒山の人集まりだった。内地の人がハンマーを持ってきて、何十回も頭をたたいたがなかなか死ななかった。二間半ぐらいの大物だった。

肉は村中でわけた。肉はしなかった(堅かった)。味噌味で食べた。

襟裳採り(えりもどり)

その年の初めの最高の凧の日。朝4時頃に岬の前浜(村田さんの下あたり)に、ブイを浮かべ縄張って、スタートにして、みんな船を自分の行きたいところに向けて合図を待っていた。沖に出ている旗元が時間を見計らってラッパを吹くのが合図だった。ガスで方向を間違えてコンブを採れない人もいた。襟裳採りをするかどうか、旗元から隣へ隣へ連絡して回った。隣りつぎ。

「岬の先のコンブは大切だから、最初はみんなで探ろう。」ということで襟裳採りをしていた。その日の前は採ってはいけない。その日の後は自由に採れる。オカノキトの所に線を張った。東洋の方でもコンブを採っていた。東洋のことを「カゲ」と呼んでいた。

昭和35~6年頃、朝凧でいたが次第に波が出てきて、コンブをたくさん積んでいた船に水が入り、流したこともあった。

襟裳採りの時、スタート地点まで、磯舟に帆をかけていった。

クジラ

昭和18年頃、ゴンドウクジラが岬の浜(かがの崎)に200頭ぐらい弱って流れついた。かみぎり(シャチ)に追われてたようだ。体長5~6m位、一人では上げれないので、常会(今の自治会)で村中で引っ張り上げて、肉を分けた。村で供養の柱を鎌田さんのコンブ小屋の上に立てたが、橋を作るときに埋まってしまった。

本町でマグロの解体をしている人が来て、ゴンドウクジラを解体して持って行った。兵隊さんがいて陸軍50人位、灯台の下に海軍が15~16人位、今の生活館のところにも陸軍が100人位いた。兵隊さんが泳いでロープをクジラにくくって、上げて持っていった。

防空監視所があって、苦小牧にも連絡していた。常会でクジラを1班6~7人で監視していた。イモ、ダイコン、ニンジンなど一緒に煮て食べた。

昭和41年にも浜でクジラを拾った。早朝で、誰もいないから、隣近所みんなを起こして、上げたこともある。

こね皿

デンブンから団子を作った。

山(苦別)へ泊まりこんで、樽を持って行って、川のそばでデンブンを作った。

4月の10日ごろから、朝早くリヤカーで、人糞を樽に入れて、帰りは薪を積んだ。

人糞はすぐに使った。村中の人が行っていた。赤土が飛んでひどかった。今の藤井牧場から苦別の奥でイモ、カボチャ、トウキビ、ダイコンなど、なんでも作っていた。野菜を作りに20年位前まで、苦別に行っていた。学校の先生もイモを蒔いていた。米は配給。

ほんの少しだったから主食のイモを作ってた。



木臼と杵

(郷土資料館蔵)



こね皿(木皿)(郷土資料館蔵)

木臼

煮たイモを臼でつぶしてだんごを作った。向中野のおじいちゃんからもらったもの。杵もそうだ。

その頃、コンブは安く、フノリ、ギンナンソウが高かった。

苦別に行ったとき、昼御飯は、飯は持って行って、山に穴を掘って残しておいた種イモを鍋に入れて、山菜(アサツキ、ミツバなど)を入れておかずにした。

土地は各自が村から借りていた。それを常会と呼んでいた。(常会の会長が借りる世話をしていたから?)。岬には第一常会、第二常会、第三常会があって、今の自治会の前身だった。

イモに土をかけるのはコンブが始まる前に終わっていた。運動会の日、朝早く土をかけに行った。歩いて行くと苦別まで一時間以上かかった。

出稼ぎ

コンブが終わると若い人は山へ造材。室蘭や稚内へ漁船に乗りに行った。

12月31日に帰ってきて、正月休み、1月3~4日に戻っていった。小越を出ると苦小牧に夕方、旭川には真夜中に着いた。浮浪者がたむろしていて、駅のストープに近付けなかった。

浮浪者は缶詰の空き缶に焼酎を入れて飲んでいた。稚内には朝の5時頃着いた。

(平成5年4月採録、中岡利泰)



襟裳岬の売店(昭和35年以降)

## 栗山末吉 大正5年(1916年)生れ

### 駒ヶ岳の大噴火

私がお小の頃に強く印象に残っているのは、道南の駒ヶ岳が大噴火(昭和4年)のときです。村にも灰が降り、真昼の太陽が真っ赤に見えました。海岸には何年も軽石が打ち寄せられていました。

### 就職

私は昭和6年春に幌泉尋常高等小学校高等科を卒業してすぐ、幌泉村役場に給仕として就職しましたが、その頃はまだランプで、火屋(ほや)磨きも仕事でした。当時の給仕は正職員ではなく、公務補の仕事も兼ねていて、朝早く来て事務室の掃除、薪運び、現在の小林理容院裏からの水汲み、1日3回のお茶くみ、謄写版刷り、村長・助役宅へ弁当取り、夜は職員と2人での宿直などで多忙でした。間もなく給仕は2人になりました。

### 電気とバス

昭和6年遅く幌泉市街に電気が導入されたと記憶しています。同年には日高自動車株式会社が設立され、西川岩二郎さんが社長になって、幌泉・浦河間に乗合バスを運行させました。後にバス会社の本社は浦河に移りました。

### 自治講習所へ

昭和8年3月3日の深夜、えりも岬と庶野を襲った三陸津波を記憶しています。犠牲者も怪我人も出た惨事でした。その年4月には、本格的な役場吏員を目指して札幌の北海道立自治講習所へ進みました。1年間ですが学生生活を満喫できました。その年、札幌では三越デパートが開店したばかりで、大都会の雰囲気溢れていました。

翌9年4月に帰郷して再び村役場に職員として勤めました。その頃は、役場職員の服装は、まだ羽織袴の人も多くいました。その年には、幌泉港の竣功式がありました。当時の村長さんは松浦作蔵さんで、警察官上がりの村長は何かとうるさい人だったと記憶しています。

### 黄金道路の開通と幌泉大火

黄金道路の開通も同9年でした。その年秋遅く道路開通の竣功式が目黒小学校であり、私も役場から準備などで手伝いに従事しました。同9年には函館大火のことも記憶しています。函館に兄が住んでいたのも、自治講習所を修了した3月、報告かたがた遊びに行くことを約束していたのですが、その直前に大火があったのです。1日早ければ自分も大火に巻き込まれていたことでしょう。

役場に入ってから、新入りの私は毎日のように先輩から宿直を押しつけられていて、幌泉大火(昭和10年)の夜も私が宿直でした。深夜のけたたましい半鐘の音で目を醒まし、窓の外を見ると隣の郵便局が燃えているように見えたのです。延焼している市街地から庁舎に火の粉が降り被さってきたため、駆けつけてきた職員とともに、木製の重い書箱を担いで国道を通り、竹内餅屋さんの狭くて急な坂を降りて漁港まで運んだのです。まさに“火事場の馬鹿力”だったのです。



幌泉大火(昭和10年)

### 騎兵で満州国へ

軍隊に召集されたのは、昭和13年12月でした。現役騎兵で旭川の師団に入隊して1週間後、12月26日、小樽港から馬と一緒に、貨物船で厳冬の満州へ向かいました。途中、神戸港に寄港したのですが、上陸を許されず、瀬戸内海を南下して朝鮮半島を目指しました。昭和14年の正月は馬と一緒に船の中だったかもしれませんが、初年兵だったので、幸いにも船中での馬の世話は免れました。

到着したところは大連市でした。満州では15年の暮れまで2年間、訓練に明け暮れましたが、また旭川に帰団して1年間を過ごしました。帰郷できたのは16年12月で、その1週間後に太平洋戦争が勃発したのです。なぜ戦争になったのか、軍隊帰りの私には情報が少なく、すぐには理解できませんでした。

### 字名地番の改正

昭和17年には、村内の字名地番の大規模な改正作業に従事しました。従来の9大字と395の字名を廃止して、新たに10の字に改正する作業でしたが、当時は土地台帳と家屋台帳を役場が所有していたため、旧と新の地番を突き合わせての両台帳の改正は大変な事務量で、夜勤を続けての処理でした。

字名の「東洋」とか「大和」は村会で議決して決定しましたが、その理由については判りませんが、その頃の日本は「大和魂」とか、東洋に「大東亜共栄圏」を築くための聖戦を遂行していることになっていたため、村や村会で戦意高揚を煽る人の意見が強く働い

たのではないかと思います。

戦時中から戦後へ

昭和 17 年には、幌泉灯台の上の山頂にあった忠霊塔が観音山に移転しましたが、それまでは、毎年の式典で机や椅子を山頂に運ぶのは重労働でした。観音山に移転してほっとしましたが、そこもやはり坂道だったので、物運びや遺族の人たちが足を運ぶのに大変でした。戦時中の役場の仕事は、召集令状の配達、米や衣料品など統制物資の切符作成、鉄製品などの供出などで、特別苦勞したという記憶はないのです。しかし、召集令状を持っていくのは辛い仕事でした。軍国教育で、国への名誉ある奉公と教えられてきたが、家族にとっては動揺することでした。



軍事教練（昭和 20 年以前）

戦後すぐは男性職員が不足していたのはこたえました。戦後しばらくは紙や封筒の不足に悩み、古紙の裏や封筒を裏返しにして使いました。苫小牧王子製紙工場へ裏ルートからの紙仕入に職員数人で運びに行きました。浦河の大針印刷所からも紙を横流ししてもらったこともあります。

戦時中と戦後しばらくは、支庁長の権限が強かったことから、会議の多くは日高支庁でした。バスの便が不便だったので、浦河での宿泊が多かったものです。役場勤務で印象に残った村長は、就職当時の林利博村長でしょうか。戦前の町村長は、支庁長の命令で就任したものです。戦後すぐの昭和 21 年には多くの人が公職追放になって、公職選挙法が施行されてからは、人材が不足になり、幌泉は小西喜代人さん、様似や荻伏など教員出身の村長が多く選ばれました。先生方も戦時中は戦意高揚の片棒を担っていたのですが。

体調を壊して療養生活

私は戦後しばらくしてから、体調を壊し、勤務しながら村の洞口医院で治療を受けていたのですが、その頃は、レントゲン写真も鮮明でなかったせい、肺門と診断されていました。昭和 27 年には肺結核であることが判かり、浦河の赤十字病院に入院しました。集団結核検診がなかったので、結核が進行しないと発見

しにくかった時代です。31 年に役場庁舎が改築されたときは休職して入院中でした。33 年春には退職せざるを得なくなりました。結局は結核で手術をしたのです。

役場へ復職

その後、快復してから、ある人の口利きで新冠市街から 20 キロ奥地の開拓農業協同組合に勤務することが決まり、昭和 36 年の暮れ、家族を伴って「新栄」地区に赴任しました。職員が 3 人で、農協倉庫の 2 階が住宅でした。えりも町役場に復職したのは 38 年 1 月です。同級生だった吉田勤之助さんが、長岡隆一町長の死去に伴う町長選挙で、神田正秋さんと戦って当選したのは 37 年 11 月でしたが、間もなく、吉田町長から「役場に戻ってこないか。」と誘われたのです。

水源地測量紛争

役場へ復職して 1 人だけの調査室長になりましたが、その年の 5 月、税務系の徴税金不祥事が発生して担当課長が辞職し、私は総務課長を命ぜられました。役場に復職して間もなくには、上歌別の水道水源地を巡って、田中牧場と町とが衝突する事件がありましたが、測量の加減で平野さんとも田中牧場とも取れる状態にあったのです。

当時、吉田勤之助町長と長年、懇意な関係にあった石本則善測量士が、田中牧場へ肩入れしたとのことで両者が険悪になったのです。

結果的には田中牧場と町長が和解して、田中牧場の負担で水源地を歌別川の上流に変更しましたが、水量も豊富で結果として良かったことになりましたが、石本さんとの関係を修復できないまま吉田町長が昭和 42 年に死去してしまいました。

（平成 16 年 3 月 2 日採録、神子島清八）

## 小金昭一 昭和 2 年(1927 年)生れ

家族

物心ついたときから、岬に木はなかったですよ。私は今のところで生まれ、育ちました。親父は苦勞したと思いますよ。母親が早く亡くなったから。私も冬は働きに出ました。室蘭とか行って、本当は帰ってきたくなかったね、はっはっは～（笑い）。6 人兄弟でしたから、家族を支えるためにもね、帰ってきました。

薪の払い下げ

冬前は、山に柴や木をとりに行くんです。今だから、バット材のアオダモとありますが、昔は丈夫だったから使ったもんです。町有林や道有林なんかから払い下げを受けて、薪や冬囲いに使っていました。太くても 5 ~ 6cm の材を束ねて、馬そりのところまで下げて、運んで来て、家の囲いにしていました。今みたいに、板

を使うのではなくて、細い木を、束ねて風除けにしています。ある高さになったら切って、細い部分も使って、ほとんどの家が垣をしていました。

#### 桎屋根

子どもの頃、屋根は、スギのような（桎よりは）幅の広い薄皮のようなものを、今の茅葺き屋根の茅の下のような屋根の上に重ねて、その上に垂直に細い板をおいて、そこに石を置いたんです。釘は使いませんでした。というよりは、釘がなかった。

その後、桎になり、桎を押える細い板を使うようになりましたが、丸い石も置きました。石屋根ですね。だんだん良くなってきて、大きめの桎になって、釘で止めるようになりました。

#### 昔の家

母さんが嫁に来て今年で 50 年。前の家に嫁に来ました。前の家を建てたところに、いい家に嫁にきたんです。玄関入ったところに庭（土間）があってね、そこでみみ（ギンナンソウ）のごみ取ったり、選別したりしました。

#### 習慣と電気

朝早く起きてさ、神棚の水替えたり、米洗ったりしてね。まだ、小さい頃の思い出は、母親たちが正月前になれば、12月の27日から30日かな、29日はしないけれど、朝の2時3時から餅つくんだよね。

起きてきて、庭で親父たちがついているのを見ると、餅が飛んできて落ちるんだね、それを拾って食べてね。怒られたりしてね。それが楽しくて、起きた思い出あります。



庭（土間）での「もちつき」（平成 18 年撮影）

その当時は電気なかったから、ランプでね。電気ついたのが昭和 27~28 年、ちゃんとしたのは 30 年かな。

手水してる時、「それ！」って、餅くれたりしたな~。

#### 正月

正月のご馳走は、けんちん、煮豆、鮭、なます。まず最初が煮豆を作ってたかな。楽しみは鮭、今みたいにくたくさん獲れなかったから。鮭出してきて、切って、串にさして、囲炉裏の火を囲むようにして焼いてね。あ~食べれるんだな、と思いましたよ。

昔は、けんちんにクジラが入っていました。その頃でも、なんぼ困った困ったと言っても、正月は必ず白米でした。それ以外は、麦が入っていてね。正月一日はご飯、二日三日は餅って、食べていました。七日まではいろいろ食べていました。今でも、値段高くても正月のけんちんには「大物喰う」って、クジラ入れる家庭ありますよ。

白米だから、みんなそれを楽しみに待ってて、狙っているんですよ。長いもをすってトロトロにして、だし入れて、もっとトロトロにする。それが待ち遠しいんですよ。喧嘩しながらくったもんですよ。

#### 仕込み親方

仕込み親方っていいね、この地区の親分みたいな人がいて、店をしてたんですね。小越（現、字えりも岬）には 6 人位いたね。会派みたいなものあって、小金はこの親方って決まっていたんです。働きがいいからって、米とか味噌をよけいにくれたり、働きが悪かったら少なかったりね。黒砂糖なんか 1 樽ですよ。正月になると、それを少しづつ削ってね。

#### 羊の飼育

羊を飼っている家庭から、羊を預かって放牧していたんです。綿羊組合。昔は、バラ線くぐって出たりしてね。国有林の中に入って勝手に草を食べてたもんです。次第にうるさく言われるようになって。きちんとやるには金網張らなきゃいけないし、手間とお金がかかりました。

羊の出産は 4~6 月、牧場で出産させても、順番で面倒見ることにしても、みんなあんまり世話しなかったから、死ぬこともありました。悔しくてね。自分で獣医に聞いたりして、勉強して、出産の時には、厩舎に泊まったり、夜出かけていたり、逆子も結構あって、自分で腕入れてね、体入れ替えて無事出したりね。獣医にほめられたこともありました。生まれたのを家に持って帰ってきて、世話をしたこともありました。

出産率を上げて、死亡率を下げるのが大切なんです。腹に入ってそうでも、入ってなかったり。生まれても親が足で払って、乳を飲みにくくするとか、でも、ちゃんと世話してやれば、親もちゃんと面倒みるようになるんです。それをおこたると、なかなかうまくいかない。

乳を搾ることはしませんでした。乳を飲ませてもらえない子は缶ミルクで育てました。子が乳を飲むとき、

乳房を傷つけることがあり、ほっておくとパンパンに膨れて、乳房炎です。傷をきちんと手当してやらないといけないうです。

夏場、放牧しておく、交尾して子がつくんです。シラミがよくついて、薬品を入れた浴槽の中に羊を歩かせることもしました。家に、育てた綿羊で作った布団がありますよ。

そのうち、採算が合わないとかで、組合を抜ける人が出てきて、最後は整理に大変でした。個人の所有地でないので、手続きが大変でした。大人数で一つのことをやるのは難しい面もありますよ。一人なら 50 頭ぐらい世話してたらやっていけたでしょうね。

今は、東洋の高橋祐之さんがえりも短角牛を育てている草地です。厩舎は、昔のをそのまま補修して使っています。道々沿いの暴風壁は、このとき取り払われてしまいました。

夏に草を刈って、干してコンブまるきみたいに梱包作って冬に備えました。羊は冬でも、放すと雪を掘って枯れ草とか食べてました。

冬は、夏の放牧と違って、各家に帰すんです。日中放していると崖のすぐ近くまで行って、草を食べていておっかなかったもんです。夕方になると勝手に戻ってきて、めえ～、めえ～って鳴くんです。かわいかったですよ。



襟裳岬での羊の放牧（昭和 30 年代半ば）

トラックを購入

昭和 40 年には、札幌まで車の免許をとりに行って、トラックを買って、仲買などをしました。人に使われるより、自分でやって、人を使って商売をしたかったんでしょう。

薪を運びました。苦別からとかね。病院にも送りましたね。高校受験の日、雪で受験生とか家族を乗せて、走りました。止まるといけないからって、みんなスコップとか持ってね。

磯舟を目黒までまわすのが 3000 円だったかな。磯舟の修理とか、新造船を持ってくるとか、目黒の船大工は中野さんに佃さん。黄金道路は充分走れましたよ。でも砂利道で、前のトラックが跳ねた石で、立て続け

に 2 回、フロントガラスが割れたことがあります。

あと、ケガニを買って売りに歩いたり、サケを 1 トン買って、虎杖浜まで売りに行ったり、夜出て、夜明け前に帰ってきて、コンブ採ってたことありますよ。何回かね。

ツブ買って、トウダイツブ、ケツブもちょびっと、トラックに板で囲いして、山盛りにして、今みたいにフォークリフトなかったから、スコップで載せてね、様似まで運びました。まだ、商いしている水産会社もあります。

仲買してましたから、「買ってけれ」って連絡あると買ってやってね、2%の口銭もらってやってました。

砂利道走って、パンクしても、全部、自分でなおしました。

クジラの漂着

昭和 17～18 年、今の保育所の裏に哨戒塔があって、見張りをしていたんです。すると沖合いが少し変わってるんです。眼鏡（双眼鏡）でのぞくと、白波がたっていて、「潜水艦が来るぞ！」って、知らせたら、中から人が出てきて、眼鏡を覗くと「潜水艦でない、クジラだ」って、みんなで行ったんです。するとゴンドウクジラがたくさん岸に寄っていて、中には岩の上や浜に上がっているのもいる。大きいやつも、小さいやつもいました。ちょうど今の昆布小屋の前の浜（えりも岬漁港の庶野側の浜）です。全部で 80 ぐらいかな。

岬の部隊には権藤隊？宇佐美隊？がいて、やってきて肉を持っていきました。岬の塹壕掘った部隊です。所々の地下に通信施設もあったんです。哨戒塔近かったから、仲良くしてもらいました。

他の部落からも来て、持っていきましたね。あまった肉は塩をして砂に埋めておくと 1 年以上食べることができました。白身（脂）もこりこりしておいしかったです。

クジラも種類によって違うのか、白身がしゃわしゃわして、おいしくないものもいました。塩して砂に埋めてもうまくなかった。

アザラシ・トド肉

アザラシの肉は今の季節（2 月頃）が一番おいしいんです。一度に 4～5 頭捕まえたこともあります。味噌鍋にしてね。大きな鍋にこさえて、近所に「こい！」って、声かけるんです。集まってくると「こんな大きな鍋にこさえて、誰が食べるの～」と言いながらみんな三平椀に 3 杯も 4 杯も食べて、鍋はいつも空になりました。

金丸さんや三浦さんがトドを獲ったってことがわかると、岬中の店の豆腐がなくなるんです。鍋用ですよ。競争でした。薄皮にくるんだトドの肉が一つ 300 円でした。



アザラシ猟（昭和34年、大泰司紀之氏撮影）

オットセイもおいしいです。オットセイもトドも脂がうまいです。10年ぐらい前に羅臼でトド肉たべたけどおいしくなかったですね。

#### 鮮魚販売

鮮魚で商売しようとしたこともありました。組合の敷地内に水槽を設置しようと申請しましたが、公共の場であることから実現しませんでした。港から遠ければ、揚水に経費がかかるので、あきらめたことがあります。

これやったら儲かるってことを考えてました。

#### コンブ採り～襟裳採り

7月に1回「襟裳採り」がありました。

前の日に、明日は襟裳採りってなると、夜中の12時1時から飯を炊いてね、3時ごろから船を動かして、みんなが船を下ろす“ゴロゴロ”って音が聞こえてね、さあおろすぞって。帆を張って岬に向かうんです。

沖のクキトの周りに集まってね、旗持ちも岬に行っただけ、旗持ちのラッパの合図で一斉に採るんです。採るのは岬の沖のクキトから奥だけ。船の縁に板して、コンブ少しでも多く載せれるようにして、目一杯積んでくるんです。1時間もすれば一杯になる。

中には場所悪かったりして3時間もかかる人はいるけれど、この日は、帰ってくると終わり、量が多くても少なくとも1回だけでした。

以前は、一度集まることなしに襟裳採りしていた記憶があります。平等を期すためか、一ヶ所に集まって、合図で始めることになったのでしょうか。それもヤマハの7馬力の船外機が入ってきてなくなりました。昭和40年前後でしょう。

子どもの頃、砂の上にコンブを干して、引いた思い出がありますが、ほとんど砂利の上に刈った草を敷いて、飛ばないように網（綿製）をかぶせてコンブを干しました。草はその辺に生えているわら（草：テンキグサなど）ですね。網は2年もするとぼろぼろになりました。

コンブの旗持ちやらせてもらってますが、うまくいったときの周りの人のうれしそうなお顔が良くてね、それがうれしくてやっているようなもんです。夜の12

時に起きて空見たり、1時2時に見たり、苦別まで走ったり、岬まで行ったりします。

手当てが全期間で8万円ぐらい。他の五単協との調整もあるのですが、この手当てでは、なかなかやるという人は出ないでしょうね。将来のことをもう少し考えないと思いました。

#### 北洋船の遭難

北洋にサケマスの流し網に船頭で出ている時、仲間の船が遭難したことがありました。岬の人が船頭でした。

国後の方で漁をしていましたが、針（気圧計の）が急に立ってきたんです。海はべた凧でした。天候が急変するぞと思い、他の船に連絡して「帰るぞ！」って言っても、聞く船は少なかった。

私は、急いで船を色丹まで走らせました。そこでもべた凧なんです。200反ある網の半分、100反だけ入れました。仲間からは「全部入れよう。」との声もありましたが、半分にしておきました。結構、漁もあつたんです。

急に天候が悪くなってきて、急いで花咲港まで戻りました。花咲近くは大きな波でようやく港に入れたものです。若い者は丘で遊ぶと言ったので魚の一部を降ろし、お金に換えました。私は心配で船に残り、無線を聞いていました。

国後周辺は大時化で、逃げるにも逃げられない状況だったようです。シーアンカーを使って難を逃れようとしていました。マストも折れる風です。

翌朝、無線基地も船との交信ができないと知りました。助けに行きたくても、30mを越える風と大波、その日は出港できません。翌日の3時ようやく仲間の船と出港しましたが、1日中探しても見つかりませんでした。

私は、舵輪を若い者に持たせたことはありません。それを最後に私は船を降りました。

#### 出稼ぎ

昔、冬はみんな出稼ぎでしたよ。船に乗れる人は船に乗ってね、北洋のサケマスが多かったんでしょう。あと、土方ね。営林署の仕事でみんな助かったんじゃないですか、女の人も働けたからね。

（平成17年2月1日採録、中岡俊子）



復元したマホ（ま帆）の試走（平成15年）

## 金子亦雄 昭和2年(1927年)生れ

収録の範囲：小学校通学から上歌別(豊幌)開拓の歩み  
上歌別で出生

私は昭和2年10月26日、ここ上歌別で出生した。10人兄弟姉妹である。物心ついた昭和6~7年頃には本町への道路もあって、父は山林で薪材を切り、それを本町市街に運搬して売っていた。歌別は幌泉尋常高等小学校の通学区域だった。しかし本町の小学校まで6kmの徒歩通学は、低学年には遠過ぎるということで、尋常科4年までは歌別分校で学んでいた。学校へは高学年が低学年の面倒を見ながら、どんな日でも徒歩で登下校していて、馬車に乗って通学した記憶はない。

歌別分校が独立校に

しかし、上歌別奥地の開拓が進んで児童数も増え、最遠8km通学の高学年児童もいたことから、高松勇策さんや岩間幸次郎さんら歌別地区の有志が、歌別分校の独立を村に運動していた。その結果、昭和12年4月に歌別尋常小学校が開校した。私が4年生のときである。当時は1クラス20人以上もいて学校内は活気があった。兄の初男は、独立校での最初の6年卒業生(第1期生)である。

戦後間もなくの昭和21年頃には、頭もいい走っても早い佐々木隆人さんらが中心となって青年団活動が活発になり、兄の初男や浜歌別の佐々木卓治さんらが歌別青年団を結成していた。毎年の青年陸上競技大会には、上歌別からも徒競走選手が出て、青年大会は村の一大イベントであった。

上歌別の先駆者

上歌別開拓の先駆者は、三浦修蔵さんの先祖の弥助さんで、修蔵さんは5代目である。明治の半ばから大正時代には、弥助さんは、秋になると、どこからかアイヌやメノコを連れてきて、川のそばに茅の小屋を造って住ませ、秋から冬にはアイヌに鉄砲を持たせてシカやクマの狩猟をさせ、毛皮などの商売をしていたと聞いている。

酪農への転換

昭和10年代に入ると入植者も増え、同12年には、上歌別地区が農事組合を組織して、畑作から酪農へ本格的に転換することになった。

同14年には、岡辰吉さんらが中心となって農事実行組合を創り、荻伏村から乳牛6頭を導入した。岡さんらは、荻伏で買った牛を上歌別まで歩かせて連れてきたが、その途中、牛が疲れて道端に寝込んでしまっ

て閉口したという。  
戦時中には酪農も盛んになって、同17年、上歌別にも興農公社の集乳所ができ、岡辰吉さんが管理を任

されていた。各農家からは午前6時までに集乳缶を馬車に積んで運んできていた。それは戦後も続いていたが、道路が整備され、昭和32年には、ホクレンの集乳車が農家を巡回するようになって上歌別集乳所は廃止された。



牛乳缶

豊幌に入植

戦後の引揚者の入植と農地改革で、昭和26~27年頃には、上歌別から豊幌にかけて総戸数が48戸にも増えた。私は豊幌地区に入植したが、同地区には8戸があった。薪出しや炭焼きをして生計を立てていた人たちも、土地を耕して畑と認められると国から補助金が交付され、酪農家は搾乳牛を飼い、草地として認められると1反3000円の補助金が出た。その頃、豊幌に入植していた人には、小林幹雄さん、石丸さん、山根さん、浅木さんも浜歌別から入植してきた。

昭和39年には、幌泉開拓農協が事業主体となって豊幌に電気が導入され、ようやく文化の恩恵に浴した。同42年5月には、豊幌を含む上歌別地区が酪農経営30周年と乳牛100頭達成を祝った。昭和12年に、上歌別に農事組合を発足させて酪農に転換してから30年が経過していた。

しかしその後、過剰投資や乳牛の不受胎など、さらに高台に位置する豊幌は土地も痩せていて、そのうえ風が強かったなどの悪条件が重なり、離農する開拓農家が増えて、上歌別の酪農理想郷づくりは頓挫した。

現在は4戸が黒毛和牛を飼育している。私は60町歩の農地を持って30頭を飼育している。

(平成17年3月採録、神子島清八)



乳牛：ホルスタイン



## 佐藤幸雄 昭和3年(1928年)生れ

### 佐藤家のルーツ

私の祖母は石川県の能戸半島生まれで、祖父善助はえりも生まれである。祖母の両親は明治3年にえりもへ移住している。私の兄弟は8人で鬼籍(過去帳)にはすでに3人、地元に住んでいるのは川村嘉子一人である。生まれた家は、現在の植木さん宅の隣りで、幌泉川に面している角地の場所である。

### 幌泉郵便局に勤務

私は幌泉国民学校高等科を卒業後、すぐ幌泉郵便局へ就職した。きちんと就職しないと軍需工場へ徴用されるとのことから、郵便局の待遇は良くないと聞いていたが、同級生6人(男女各3人)とともかく就職した。局員が次々と転職したり出征するために、郵便局は常に欠員状態であった。同時に郵便局へ就職した6人も漁組など待遇の良い職場へ転職して去り、最後は私だけが残った。

亡くなった植木四郎さんも最初は郵便局に就職して漁組へ転職した。

私が郵便局に勤務して間もなく、最初に集配業務に付いたのは昭和17年で、以前は集配には自転車を使用していたが、その頃から自転車が故障しても修理部品が無くなったため、徒歩での集配を余儀なくされてきた。

夜7時頃、様似から郵便輸送車が到着すると、直ちに区分け作業が始まり、広尾、猿留、庶野、小越各局に区分け、さらに自局の配達区域内を近浦から東洋のエンドモ地区まで、地区別と戸別配達順に区分けした。帰宅は毎日夜9時頃であった。

配達には、どんな天気でも毎日午前6時に徒歩で郵便局を出発した。私の受持ち区域が東洋のエンドモまでで、道路から脇道にそれて建つ住宅が多いことから、重たい郵便鞆を肩に掛け、ときには小包を手につけて歩き続けた。東洋から帰ってすぐに、今度は上歌別地区へ配達に出かけた。帰局の時間は、毎日午後3時過ぎになった。

自転車は電報配達用に一台だけしかなく、今考えると、信じられないような配達事情であった。疲労して帰ってきてからも、容赦なく宿直業務が割り当てられた。宿直では、町内の漁場へ本州方面から出稼ぎに来ていた人たちへの召集電報が多くなっていた。召集令状(赤紙)を受け取った故郷の家族からの緊急の知らせである。

笛舞の漁場に届けるときは、扇谷、藤田、岩船、サッコツには山根など多くの漁場が点在していたので、暗い真夜中にその場所を探すのに難儀したのを覚えている。何がなんでも、早急に届けなければならなかった。そのような土・日曜日のない外勤を一年間経験

した。労働条件などなかった時代であった。

その頃、大内フミエさんや小松一康さんが窓口で電信業務に就いていた。私は、内勤に変わるにはこれだ、と決め、集配から帰ってからモールス符号の電信練習に励んだ。翌18年には、貯金・保険外務に回され、上歌別では町内会の集会の場所で、貯金や保険の勧誘をしたものである。

昭和20年、終戦間近には郵政電信業務試験に合格して、晴れて内務の電信係になった。そのころは、警戒警報や空襲警報が頻繁に入電する多忙な時期であり、警報が発令されても局外へ避難することができなかった。悪い時期に電信の資格を取得したと後悔したものである。

警報は役場や警防団へ直ちに通報する義務を課せられていた。警報受信後は直ちに「OK」を返信しなければ懲役刑に処せられることになっていた。「ツルケハ」は「津軽海峡方面、警戒警報発令」の暗号だった。

あるとき、あまりの恐怖と緊張から、敵機の爆撃中に屋外へ出て避難しようとしていたら、榎田道勇警防団長と広島獣医さんが大法寺の坂を下ってきて、「牧野組合事務所から煙が上がっている。消火を手伝え。」とのこと。

畑を斜めに横切って駆けつけたら、敵機からの焼夷弾直撃を受けて火災が発生し、管理人の竹内亨さんが消火に懸命だった。その頃、家々の前には消火用の水樽と砂袋が置いてあったが、事務所前には砂がセメント樽に入れてあった。それを抱き抱えて事務所内に運び入れて消火に使った。

後で見たら、とても重たい物で「火事場の馬鹿力とはこのことか。」と納得した。神田さん向いの坂田達さんの実家もそのとき焼夷弾火災で焼失した。

その後、扇谷さん裏の防空壕へ避難しようと走ったら、入口はすでに、畳でがっちり塞がれていたので入れず、カネサ吉田商事の納屋の石垣に身を隠していたら、敵機の爆音と一緒に機関銃の薬莖が、カチンカチンと音を立てて石垣に当たってきた。

藤原順子さんが、お産で寝ていて、機銃掃射で足が負傷したのはそのときである。

そんなことで、大法寺の付近にあった村の防空壕には一度も入らずに終戦を迎えた。外勤集配が徒歩のみの時代は、戦後5年ほど続いていたと思う。



本町市街地(昭和50年代)

転勤で庶野郵便局長へ

私に最初に転勤の話がでたのは局長代理のときの昭和 37 年頃で、檜山管内の今金郵便局へであった。私は転勤に応ずる意思があったが、3 年前に待望の住宅を新築したばかりだったので、妻が転勤に同意しなかったため、諦めることにした。

次は断ることのできない職務命令で、昭和 43 年 4 月に庶野郵便局長を命ぜられた。そこで、庶野の現在の郵便局の裏手に再び住宅を新築した。そのときの庶野郵便局は、当時の長岡旅館の前の国道沿いで、現在の庶野生活館の場所であった。本町の住宅は、えりも郵便局の後任の局長代理に貸した。

庶野郵便局の前任局長は、三石町から転入した阿部繁夫さん（昭和 26 年 2 月任命）で、阿部さんは、庶野局の創始者・長岡家の娘さんの夫であった。

庶野局初代局

初代局長は長岡庄兵衛さん（明治 16 年 6 月任命）で、私は第七代局長になる。

私が庶野局長のとき、長岡旅館を改築するとのことで、阿部さんの息子さんが、郵便局員の応援を得て、蔵から持ち出した書類を前浜で焼却していたが、私は長岡家は旧家なので、もしや古文書類も含まれているのではと察知し、局員に古い書類はまとめておくように指示していた。猿留山道の工事仕切書など、貴重な資料はそのとき発見して確保したものである。その大部分は町郷土資料館に寄贈した。

庶野郵便局での仕事で印象に残るのは、郵便貯金の勧誘であった。漁協の影響が強い地域で、多くの組合員は漁協信用部を利用していたが、その頃、郵便局の利息も良く、100 万円を 10 年定期貯金にすると、元利で 216 万円になる時代だった。

そんなことから、区域の家庭をくまなく周って、漁協の利用も大事だが、安全・安心の為の、郵便局定期貯金の有利性を PR した。それが功を奏して、前年の倍近い実績をあげた。それが、えりも郵便局長への異動に繋がったのではないかと考えている。

えりも郵便局長へ

えりも郵便局長を拝命したのは昭和 51 年 6 月である。栗山亀一局長の後任であった。電信電話業務は昭和 45 年に、えりも電報電話局に移管されていて、9 年前の在職時に比較すると、職員数は四分の一に減少していた。加えて昭和 33 年に改築した局舎も老朽化と、郵政事業の近代化を図るためにも局舎の移転改築が必要な時期にきていた。

旧役場向いにあった旧郵便局の土地は、旧逓信省用地であった。明治 17 年、初の幌泉電信分局が建てられた場所である。最初の幌泉郵便局は現在の国道沿いの内藤商店の場所であった（一説には芳賀商店の裏



沢町（昭和 40 年頃）

手）

それが明治 36 年 7 月に幌泉郵便局と幌泉電信分局の合併によって、旧役場前に幌泉郵便局局舎を大内守三が建てて局長に就任した。

移転改築する局舎用地は、町が所有していた旧洞医院跡地で、町との等価交換であった。新局舎が現在の住吉神社鳥居前に完成したのは、昭和 62 年 10 月である。

落成式には元職員も参加して、町福祉センターで行った。祝賀会は地元有志による協賛会が主催し、私が謝辞を述べて、局長として晴れがましい日であった。

（平成 18 年 3 月採録、神子島清八）

佐藤幸雄さんのお話～その 2

国民学校時代

小学校から国民学校に変わって、修学旅行は止める、鍛錬旅行をせい～ってね、一番初めに手を上げたのは、赤心社でまとまっている荻伏の学校、幌泉まで歩いて来たんです。そのお返しに、僕らが荻伏まで行かなきゃならない、上樫武雄先生が「靴を脱げ、靴下と靴が当たるところに、持ってきた石鹸を塗るように。」って、本当に足に豆ができませんでした。残った石鹸はポケットに入れて持っていましたね。1 日で荻伏まで行って、浦河に戻って、昔の支庁前、秋田屋（中央旅館）に泊まりました。

ところが大騒動だったんです。幌泉の人は牛乳って飲んだことがない。荻伏の学校は牛を飼っていた。酪農やって糞尿で、カボチャやイモを作っていた。荻伏についたらカボチャの煮たもの、牛乳がでる。牛乳飲みながら、カボチャ食いながらでしょ。牛乳を飲むと腹が痛むことなんか知らないですよ。牛乳飲んで、おかわりして、食べて。浦河まで歩き出したらお腹がグルグルギューギューなるわけです。みんな体中の力で、絞めてね、きつくきつく自分の体を絞めて、もらさないようにね。中央旅館に着いたらトイレから玄関まで、みんな、64 名が行列。とにかくがまんして、がまんして。隊列を崩さないようにね。男子も女子もですよ。